

障害の多様化に対応した
ワークサンプル幕張版（MWS）
改訂に向けた基礎調査

2013年 3月

独立行政法人高齡・障害・求職者雇用支援機構
障害者職業総合センター

障害の多様化に対応した
ワークサンプル幕張版（MWS）
改訂に向けた基礎調査

まえがき

障害者職業総合センターでは、「障害者の雇用の促進等に関する法律」に基づき、わが国における職業リハビリテーション・サービス機関の中核として、職業リハビリテーションに関する調査・研究をはじめとして、様々な業務に取り組んでいます。

本書は、当センターの研究部門が実施した「障害の多様化に対応したワークサンプル幕張版（MWS）改訂に向けた基礎調査」の結果を取りまとめたものです。ワークサンプル幕張版（MWS）は、平成11年度から開発が始まり、平成19年度に市販化され、現在、広域・地域障害者職業センターや病院、特別支援学校、福祉施設等様々な関係機関で活用されています。本研究は、開発開始から10年が経過し、様々な障害種類の利用者に活用されている現状や、そこから発生する改善の要望等を取りまとめました。今回得られた結果は、基礎資料として、今後ワークサンプル幕張版を改訂する際に活用することとしております。

この研究を進めるに際しては、調査にご協力くださった広域・地域障害者職業センターの障害者職業カウンセラーの方々をはじめ、関係機関の方からも多大なご協力を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

本書が多くの関係者の方々に活用され、わが国における職業リハビリテーションをさらに前進させるための一助になれば幸いです。

2013年3月

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構

障害者職業総合センター

研究主幹 下矢 雅美

執筆担当：（執筆順）

内田 典子	障害者職業総合センター 研究員	概要、第1章、 第2章、第3章、 終章
若林 功	障害者職業総合センター 研究員	第3章第1節、第3節
森 誠一	障害者職業総合センター 主任研究員	第3章第2節

謝 辞

本研究を実施するにあたり、広域・地域障害者職業センター及び関係機関の皆さまから多大なご協力を賜りました。

第2章では、広域・地域障害者職業センター及びMWSを購入し活用してくださっている関係機関の皆さま、第3章では、以下に示す皆さまにご協力いただき、アンケート調査及びヒアリング調査からMWSの活用状況及び改訂に関する貴重な意見・要望を収集することができました。

お忙しい中、ご協力くださった皆さまに、ここで改めて御礼申し上げますとともに、心より感謝申し上げます。

第3章 ヒアリング調査協力者

関係機関

氏名	所属等
今野 政美	神奈川リハビリテーション病院 職能科 職員
堤 若菜	公益社団法人やどかりの里 あゆみ舎 管理者
大畑 智里	静岡大学附属特別支援学校 高等部 教諭

広域・地域障害者職業センター

氏名	所属等
中山 秀之	国立職業リハビリテーションセンター 障害者職業カウンセラー
小池 磨美	千葉障害者職業センター 主任障害者職業カウンセラー
安房 竜矢	埼玉障害者職業センター 主任障害者職業カウンセラー

障害者職業総合センター

氏名	所属等
池田 優	障害者職業総合センター 職業センター 障害者職業カウンセラー

専門家

氏名	所属等
勿田 文記	株式会社日本エコカーボン（元 当機構職員）

研究担当者

本研究は、障害者職業総合センター障害者支援部門で担当した。

研究担当者・研究担当時の職名は下記のとおりである。

白兼 俊貴	障害者支援部門	統括研究員
森 誠一	〃	主任研究員
若林 功	〃	研究員
内田 典子	〃	研究員

目 次

概 要	1
第 1 章 研究の背景と目的	
第 1 節 研究の背景	5
第 2 節 研究の目的・方法	7
第 2 章 MWS 活用及び改訂希望に関するアンケート調査	
第 1 節 アンケート調査の目的と方法	13
第 2 節 広域・地域センターにおける MWS 活用の現状	14
第 3 節 関係機関における MWS 活用の現状	40
第 4 節 MWS 改訂の希望	55
第 5 節 まとめ	64
第 3 章 MWS 活用及び改訂希望に関するヒアリング調査	
第 1 節 ヒアリング調査の目的と方法	69
第 2 節 関係機関における MWS 活用の現状と改訂の希望	70
第 3 節 広域・地域センター等における MWS 活用の現状と改訂の希望	74
終章 今回の調査研究で得られた成果と今後に向けて	
第 1 節 今回の調査研究で得られた成果	83
第 2 節 今後に向けて	93
巻 末 資 料	
1 「ワークサンプル幕張版の活用状況に関するアンケート」(広域・地域センター用)	97
2 「ワークサンプル幕張版の活用状況に関するアンケート」(関係機関用)	105

概 要

本報告書は、「障害の多様化に対応したワークサンプル幕張版（MWS）改訂に向けた基礎調査」の研究成果について取りまとめたものである。

第1章では、本研究の背景と目的について述べている。

現在のワークサンプル幕張版（以下、「MWS」と言う。）は、事務作業、OA作業、実務作業に分類される13のワークサンプルによって構成され、作業を遂行する上で必要となるスキルや、障害の補完手段、補完行動の獲得が可能となるような訓練機能を有しており、効果的、効率的な職業リハビリテーションサービスの提供に役立つものである。

MWSは平成11年度から開発を始めたが、当初は、高次脳機能障害を主たる活用対象と想定していた。しかし、平成19年度の市販化以降、精神障害、発達障害等多様な障害の利用者に対して活用されるようになっており、現在のMWSの内容では、量的・質的に十分ではないとの意見も聞かれるようになってきている。

そのため、本研究においては、MWSを実際に活用している広域・地域障害者職業センター（以下、両者をまとめて「広域・地域センター」と言う。また、広域障害者職業センターのみの場合「広域センター」、地域障害者職業センターのみの場合「地域センター」と言う。）の障害者職業カウンセラー及びMWSを購入し活用している関係機関の支援者に対し、活用の実態と共に今後の職業リハビリテーションサービスの展開を考える上で、MWSにどのような改訂が望まれているのか調査を行い、MWSの的確な改訂の一助とするため、その内容について整理、検討することを目的とした。

第2章では、広域・地域センターの障害者職業カウンセラー及びMWSを購入し活用している関係機関の支援者を対象に実施したアンケート調査について、まとめている。

現在の活用状況をまとめると、MWS簡易版は、広域・地域センターでは上位に挙がるワークサンプルが「数値入力」「文書入力」等のOA作業や「数値チェック」等の事務作業中心であること、担当する障害種類によりさらにピッキングが加わり、全体的によく使うワークサンプルとそうでないワークサンプルに2極化している傾向にあった。一方、関係機関では、広域・地域センターにおいて活用の割合が低い「コピー&ペースト」「ファイル整理」「ラベル作成」「ナプキン折り」「重さ計測」「プラグ・タップ組立」が、身体障害を除いた各障害において広域・地域センターより20%以上高い割合で活用されていた。また、知的障害では、OA作業や事務作業を活用している広域・地域センターと異なり、関係機関は「プラグ・タップ組立」「重さ計測」が活用順位の上位となり、実務作業での評価を行っているのが特徴であった。総じて、両者ともにOA作業や事務作業が中心であるが、活用の割合は関係機関の方が高いこと、知的障害者に対する活用の仕方に特徴があることが示された。

MWS訓練版は、MWS簡易版ほどの活用割合の違いは見られなかったが、身体障害を除き「ナプキン折り」「重さ計測」「プラグ・タップ組立」といった実務作業に関しては関係機関の方が、身体障害・発達障害を除き「検索修正」や「作業日報集計」に関しては、広域・地域センターの方が活用していることが分かった。また、MWS簡易版と同様、知的障害においては、広域・地域センターがOA作業や事務作業を、関係機関は「プラグ・タップ組立」「重さ計測」が活用順位の上位となり、実務作業を活用している割合が高かった。

こうした活用状況の背景には、広域・地域センターにおける職業相談・職業評価場面では、“評価”そのものとその結果に基づいた“自己理解へのアプローチ”のために、職業準備支援(自立支援)等の各種事業では、それに加えて「作業遂行力向上」や「適正行動の習慣化」といった“訓練”のための活用が、一

方、関係機関においては、活用の割合からどちらかという“評価”のための活用が中心ではないかと考えられたことがある。実施の効果については、広域・地域センターがほとんどの項目で「効果があった」と回答しているのに対し、関係機関からは「効果がなかった」とする項目がいくつかあり、違いがあった。本調査では、その原因を特定することはできなかったが、実施方法や実施後の利用者への対応の違いで効果の実感に差が出たのではないかと推測される。また、直接利用者に実施する機会がある関係機関の回答者の方が「単独で実施」することや「利用者に合わせて作業課題を選択」することに自信を持っており、「結果の分析・解釈」「フィードバック」については、普段から他のワークサンプル等での経験を積んでいる広域・地域センターの回答者の方が自信を持っているという違いがあった。また、両者とも共通して「施設内外の支援者へ研修する」ことについては、自信がないとする回答が多かった。

広域・地域センター、関係機関共に、今後のMWS改訂にあたっては、“グループでできる作業課題”、“社会的スキルを使う作業課題”、“能力の反映の明確化”、“様式の充実や結果の整理方法の簡素化”について希望があることが分かった。その中で、“グループでできる作業課題”には、これまでのように単独作業で完結せず、既存のワークサンプル活用をはじめとして、いくつかの作業を複数人で実施する「流れ作業」が求められていることが分かった。また、“社会的スキルを使う作業課題”には、質問・報告・相談・依頼等職場の中で必要となる最低限のコミュニケーションスキルを必要とする作業が求められていた。また、既存ワークサンプルにもMWS訓練版のレベルやブロック数の増加が求められているものや、実施方法や集計結果の変更（パソコン上での実施を紙ベースで行う、またはその逆で行う等）が求められているものがあった。

以上、新規ワークサンプルのキーワードとして、“グループでできる”、“社会的スキルを使う”ものが、既存ワークサンプルは、現在よりもボリュームを増やす・より広い対象者に適用するため実施方法のバリエーションを増やす方向が示されたといえるだろう。

なお、現行ワークサンプルのように、単独作業で完結するワークサンプルとして、「ファイリング」、「郵便物仕分け」、「テープ起こし」、「清掃に関する作業」、「おもちゃ等の組立」が新たな希望として挙げられた。

第3章では、MWSを長く活用している関係機関の職員及び広域・地域センターの障害者職業カウンセラー等を対象に実施したヒアリング調査について、まとめている。

関係機関の職員からは、MWS簡易版・MWS訓練版共に評価や訓練に基づく「作業能力の向上や作業能力の変化の把握」「補完手段の獲得」「障害受容の促進」だけでなく、「職業理解を促すための作業体験として活用」、結果の活用方法として「関係機関との情報共有」「企業の障害特性の理解や受入れの不安感の軽減」に効果的であること、現行ワークサンプルに関する改修やより実際の仕事に類似した新規ワークサンプルの開発、実務系ワークサンプルの充実、グループでできるワークサンプルの開発に関する意見が挙げられた。

一方、広域・地域センターの障害者職業カウンセラー等からは、MWS簡易版は主に職業評価で活用していること、MWS訓練版は職業準備支援やリワーク支援での作業課題の活用、補完手段を検討する材料としての活用がなされていることが報告された。また、改訂の希望としては、“作業種目の拡大”だけではなく、“作業の難易度を調整してほしい”という要望と、“複数のワークサンプルを一連の流れに組み合わせた臨場感のある作業”、“作業プロセスを自発的に考える作業”、“社会的スキルが必要な作業”に大別できた。ただし、“複数のワークサンプルを一連の流れに組み合わせた臨場感のある作業”については、開発担当であった刎田氏から、グループ構成・支援者側のチェック体制・課題の作り込みの複雑さ等、実現にはクリアしなければならない課題があることが指摘されており、改訂にあたって今後も検討が必要である。

終章では、本研究の取り組みを振り返り、今回の調査研究で得られた成果と今後に向けた考察をまとめている。

今回の調査研究で得られた成果では、第2章のアンケート調査における MWS 活用の現状についてまとめた他、第2章及び第3章で得られた MWS の改訂希望に関する意見を集約して、「OA 作業」「事務作業」「実務作業」「流れ作業」「その他」の5つのカテゴリに分類し、さらに、それぞれに求められている内容を“既存ワークサンプルの拡充”、“新規ワークサンプルの開発”、“マニュアル・集計結果の改修”等にまとめた。

今後に向けた考察では、①調査結果から広域・地域センター及び関係機関双方に改訂の必要性が認識されていること、②MWS が他機関や事業所との連携のツールとして使われている現状から情報共有のために分かりやすい様式類の整理が求められること、③MWS を活用しても「障害の自己受容」「自己認知の促進」「作業上の適正行動の習慣化」に効果が認められず、「実施した結果の解釈」や「結果のフィードバック」に自信がないとする関係機関の存在から、開発当初から推奨している MWS の活用のあり方や MWS 以外のトータルパッケージのツール活用について、周知が必要となっていること、④③に関連し、トータルパッケージの紹介方法や研修の現状から、改訂を進めるだけでなく、研修のあり方についても再考の必要があること、の4点をまとめている。

第1章

研究の背景と目的

第1章 研究の背景と目的

第1節 研究の背景

1 MWS（ワークサンプル幕張版）とは

(1) MWS の概要

MWSは、「職場適応促進のためのトータルパッケージ（以下、「トータルパッケージ」と言う。）」を構成する支援ツールの1つである*1。

開発に際しては、①様々な職務に対応できること、②職業能力を評価すること、③障害により現れる職業上の問題に対応できるよう訓練機能も有すること、④作業を行う上で必要となるスキルや職務遂行を可能とする環境（補完方法等を含む）を明らかにできること、の4つを基本的な開発コンセプトとした。

こうしたコンセプトの下、MWSには、主に作業体験や作業能力の初期評価に用いられる「MWS 簡易版」と、シングルケース研究法を用いて作業能力の向上や補完方法の活用の指導、作業やストレス・疲労への対処行動等のセルフマネジメントスキルの確立に向けた支援に用いられる「MWS 訓練版」が開発された。いずれも、OA作業、事務作業、実務作業に大別される13種類のワークサンプルから構成されている。表1-1にワークサンプルの構成とその内容を示す。

表 1-1 MWS におけるワークサンプルの構成と内容

	ワークサンプル名	内 容
O A 作 業	数値入力	画面に表示された数値を、表計算ワークシートに入力する。
	文書入力	画面に表示された文章を、枠内に入力する。
	コピー&ペースト	画面に表示されたコピー元をコピー先の指定箇所にペーストする。
	検索修正	指示書に従ってデータの検索をし、内容の修正を行う。
	ファイル整理	画面に表示されたファイルを、該当するフォルダに分類する。
事 務 作 業	数値チェック	納品書にそって、請求書の誤りをチェックし、訂正する。
	物品請求書作成	指示された条件にそって、物品請求書を作成する。
	作業日報集計	指示された日時・人に関する作業日報を集計する。
	ラベル作成	ファイリング等に必要なラベルを作成する。
実 務 作 業	ナブキン折り	折り方ビデオを見た後、ナブキンを同じ形に折る。
	ピッキング	指示された条件にそって、品物を揃える。
	重さ計測	指示された条件にそって、秤で品物の重さを計量する。
	プラグ・タッポ組立	ドライバーを使い、プラグ等を組み立てる。

MWSの活用にあたっては、①様々な作業の模擬体験を行うことによる職業情報の提供、②作業特性の把握、③作業における補完方法等の習得、④作業遂行力の向上等を目的としている。

MWS 簡易版は、どのワークサンプルも MWS 訓練版の全ての難易度を網羅し、比較的短時間で 13 種類のワークサンプルを実施できるよう作成している。そのため、利用者自身が自分に合った作業や興味のある作業を見つけることや、利用者の作業上の特徴を確認することができるようになっている。一方、MWS 訓練版は MWS 簡易版と同様のワークサンプルを用いるが、各ワークサンプルに難易度別の段階を設け、訓練に活用できるよう課題量を増やしている。また、これらを訓練課題として用いることで、補完方法や個々に必要な環

*1 職場適応促進のためのトータルパッケージ：①WCST（ウィスコンシンカードソーティングテスト）、②M-メモリーノート、③MWS（簡易版、訓練版）、④MSFAS（幕張ストレス疲労アセスメントシート）、⑤グループワークから構成されている。

境整備を特定できるよう工夫している。

(2) MWS 開発から活用までの経過

MWS 開発から活用までの経過は、以下の通りである。

まず、「精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（平成 11 年度～15 年度）」の中で、MWS を含め「職場適応促進のためのトータルパッケージ」の開発を行った。次に「事業主、家族等との連携による職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（平成 16 年度～18 年度）」において、トータルパッケージの汎用性を高めるため外部協力機関にトータルパッケージを提供した。さらに「特別の配慮を必要とする障害者を対象とした、就労支援機関等から事業所への移行段階における就職・復職のための支援技法の開発に関する研究（平成 19 年度～21 年度）」において、様々な関係機関と事業所との連携によるトータルパッケージを活用した有効な支援技法の開発のため、外部協力機関にトータルパッケージを提供した。それぞれの研究において、試行・活用の報告を得て、調査研究報告書にその成果をとりまとめている（障害者職業総合センター, 2004a & 2004b & 2007a & 2007b & 2010a & 2010b）。

(3) 活用状況

MWSは平成15年度に広域・地域センターに配置され、その後平成19年度に市販化されており^{*2}、現在は広域・地域センターをはじめとした職業リハビリテーション機関だけでなく、病院・特別支援学校・福祉施設といった関係機関や事業所において広く購入されている。

各機関におけるMWSの活用状況に関しては、平成19年度に広域・地域センターに実施した調査がある（村山ら,2008）。この調査では、53センターから有効回答が得られた。身体障害・精神障害・知的障害・高次脳機能障害・その他の障害別にMWSの活用状況を調査しているが、どの障害においても活用頻度が高いのは、OA作業の「数値入力」「文書入力」、事務作業の「数値チェック」「物品請求書作成」「作業日報集計」、実務作業の「ピッキング」で、全ワークサンプル活用中これら6ワークサンプルが占める割合は、身体障害で83.7%、精神障害で78.0%、知的障害で75.5%、高次脳機能障害で86.5%、その他の障害で80.3%と大部分を占めていた。つまり、配置後4年で活用頻度の高いワークサンプルと低いワークサンプルの2極化が見られたといえるだろう。また、開発当初は主に高次脳機能障害を有する利用者への活用を念頭に置いていたが、この調査からは、身体障害・精神障害・その他の障害（発達障害等）等幅広い障害種へ活用されていることも明らかとなった。さらに、改善要望等も尋ねているが、MWSに関しては、『難易度を上げる』、『問題数を増加させる』といった内容の充実を求める意見の他、『課題数が十分でない』との指摘も既に見られた。現在、この調査からさらに5年が経過しており、改訂の要望については様々な意見があるのではないと思われる。

一方、その他の関係機関や事業所に対する同様の調査は実施されていないため、活用状況は明らかになっていないが、職業リハビリテーション研究発表会等で活用事例の紹介が散見される。例えば、田中ら(2011)は、EAP機関において気分障害等による休職者に対する復職支援プログラムを開発し、その中でMWSを活用している。また、小川ら(2010)は、医療機関において高次脳機能障害者にMWSを実施し、その結果から「MWSのような就労の模範的作業課題の施行は、神経心理学的検査では数値化が難しい問題についての客観的評価と自己認識を促し、対象者の就労に対する動機づけができるという点で有用」とし、その効果を認めている。さらに、伊藤ら(2009)は、特別支援学校において、職場実習前から継続的に実習で行う作業に近いMWSのワークサンプルに取り組み、補完行動を身につけることができた事例を紹介しており、「企業ニーズに対応可

^{*2} MWS の販売委託先：株式会社エスコアール(<http://www.escor.co.jp/index.html>)

能な職業教育プログラム作りにもつながる」と述べている。以上のように、関係機関においては事例レベルに留まっているが、活用状況が報告されているため、活用している関係機関においても一定程度改訂への要望や意見があると思われる。

なお、平成15年度の広域・地域センター配置以降のMWSをはじめとしたトータルパッケージ活用について、職業リハビリテーション研究会で発表されている各機関の取り組みを章末にまとめているので参考とされたい。

第2節 研究の目的・方法

1 目的

現在のMWSは、事務作業、OA作業、実務作業に分類される13のワークサンプルによって構成され、作業を遂行する上で必要となるスキルや、障害の補完手段、補完行動の獲得が可能となるような訓練機能を有しており、効果的、効率的な職業リハビリテーションサービスの提供に役立つものである。しかし、上記のように対象障害の多様化が進んでいること、市販化以降購入者の活用実態は不明であることから、本研究においては、MWSを実際に活用している支援者に対し、活用の実態と共に今後の職業リハビリテーションサービスの展開を考える上で、MWSにどのような改訂が望まれているのか調査を行い、MWSの的確な改訂の一助とするため、その内容について整理、検討することを目的とする。

2 方法

(1) MWSを実際に活用している支援者に対するアンケート調査

広域・地域センターの障害者職業カウンセラー及びこれまでにMWSを活用した経験のある外部関係機関の支援者を対象とし、MWSの活用実態、現行ワークサンプルにおける改訂の希望、新規に整備すべきワークサンプル等について、アンケート調査を実施する。

(2) MWSを実際に活用している支援者に対するヒアリング調査

(1)のアンケート調査内容を基に、より詳細を把握するために、活用経験が豊富な障害者職業カウンセラー及び外部関係機関の支援者に対してヒアリング調査を実施する。

引用文献

伊藤 英樹・植松 隆宏・笹原 雄介(2009) PC業務遂行のための在学中からトータルパッケージを活用した就労支援の事例について、第17回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集。

村山奈美子・小松まどか・位上典子・小池磨美・野口洋平・加治雄一・加賀信寛・望月葉子・川村博子(2008) トータルパッケージの活用状況についてー広域・地域障害者職業センターにおける活用状況の分析ー、第16回 職業リハビリテーション研究発表会、pp.332-335。

小川 圭太・猪原 康子・伊藤 愛・角井 由佳・堀 亨一・生駒 一憲(2010)高次脳機能障害者に対するワークサンプル幕張版の使用経験、国立大学法人リハビリテーション・コメディカル学術大会誌、31号、pp.35-37。
障害者職業総合センター(2004a)調査研究報告書 No.57 精神障害等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(最終報告書)。

障害者職業総合センター(2004b)調査研究報告書 No.64 精神障害等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究。

障害者職業総合センター(2007a)調査研究報告書 No.74 事業主、家族等との連携による職業リハビリテーシ

ョン技法に関する総合的研究（第1分冊 事業主支援編）.

障害者職業総合センター(2007b)調査研究報告書 No.75 事業主、家族等との連携による職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（第2分冊 関係機関等の連携による支援編）.

障害者職業総合センター(2010a)特別の配慮を必要とする障害者を対象とした、就労支援機関等から事業所への移行段階における就職・復職のための支援技法の開発に関する研究（第1分冊 就職・職場適応支援編）.

障害者職業総合センター(2010b)特別の配慮を必要とする障害者を対象とした、就労支援機関等から事業所への移行段階における就職・復職のための支援技法の開発に関する研究（第2分冊 復職・職場適応支援編）.

田中 美穂・中田 貴晃(2011)地方自治体とEAP機関の協働による復職支援プログラム構築の取り組み, 第8回日本うつ病学会総会プログラム・抄録集, p.179.

平成16年度～平成24年度までに職業リハビリテーション研究発表会で報告されたトータルパッケージ活用に関する文献一覧

ー第12回 職業リハビリテーション研究発表会ー

朝比奈朋子・本田哲三・坂爪一幸・高橋玖美子・倉持昇・船橋圭・大久保幸枝・吉村茂和・上久保毅(2004) リハビリ医療チームによる高次脳機能障害者の就労支援 第2報:アプローチの実際, 第12回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.67-70.

寺井基裕・下司良一(2004) 高次脳機能障害者に対するメモリーノートを活用した就労支援についての一考察, 第12回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.175-177.

ー第13回 職業リハビリテーション研究発表会ー

田村潔・宮本修二・米村那知子・岡崎哲也・越智光宏・蜂須賀研二・坪内邦夫・四元照美・徳永泰子(2005) 業務災害による高次脳機能障がい者の社会復帰支援, 第13回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.84-85.

位上典子・戸田ルナ・勿田文記・小池磨美・望月葉子・小泉哲雄(2005)地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用について, 第13回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.112-115.

土田隼也・武藤香織・佐々木直人(2005) 広汎性発達障害者の問題行動改善に向けた支援の一考察ーメモリーノートを活用した支援技法ー, 第13回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.116-119.

吉澤純・中島純一・田中智子(2005) 障害者職業総合センター職業センターの新たな取組みー発達障害者のワークシステム・サポートプログラムについてー, 第13回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.168-171.

佐藤修子(2005) 精神障害者社会復帰施設での就労支援におけるトータルパッケージの活用と展望ー対処行動獲得にむけてー, 第13回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.206-207.

木村彰孝・大石文男(2005) 養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望ー特別支援教育における一人一人の教育的ニーズに応じた対応をめざしてー, 第13回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.208-211.

泉忠彦・千葉純子・伊藤豊・今野政美・山本和夫・池田崇文・峯岸亜紀子(2005) 高次脳機能障害を持つ方への支援ートータルパッケージの実践を通してー, 第13回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.212-213.

伊藤豊・千葉純子・泉忠彦・今野政美・山本和夫・池田崇文・峯岸亜紀子(2005) 高次脳機能障害を持つ方への支援－トータルパッケージの実践を通して その②－, 第13回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.276-279.

－第14回 職業リハビリテーション研究発表会－

酒井真由子(2006) 高次脳機能障害者への職場復帰支援に係る一考察－障害者職業総合センターとの連携(職場復帰支援プログラムの遠隔実施)－, 第14回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.68-71.

武藤香織・渡邊真理子・松原英治・田中弥生・菊池章子・小峪功・青柳智夫・勿田文記(2006) 職場復帰支援におけるうつ病の理解・促進のための事業主支援, 第14回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.142-145.

水沼真弓・藤村真樹・曾根さやか(2006) 高次脳機能障害者の就労に向けた障害認識を進めるアプローチ－職業準備訓練での取り組みと課題－, 第14回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.210-213.

藤村真樹・曾根さやか・水沼真弓(2006) 高次脳機能障害者の家族に対する支援について－障害者職業総合センター職業センターでの試行的取り組み－, 第14回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.214-217.

池谷祥子・池田まさみ・加藤俊宏・武藤香織・勿田文記(2006) 障害者小規模授産施設 脳外傷(高次脳機能障害) 工房「笑い太鼓」における就労支援への移行を目指した取り組みについて－M-メモリーノートとM-ワークサンプルの活用について－, 第14回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.228-231.

石原まほろ・崎原妙子・松本聡恵・勿田文記(2006) 地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用, 第14回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.232-235.

木村彰孝・管宜義(2006) 養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望(3)－ホームワーク版を含めた活用の実際－, 第14回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.236-239.

大内梨江子・境博義・松倉義憲・窪川義也・鈴木佐江子(2006) 高次脳機能障害者への就労定着支援実践報告, 第14回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.310-313.

－第15回 職業リハビリテーション研究発表会－

泉忠彦・千葉純子・飯塚治樹・伊藤豊・山本和夫・松元健・青木重陽・矢代美砂子・船津正悟(2007) 高次脳機能障害者に対する医療機関と職業リハビリテーション機関との連携による就労支援の取り組み その②－病院での職能訓練の立場から－, 第15回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.58-61.

小倉由紀・小滝みや子・生澤真由美・会沢希美・飯沼弥彦・佐倉洋子・吉永勝訓(2007) 高次脳機能障害を有する二分脊椎者への就労支援, 第15回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.224-227.

首藤友子・野田雅美(2007) 高次脳機能障害者への就労支援－医療リハと職業リハの連携による取り組み－, 第15回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.232-235.

香野恵美子・堤若菜(2007) やどかりの里労働支援プロジェクトの活動－労働支援現場におけるトータルパッケージ活用の可能性と課題－, 第15回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.256-259.

徳増五郎・渡辺明広(2007) 個別移行支援計画に基づく授業づくり－特別支援学校(知的障害)における職業リハビリテーションの考え方を取り入れた実践(1)－, 第15回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.260-263.

大畑智里・徳増五郎(2007) プラダールウィリー症候群の男子への健康管理グラフ作成やメモリーノートを活用した生活支援ー特別支援学校(知的障害)における職業リハビリテーションの考え方を取り入れた実践(2)ー, 第15回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.264-267.

ー第16回 職業リハビリテーション研究発表会ー

植松隆洋・伊藤英樹(2008) 特別支援学校高等部におけるトータルパッケージの活用に関する一考察, 第16回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.138-141.

徳増五郎・大畑智里・渡辺明広・長谷川浩志(2008) 特別支援学校(知的障害)における職業リハビリテーションの考え方を取り入れた実践(3)ートータルパッケージを活用した進路指導における事業所と学校の連携についてー, 第16回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.142-145.

長谷川浩志・徳増五郎・大畑智里・渡辺明広(2008) 特別支援学校(知的障害)の職場実習の受け入れについての一考察ートータルパッケージを活用した事業所と学校の連携についてー, 第16回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.146-149.

遠藤美紀・松井優子・青木功(2008) OA 作業による能力開発と職域拡大ーパソコンによる出勤簿入力業務の能力開発および職域拡大ー, 第16回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.150-151.

香野恵美子・堤若菜(2008) 精神障害のある人の多様な働き方を実現するためにー支援ツールとしてのトータルパッケージ活用の方向性ー, 第16回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.152-155.

野村隆幸(2008) 国立職業リハビリテーションセンターにおける発達障害者への職業訓練の取り組みーワークサンプル幕張版(トータルパッケージ)を活用した導入訓練の取り組みー, 第16回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.294-297.

渡辺明広(2008) 特別支援学校(知的障害)高等部の教科「流通・サービス」(「商品管理」「事務」)の学習内容の構築に向けての検討ーワークサンプル幕張版(MWS)の活用ー, 第16回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.328-331.

ー第17回 職業リハビリテーション研究発表会ー

高島修子・生川奈津美・今若恵里子・宮下薫・永島弥生(2009) 精神障害者職場復帰支援におけるMSFASを活用した取組みについてー「自分の状況を理解するシート」の試行ー, 第17回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.118-121.

泉忠彦・山本和夫・今野政美・千葉純子・松元健・岩本綾乃(2009) 高次脳機能障がい者に対する職場内リハビリテーションーその1 外傷性脳損傷者の復職者への取り組みー, 第17回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.170-173.

廣瀬陽子・浜崎千賀・飯沼舞(2009) 就労支援における医療機関の役割についての一考察ー当院における新たな就労支援の取り組みを通してー, 第17回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.178-181.

徳増五郎・渡辺明広(2009) 特別支援学校(知的障害)における職業リハビリテーションの考え方を取り入れた実践(7)ー職業教育におけるトータルパッケージの活用ー, 第17回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.224-227.

長谷川浩志・徳増五郎・大畑智里・川口直子(2009) 特別支援学校から企業への移行と連携についての考察ートータルパッケージの体系的利用による成果ー, 第17回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.228-231.

香野恵美子・堤若菜(2009) 精神障害のある人の多様な働き方を実現するためにートータルパッケージ活用事

例から見てきたこと一、第17回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.232-235.
伊藤英樹・植松隆洋・笹原雄介(2009) PC 業務遂行のための在学中からトータルパッケージを活用した就労支援の事例について、第17回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.244-247.
野村隆幸(2009) 国立職業リハビリテーションセンターにおける発達障害者の職業訓練に関する取組みについて、第17回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.268-271.
松田光一郎(2009) 知的障害者への職場定着におけるメモリーノートの活用と効果、第17回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.304-307.

ー第18回 職業リハビリテーション研究発表会ー

廣瀬陽子・飯沼舞(2010) 医療機関における失語症者への就労支援とその可能性について、第18回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.110-113.
泉忠彦・中村憲一・飯塚治樹・千葉純子・大家久明・山本和夫・今野政美・松元健・岩本綾乃・椎野純一・青木重陽(2010) 高次脳機能障がい者への就労支援ー高次脳機能障がいの理解への取り組みー、第18回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.316-317.
阿部秀樹・加藤ひと美・佐善和江・渡辺由美(2010) 発達障害者のワークシステム・サポートプログラムにおけるマニュアル作成技能トレーニングの検討(2)ーデジタルカメラを用いてマニュアル作成を行った事例ー、第18回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.340-343.
松田光一郎(2010) メモリーノートを活用した職場実習における効果の検討 ー接客スキルの獲得を目指した事例からー、第18回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.376-379.
櫻田修久(2010) 企業連携訓練から具体化される実務をベースとするデータ入力課題の作成ー出退勤データ入力課題ー、第18回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.380-383.

ー第19回 職業リハビリテーション研究発表会ー

大畑智里・渡辺明広(2011) 特別支援学校(知的障害)における就労先との協働を目指した就労支援ー自己認識を深め、セルフマネジメントスキルを高めたLD男子への一実践ー、第19回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.157-160.
山田輝之(2011) アスペルガー障害成人前期の「育ち」ー自己理解の取り組みを通してー、第19回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.161-164.
鈴木普子・日高幸徳(2011) 障害受容を効果的に行うための取り組み(職業準備支援における障害別プログラムの実践)、第19回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.273-276.
関根和臣(2011) うつ病などメンタルヘルス不全者の職場適応を支援する技法に関するー考察ーナビゲーションブックの活用事例からー、第19回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.295-298.
阿部秀樹・加藤ひと美・佐善和江・渡辺由美(2011) 発達障害者のワークシステム・サポートプログラムにおけるパソコンを用いた作業の検討(1)ー認知特性からみた課題の整理と支援の工夫ー、第19回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.372-375.
渡辺由美・加藤ひと美・佐善和江・阿部秀樹(2011) 発達障害者のワークシステム・サポートプログラムにおけるパソコンを用いた作業の検討(2)ー特性に応じた補完方法を活用した事例ー、第19回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.376-379.
芻田文記(2011) メモリーノート集団訓練方法の構築と実施、第19回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.385-388.

－第 20 回 職業リハビリテーション研究発表会－

神部まなみ・齋藤良子・鳴石洋子(2012) MWS (幕張ワークサンプル) を利用したプロジェクト・プログラムの考案－リワーク・プログラムにおける新たな試み－, 第 20 回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.71-74.

小津礼子・榊原義文・増田和彦(2012) さいたま市障害者総合支援センターの取り組み－就労準備性の構築から定着支援までの連続した支援について－, 第 20 回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.215-218.

長谷川浩志・若林功(2012) 企業におけるトータルパッケージを用いたキャリア形成支援の可能性－ADHD 傾向を伴う知的障害のある社員における職務行動の安定化の過程－, 第 20 回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.238-241.

阿部秀樹・加藤ひと美・渡辺由美・佐善和江(2012) 発達障害者のワークシステム・サポートプログラムにおける特性に応じた作業支援の検討 (1) －情報処理過程の特性から見た作業上の職業的課題の評価－, 第 20 回 職業リハビリテーション研究発表会 発表論文集, pp.343-346.

※いずれもページ番号順に記載

第2章

MWS 活用及び改訂希望に関する アンケート調査

第2章 MWS活用及び改訂希望に関するアンケート調査

第1節 アンケート調査の目的と方法

1 目的

MWSの開発当時に想定された活用の対象障害は高次脳機能障害が中心だったが、現在は、発達障害や精神障害等に対しても活用範囲が拡大している。このような障害の多様化に対応し、障害特性に即した業務を検討するため、また作業種を整備するために、MWSの改訂が必要ではないかと考えられる。

そこで、本調査は、改訂の検討を進める一助とすることを目的として、MWSを所有する広域・地域センターの障害者職業カウンセラー（以下、「カウンセラー」と言う。）及び関係機関の支援者が「MWSを実際にどのように活用しているのか」、「今後の職業リハビリテーションサービスの展開を考える上で、MWSにどのような改訂を希望しているのか」について調査を行うこととした。なお、第1章でも述べたように、これまでに実施されたMWSの活用状況調査は、広域・地域センターのみであり、また各センターで実施状況を取りまとめて報告する形式であったため、支援者個人がどのように活用しているのかまでは把握できていない。本調査では、広域・地域センター及び関係機関の総意としてまとめた改訂の要望よりも、幅広い意見や要望を収集し、改訂の検討を進めるため、支援者個人を対象に調査を行うこととした。

2 調査方法

（1）広域・地域センターにおける調査方法

ア 調査対象

全国の広域・地域センターに所属する「経験年数3年以上、主任」までのカウンセラー276名

イ 調査時期

平成24年7月中旬～平成24年9月中旬

ウ 調査方法

調査票（巻末資料1）をメールで送信し、メール返信による回答を求めた。

エ 調査内容

①プロフィール（活用経験、年代、平成23年度に担当した事業及び障害種類等）、②平成23年度のMWS活用状況、③MWS活用の目的と効果、④MWS活用結果の活かし方、⑤MWS活用の意識、⑥改訂の希望

オ 調査回収状況

60名（回収率21.7%）

（2）関係機関における調査方法

ア 調査対象

平成20年1月の市販化開始以降、平成23年9月末までにMWSを株式会社エスコアールより直接購入した関係機関171機関のMWSを直接活用している支援者。ただし、1機関あたり調査票2部を送付し、複数の支援者が活用している場合は、関係機関において任意で回答者を2名まで選定する形式とした。

イ 調査時期

平成24年7月中旬～平成24年9月中旬

ウ 調査方法

郵送法により実施。ただし、調査票（巻末資料2）は株式会社エスコアールから調査対象の関係機関に郵送し、回答者は、回答後、当センターに直接返送する形式をとった。

エ 調査内容

①プロフィール（支援者個人：年代、担当した障害種類、資格等。関係機関：所有するMWSの種類等）、②平成23年度のMWS活用状況、③MWS活用の目的と効果、④MWS活用結果の活かし方、⑤MWS活用の意識、⑥改訂の希望

調査内容は、基本的に広域・地域センター向けアンケート調査と同様の内容としているが、①プロフィールの設問の一部及び②平成23年度のMWS活用状況～④MWS活用結果の活かし方の回答方法が異なっている。

オ 調査回収状況

58名（回収率17.0%。ただし、171機関342名を母数とした場合）

第2節 広域・地域センターにおけるMWS活用の現状

1 プロフィール

(1) MWS活用経験

MWSの活用経験を図2-2-1に示す。

回答のあった60名中3名(5.0%)に活用経験がなかったが、ほとんどのカウンセラーに活用経験があった。3名については、「評価やMWS活用が想定される事業を担当していなかった」点が共通しており、他に「実施ととりまとめまでに時間がかかる」という意見が挙げられた。

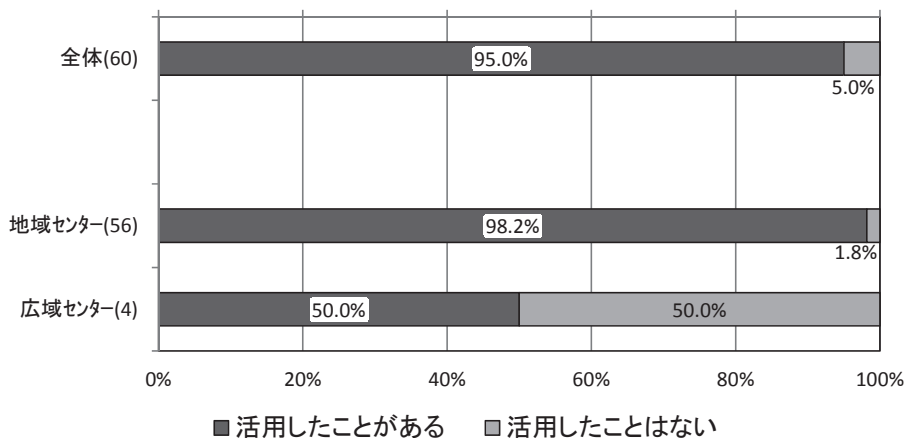


図2-2-1 MWS活用経験

(2) 年代

回答者の年代を図2-2-2に示す。

30代、40代で82.3%を占めていた。

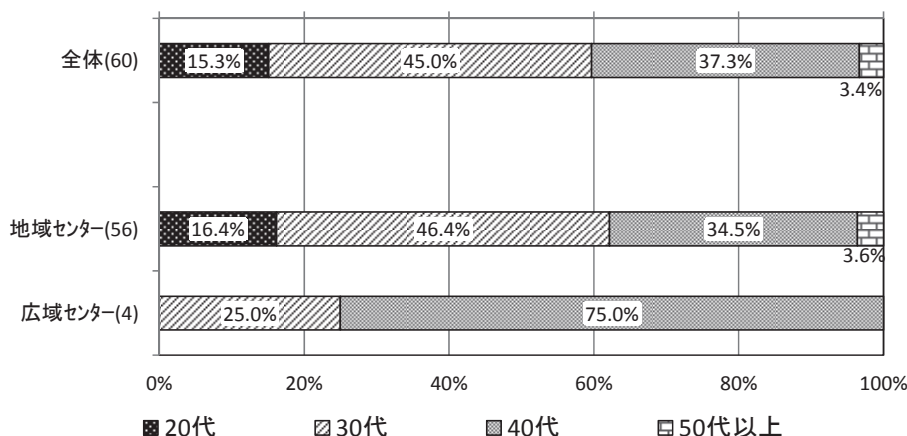


図 2-2-2 回答者の年代

(3) 障害者職業カウンセラー経験年数

回答者の障害者職業カウンセラー経験年数を図 2-2-3 に示す。

ここでは、育児休暇や事務職等の年数を省き、実経験年数を問うている。全体を見ると、「15年まで」及び「21年以上」が他の経験年数と比べ若干少ないが、ほぼ均等な経験年数となっている。

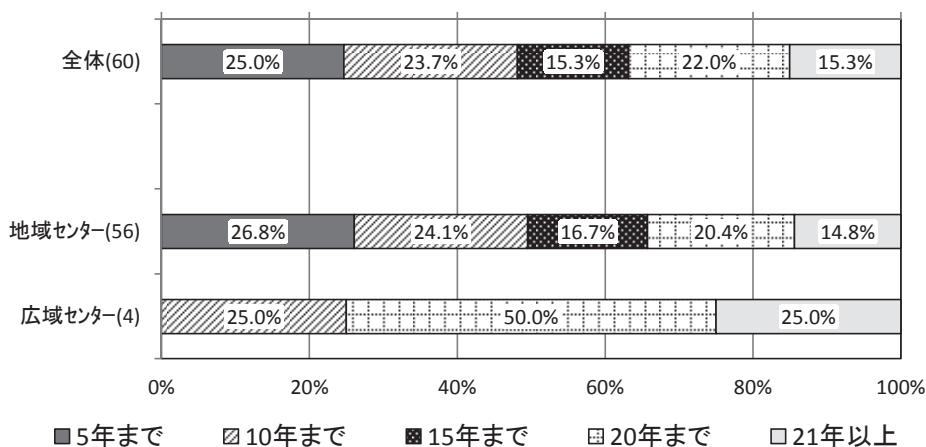


図 2-2-3 回答者の障害者職業カウンセラー経験年数

(4) 担当業務

回答者が平成 23 年度に担当した業務を図 2-2-4～2-2-5 に示す。

図 2-2-4 は、主な担当業務を示している。全体を見ると、「職業相談・職業評価」(25.4%)、「職業準備支援(自立支援)」「その他」(共に 22.0%)の順に高かった。

「その他」の業務内容について、図 2-2-5 に示す。地域センターでは、主任障害者職業カウンセラー(以下、「主任カウンセラー」と言う。)から「主任カウンセラー業務」、「統括業務」、「業務全般」、「事業主・関係機関支援業務」の回答内容が多く、一部「事務職」や「育児休暇中」で地域センターの業務を行っていなかったカウンセラーがいた。また、広域センターでは、回答者全員が就労支援や利用者入校にあたっての業務のいずれかを担当していた。

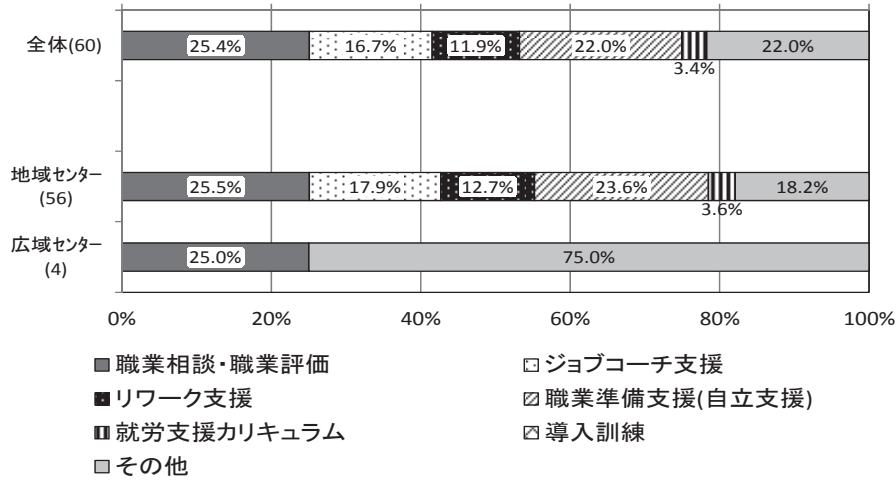


図 2-2-4 回答者の主な担当業務

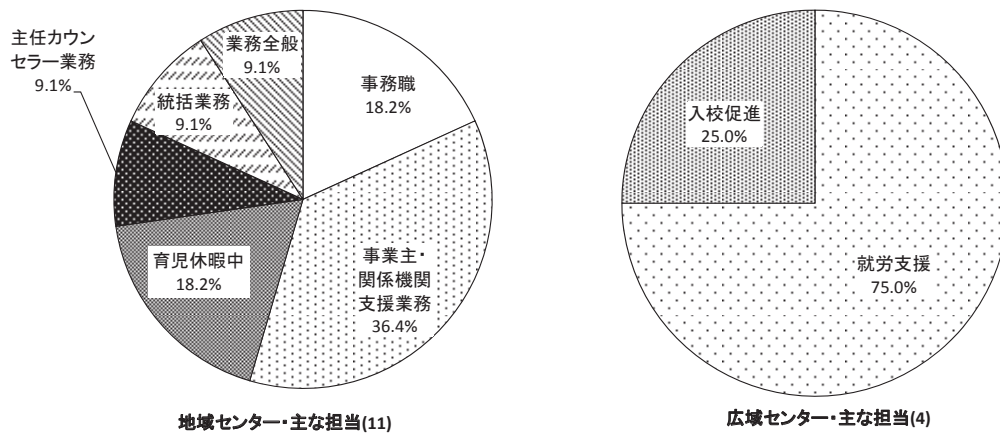


図 2-2-5 主な担当業務（その他の内容）

図 2-2-6 は、主な担当以外の担当業務を示している。全体を見ると、「職業相談・職業評価」(50.0%)、「その他」(13.8%)、「職業準備支援(自立支援)」(12.1%)、の順に高かった。

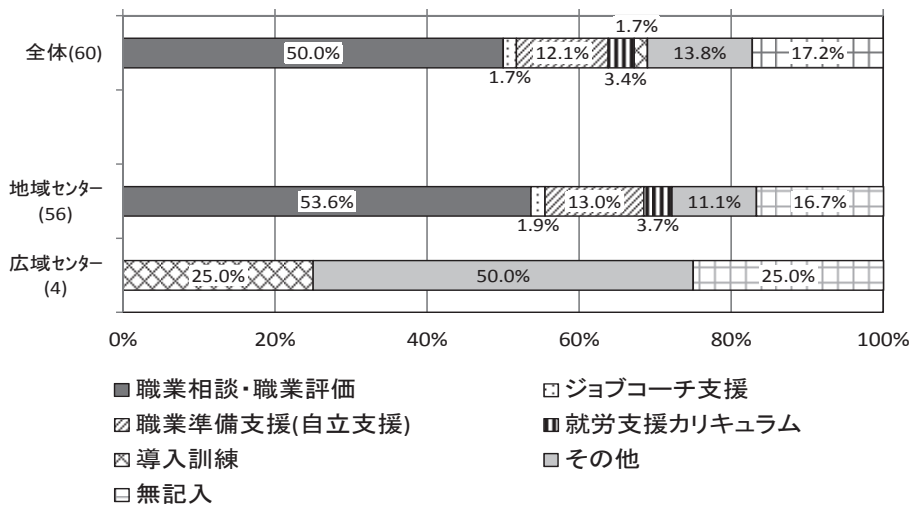
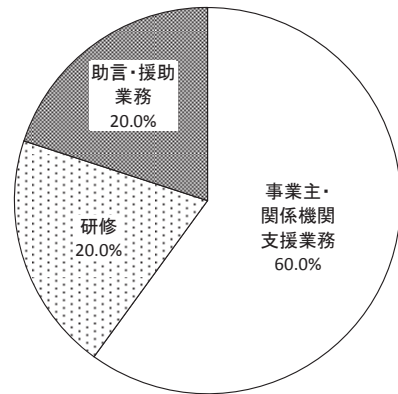


図 2-2-6 回答者の主な担当以外の担当業務

「その他」の担当業務内容について、図 2-2-7 に示す。地域センターでは、回答者全てが主任カウンセラー以外のカウンセラーであり、“事業主・関係機関支援業務”が多く、一部“研修”や“助言・援助業務（対象機関不明）”が挙げられていた。また、広域センターでは、2名が募集活動や就職支援を挙げている。



地域センター・他の担当(5)

図 2-2-7 その他の担当業務（その他の内容）

(5) 担当障害種類

回答者が平成 23 年度に担当した障害種類を図 2-2-8 に示す。

地域センターでは、「発達障害」「精神障害」（共に 91.1%）、「知的障害」（83.9%）を担当しているカウンセラーが多かった。広域センターでは、「知的障害」の取り扱いが少なかった。

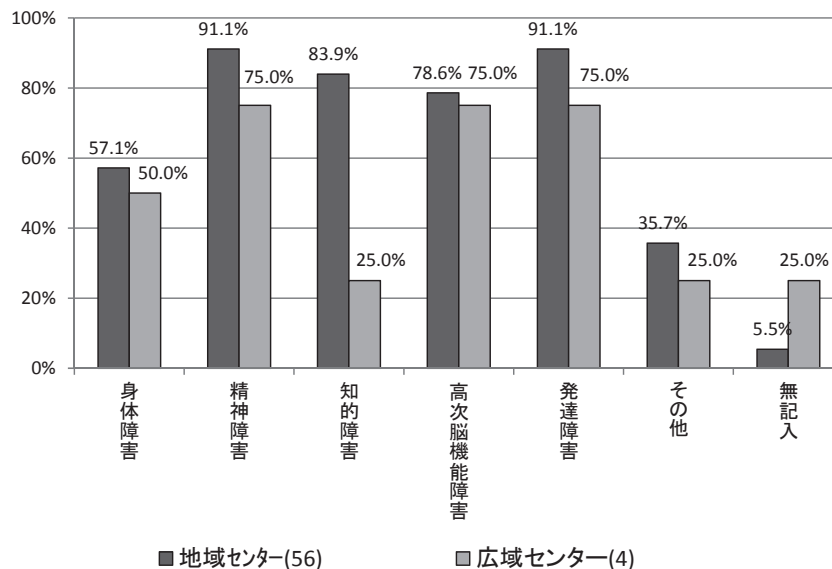
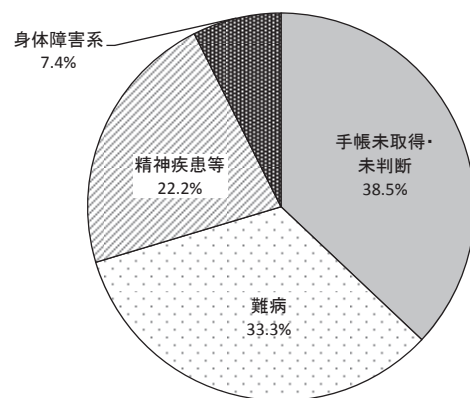


図 2-2-8 回答者の主な担当障害種類（複数回答）

「その他」の担当障害種類について、図 2-2-9 に示す。地域センターでは、“手帳未取得・未判断（知的ボーダー、発達障害の疑い例（未診断）、障害が特定されていない者等）”（38.5%），“難病（具体名が挙げたのはハンチントン病、多発性硬化症）”（33.3%），“精神疾患等（抑うつ状態、神経症圏、社会不安障害、境界性人格障害等）”（22.2%），“身体障害系（脳出血、構音障害）”（7.4%）が挙げられた。また、広域センターでは、1名の回答者から“難病”のみが挙げられた。



地域センター(21)

図 2-2-9 回答者の担当障害種類（その他の内容）

2 活用状況

ここからは、プロフィールにおいて MWS を「活用したことがある」と回答した地域センター55名、広域センター2名、計57名について集計を行った。また、広域センターの回答数が少なかったため、本項以降は、広域・地域センター別ではなく、両センターでの結果をまとめた。

(1) 周辺物品の活用状況

ア マニュアルの活用状況

マニュアルの活用状況を図 2-2-10 に示す。

市販化に伴い、各ワークサンプルの実施方法を記載したマニュアルを整備した。これについては、「13冊全て読み、活用している」と「必要なものだけを読み、活用している」を合わせると98.2%と、ほとんどのカウンセラーが何らかの形で活用していた。

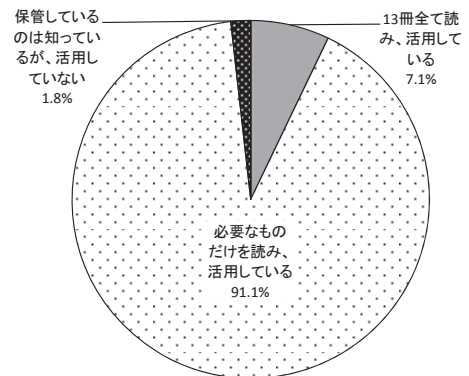


図 2-2-10 マニュアルの活用状況
(全体、n=57)

イ DVD の活用状況

DVD の活用状況を図 2-2-11 に示す。

DVD は、トータルパッケージに関する研修に代わるものとして、平成 23 年度に広域・地域センター及び MWS・M-メモリーノート購入機関に対し、配布したものである。研修を受ける機会のない支援者に対し、MWS をはじめとしたトータルパッケージの概要、実施に際しての留意点、実施の方法（実施モデルを含む）等を説明している。

「全て見て、活用している」と「必要なものだけを見て、活用している」を合わせると 32.1%に留まり、「保管しているのは知っているが、活用していない」「どこに保管しているのか、知らない」が 68.5%と多数を占め、マニュアルと比較すると活用状況は低かった。

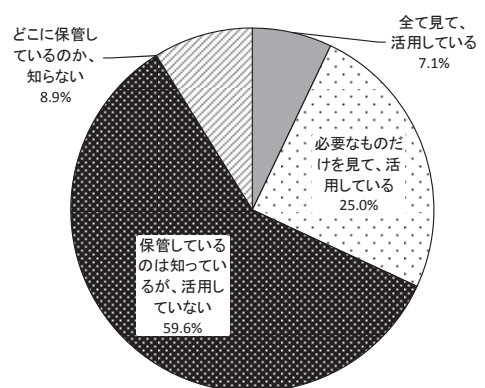


図 2-2-11 DVD の活用状況 (全体、n=57)

以下(2) MWS 簡易版の活用状況、(3) MWS 訓練版の活用状況、(4) MWS ホームワーク版の活用状況は、前項「1 プロフィール(4)担当業務」において、回答者が担当した障害種の利用者(「1 プロフィール(5)担当障害種類」で選択した障害種に該当)に対し、それぞれのワークサンプルをどの程度活用したか、その頻度をまとめたものである。そのため、各障害により回答者数が異なっている。

また、(2) MWS 簡易版の活用状況、(3) MWS 訓練版の活用状況については、活用状況を表す選択肢を 12 項目と細かく設定したが、各項目の回答者数が少なかったため、図中では、「必ず使った(図中選択肢番号①③⑤⑨⑩⑪に該当)」「使うことがあった(図中選択肢番号②④⑥⑫に該当)」「あまり、または全く使わなかった(図中選択肢番号⑦⑧に該当)」に区分し、境界線を引いている。

(2) MWS 簡易版の活用状況

ア 職業相談・職業評価における MWS 簡易版の活用状況

前項「1 プロフィール(4)担当業務」の「主な担当業務」と「その他の担当業務」において「職業相談・職業評価」を選択した回答者に対し、職業相談・職業評価における担当障害別活用状況を集計した。

その結果を図 2-2-12～2-2-17 に示す。なお、この設問に対する無回答はなかった。

(ア) 身体障害者に対する活用状況 (図 2-2-12)

最も多く活用していたのは「数値入力」(「必ず使った」「使うことがあった」の合計 65.3%(以下、()内の%は全て同じ))で、次いで「文書入力」「数値チェック」「物品請求書作成」(3項目全て合計 57.5%)、「ピッキング」(合計 50.0%)と続いた。

(イ) 精神障害者に対する活用状況 (図 2-2-13)

最も多く活用していたのは「数値入力」(合計 77.3%)で、次いで「数値チェック」(合計 70.4%)、「文書入力」(合計 68.2%)、「物品請求書作成」「ピッキング」(両項目とも合計 63.7%)、「作業日報集計」(合計 52.3%)と続いた。

(ウ) 知的障害者に対する活用状況 (図 2-2-14)

最も多く活用していたのは「数値チェック」(合計 61.1%)で、次いで「ピッキング」(合計 56.1%)、「数値入力」(合計 56.0%)、「文書入力」(合計 51.1%)と続いた。

(エ) 高次脳機能障害者に対する活用状況 (図 2-2-15)

最も多く活用していたのは「数値入力」(合計 75.6%)で、次いで「数値チェック」(合計 70.2%)、「文書入力」(合計 67.5%)、「ピッキング」(合計 59.4%)、「検索修正」「物品請求書作成」(両項目とも合計 51.3%)と続いた。

(オ) 発達障害者に対する活用状況 (図 2-2-16)

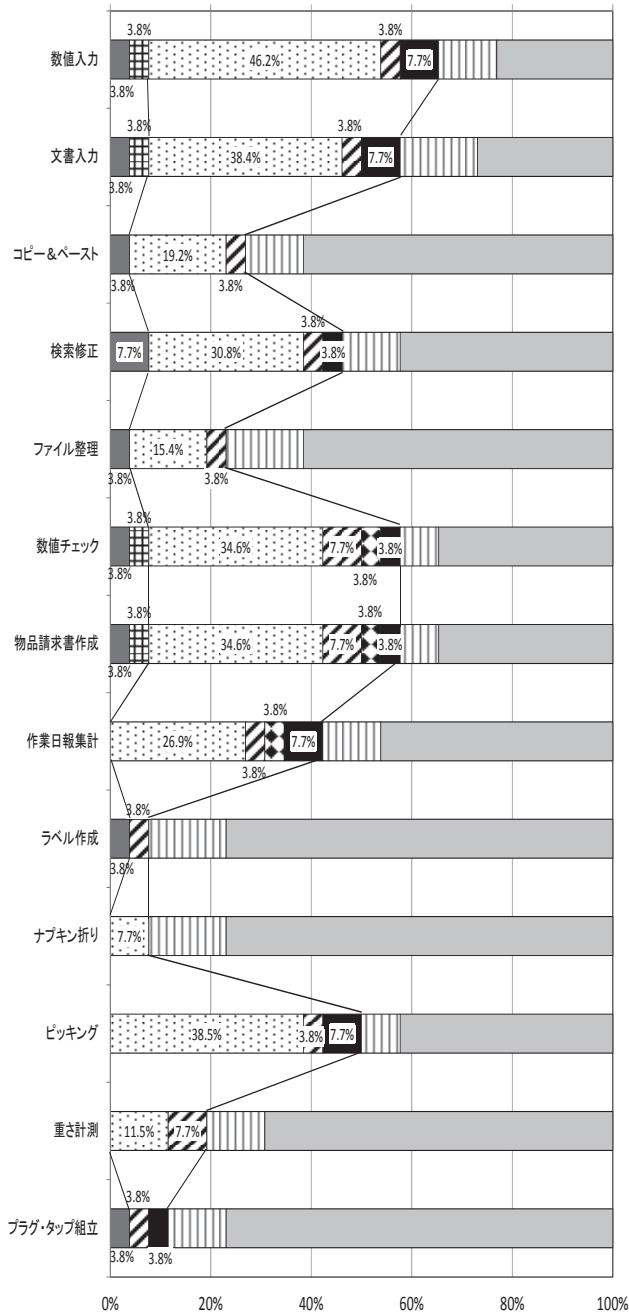
最も多く活用していたのは「数値入力」(合計 79.5%)で、次いで「数値チェック」(合計 75.0%)、「文書入力」(合計 70.5%)、「ピッキング」(合計 63.6%)、「物品請求書作成」(合計 61.4%)、「作業日報集計」(合計 56.9%)、「検索修正」(合計 52.2%)と続いた。

(カ) その他の障害者に対する活用状況 (図 2-2-17)

最も多く活用していたのは「数値入力」「数値チェック」(両項目とも合計 68.4%)で、次いで「文書入力」「物品請求書作成」「作業日報集計」(3項目全て合計 63.2%)、「検索修正」(合計 57.9%)、「ピッキング」(合計 52.6%)と続いた。

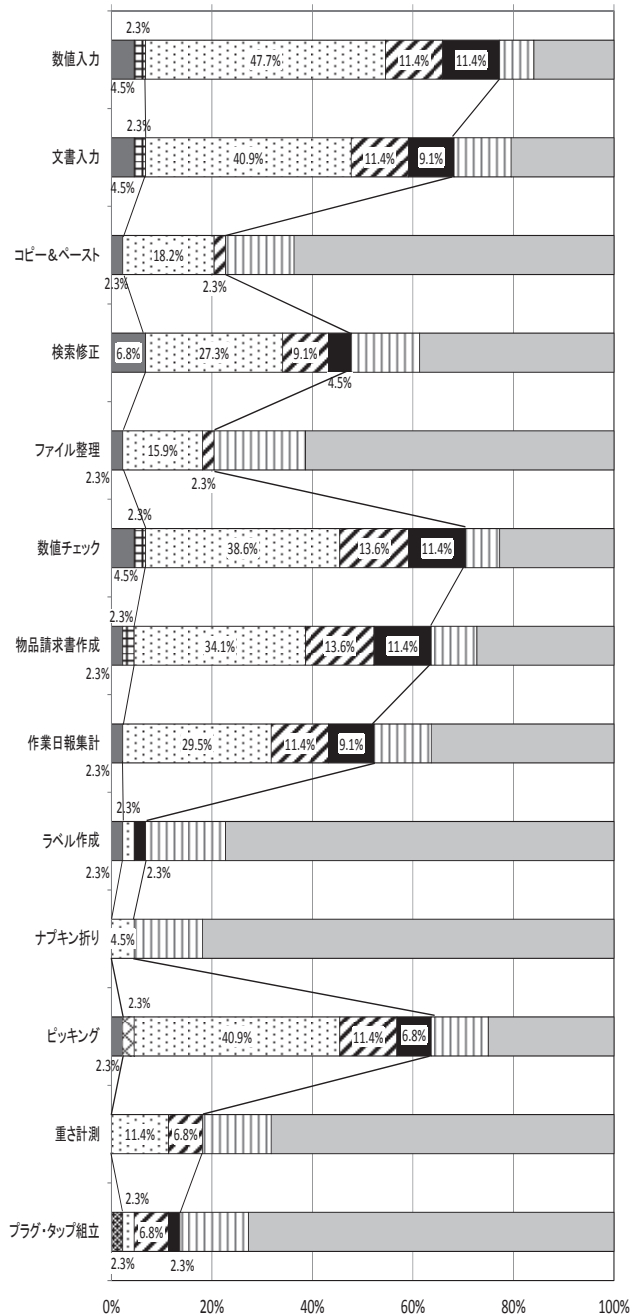
半数以上の回答者に活用されていたワークサンプルの数は、発達障害・その他の障害者が7つ、精神障害者・高次脳機能障害者が6つ、身体障害者が5つ、知的障害者が4つであった。全ての障害者に共通して、半数以上の回答者に活用されているのは「数値入力」「文書入力」「数値チェック」「ピッキング」であり、パソコンへの適用状況や職業相談・職業評価にかかる時間、利用者の知的能力等により、「検索修正」「物品請求書作成」「作業日報集計」が加わっていると思われる。

「必ず使った」「使うことがあった」としている活用状況は、細かく見ると、回答者自身が実施者となって活用することが多く(選択肢①②)、その他にアシスタントや指導員等に依頼して活用している状況(選択肢③④)も確認できた。これは職業準備支援を活用した評価で活用しているのではないかと推測される。



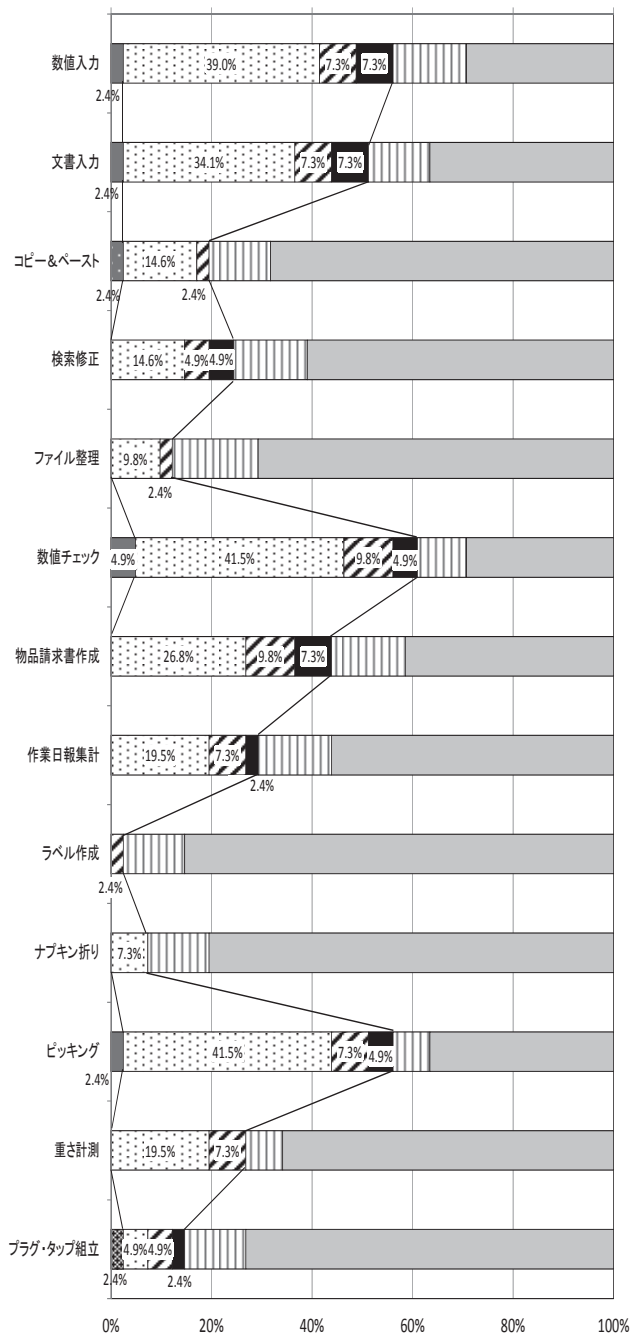
- ①自分が実施者となり、必ず使った
- ▨ ①②と③が混在していた
- ▨ ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ▨ ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ▨ ⑥作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑦⑧と④が混在していた
- ▨ ⑦自分もアシスタントや指導員等あまり使わなかった
- ▨ ⑧自分もアシスタントや指導員等全く使わなかった

図 2-2-12 身体障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 相談・評価、n=26)



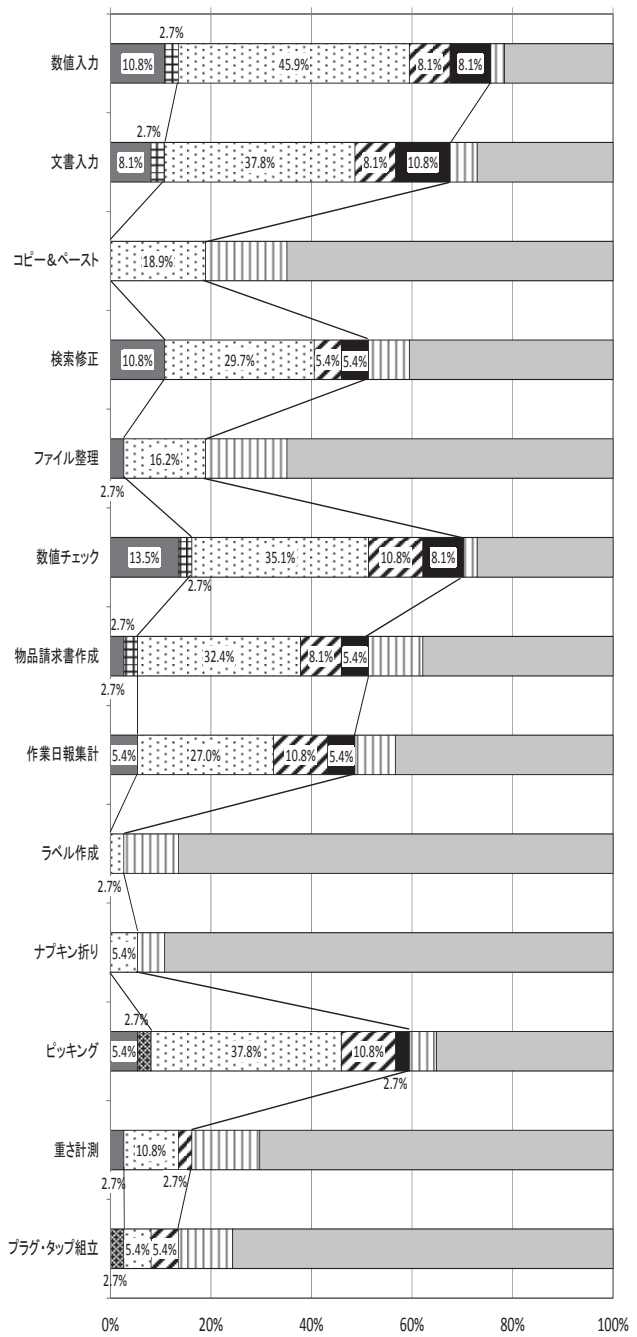
- ①自分が実施者となり、必ず使った
- ▨ ③アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ▨ ⑤作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ▨ ①②と③が混在していた
- ▨ ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ▨ ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑦⑧と④が混在していた
- ▨ ⑦自分もアシスタントや指導員等あまり使わなかった
- ▨ ⑧自分もアシスタントや指導員等全く使わなかった

図 2-2-13 精神障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 相談・評価、n=44)



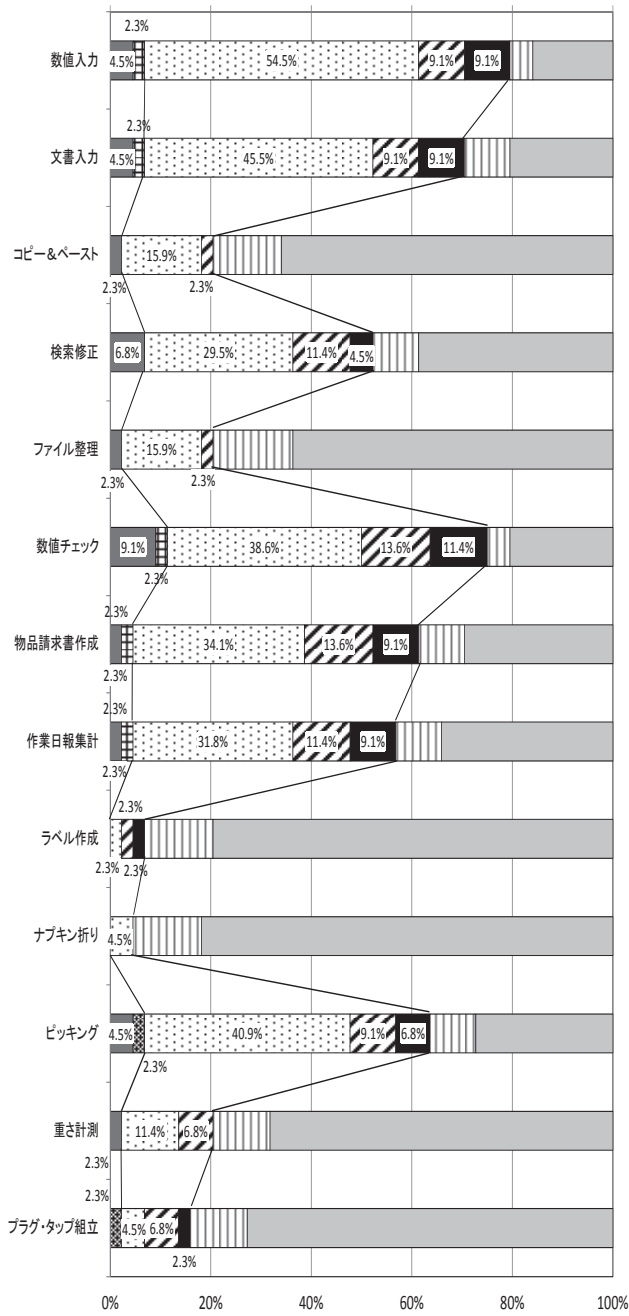
- ①自分が実施者となり、必ず使った
- ③アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ⑨①と③が混在していた
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑩②と④が混在していた
- ⑦自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-14 知的障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 相談・評価、n=41)



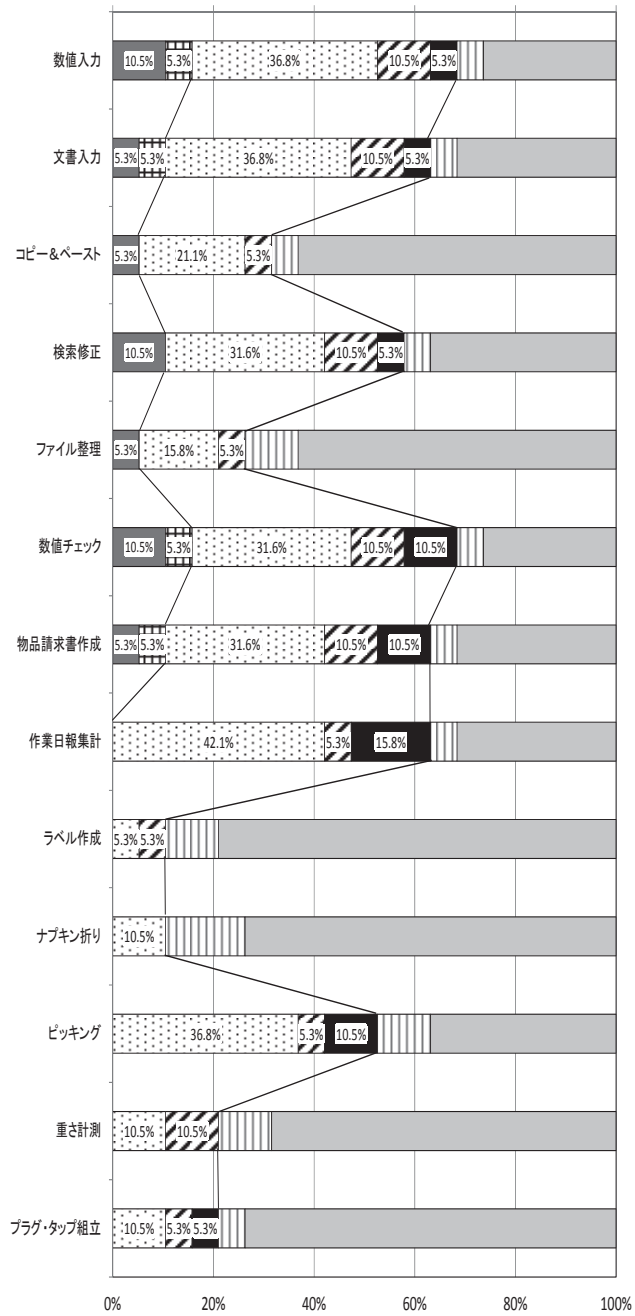
- ①自分が実施者となり、必ず使った
- ③アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ⑩②と③が混在していた
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑩②と④が混在していた
- ⑦自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-15 高次脳機能障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 相談・評価、n=37)



- ①自分が実施者となり、必ず使った
- ③アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ①②と③が混在していた
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ①②と④が混在していた
- ⑦自分もアシスタントや指導員等あまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等全く使わなかった

図 2-2-16 発達障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 相談・評価、n=44)



- ①自分が実施者となり、必ず使った
- ①②と③が混在していた
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ①②と④が混在していた
- ⑦自分もアシスタントや指導員等あまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等全く使わなかった

図 2-2-17 その他の障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 相談・評価、n=19)

イ 各種事業における MWS 簡易版の活用状況

前項「1 プロフィール（4）担当業務」の「主な担当業務」と「その他の担当業務」において職業相談・職業評価以外の事業（“各種事業”）を選択した回答者に対し、各種事業における担当障害別活用状況を集計した。その結果を図 2-2-18～2-2-23 に示す。なお、この設問に対する無回答はなかった。

（ア）身体障害者に対する活用状況（図 2-2-18）

最も多く活用していたのは「数値入力」「文書入力」「数値チェック」「物品請求書作成」「ピッキング」（5項目全て「必ず使った」「使うことがあった」に該当する選択肢の合計 35.0%（以下、（）内の%は全て同じ））であった。

（イ）精神障害者に対する活用状況（図 2-2-19）

最も多く活用していたのは「数値入力」（合計 47.4%）で、次いで「検索修正」（合計 44.8%）、「文書入力」（合計 42.2%）と続いた。

（ウ）知的障害者に対する活用状況（図 2-2-20）

最も多く活用していたのは「数値入力」「文書入力」（両項目とも合計 32.3%）、次いで「ピッキング」（合計 32.2%）であった。

（エ）高次脳機能障害者に対する活用状況（図 2-2-21）

最も多く活用していたのは「数値入力」（合計 37.9%）で、次いで「文書入力」「検索修正」（両項目とも合計 30.9%）と続いた。

（オ）発達障害者に対する活用状況（図 2-2-22）

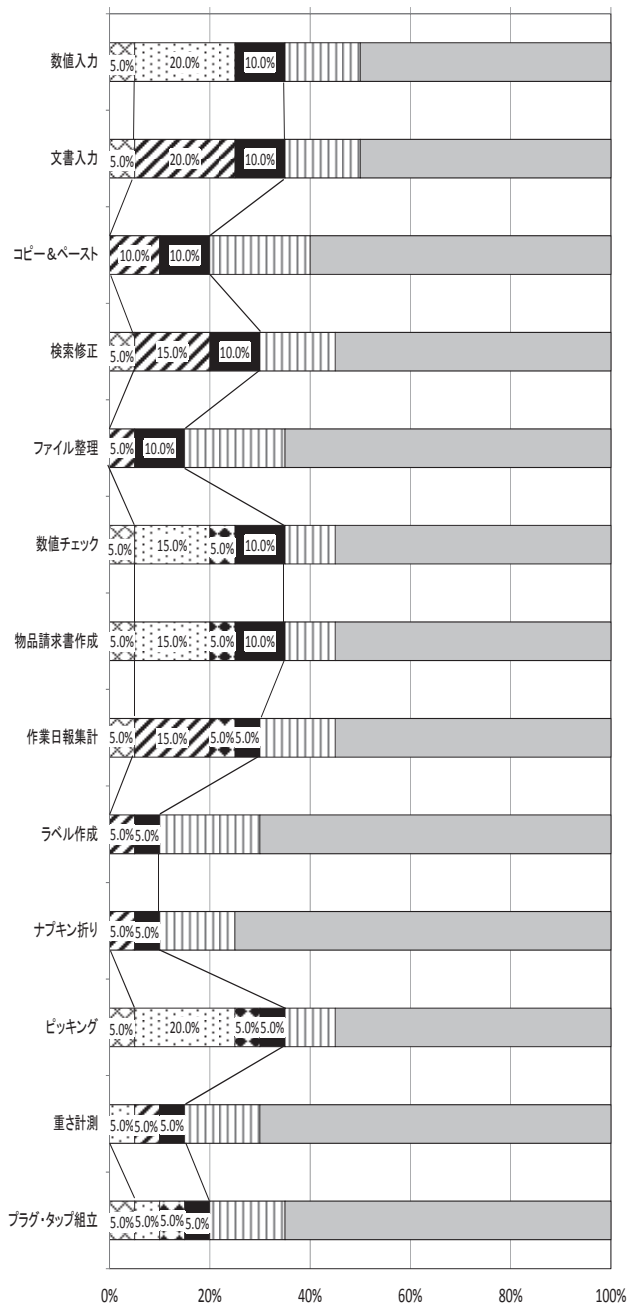
最も多く活用していたのは「数値入力」（合計 47.1%）で、次いで「検索修正」（合計 38.2%）、「文書入力」「物品請求書作成」「ピッキング」（3項目全て合計 38.1%）と続いた。

（カ）その他の障害者に対する活用状況（図 2-2-23）

最も多く活用していたのは「数値入力」「文書入力」「検索修正」「数値チェック」「物品請求書作成」「作業日報集計」「ピッキング」（7項目全て合計 37.5%）であった。

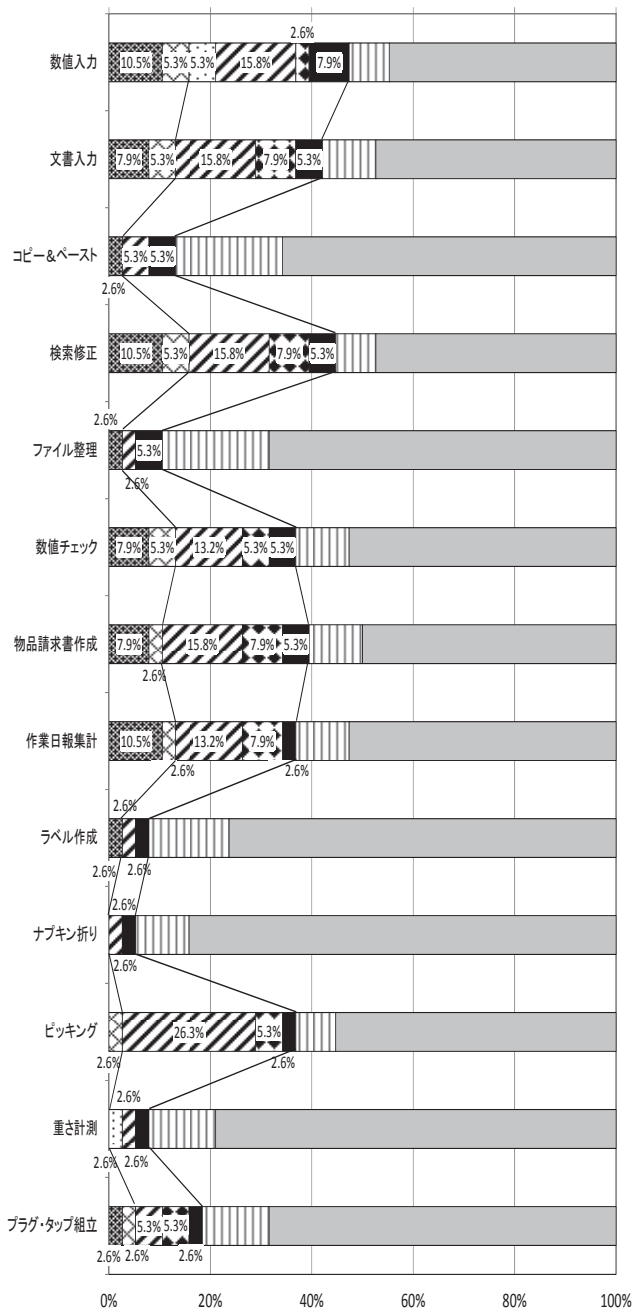
各種事業における MWS 簡易版活用状況は、職業相談・職業評価と異なり、いずれの障害種類においても、半数以上の回答者が活用しているワークサンプルはなく、事業で活用されている割合は低いといえる。元々、MWS 簡易版は評価のために開発されたものであるため、各種事業での活用割合の低さは当たり前のこととも取れる。

また、このような状況の中、活用状況を細かく見ると、職業相談・職業評価とは異なり、回答者自身が実施者となって活用するよりも、アシスタントや指導員等へ依頼する（選択肢③④）、または作業支援のメニューとなって活用することが多い（選択肢⑤⑥）といえる。これは、MWS 訓練版を活用する前の作業体験としている可能性が考えられる。



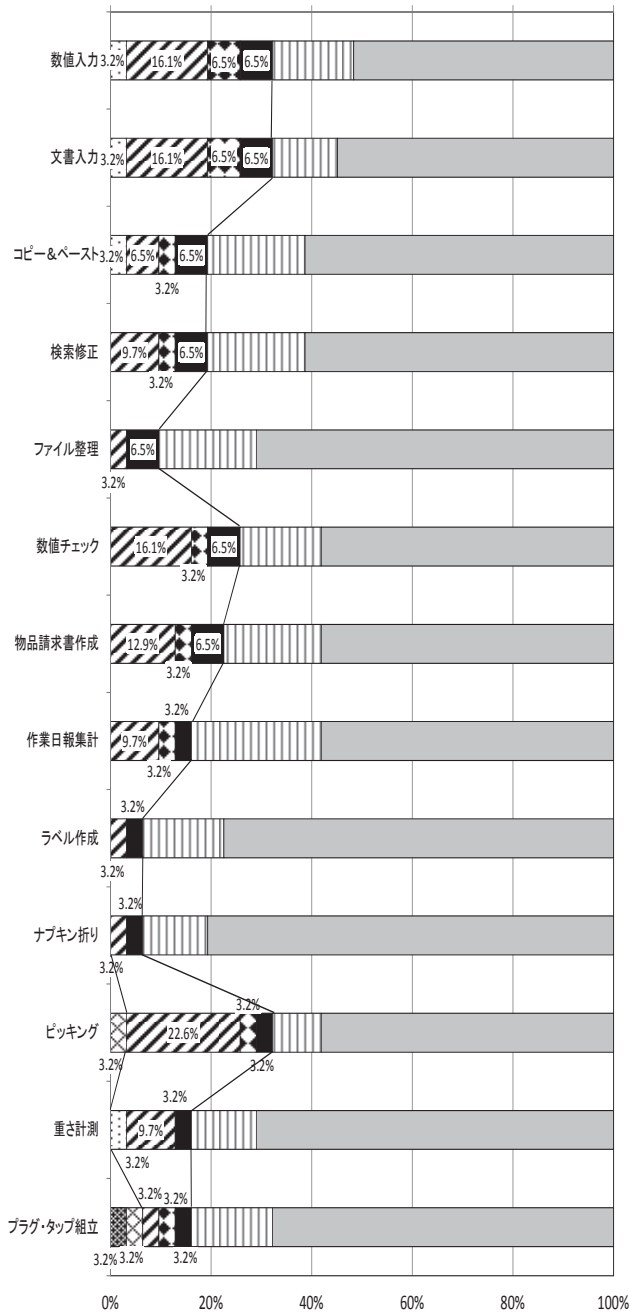
- ⑤ 作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ② 対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④ 対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥ 作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑩ ②と④が混在していた
- ⑦ 自分もアシスタントや指導員等あまり使わなかった
- ⑧ 自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-18 身体障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 各種事業、n=20)



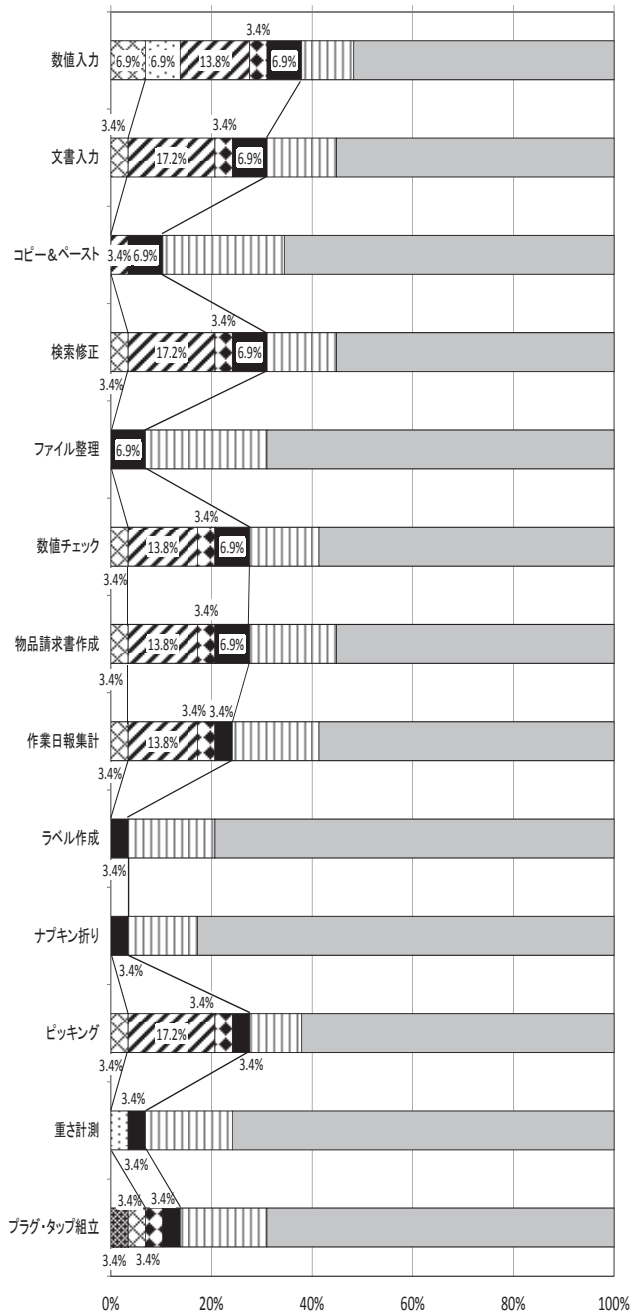
- ③ アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ⑤ 作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ② 対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④ 対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥ 作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑩ ②と④が混在していた
- ⑦ 自分もアシスタントや指導員等あまり使わなかった
- ⑧ 自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-19 精神障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 各種事業、n=38)



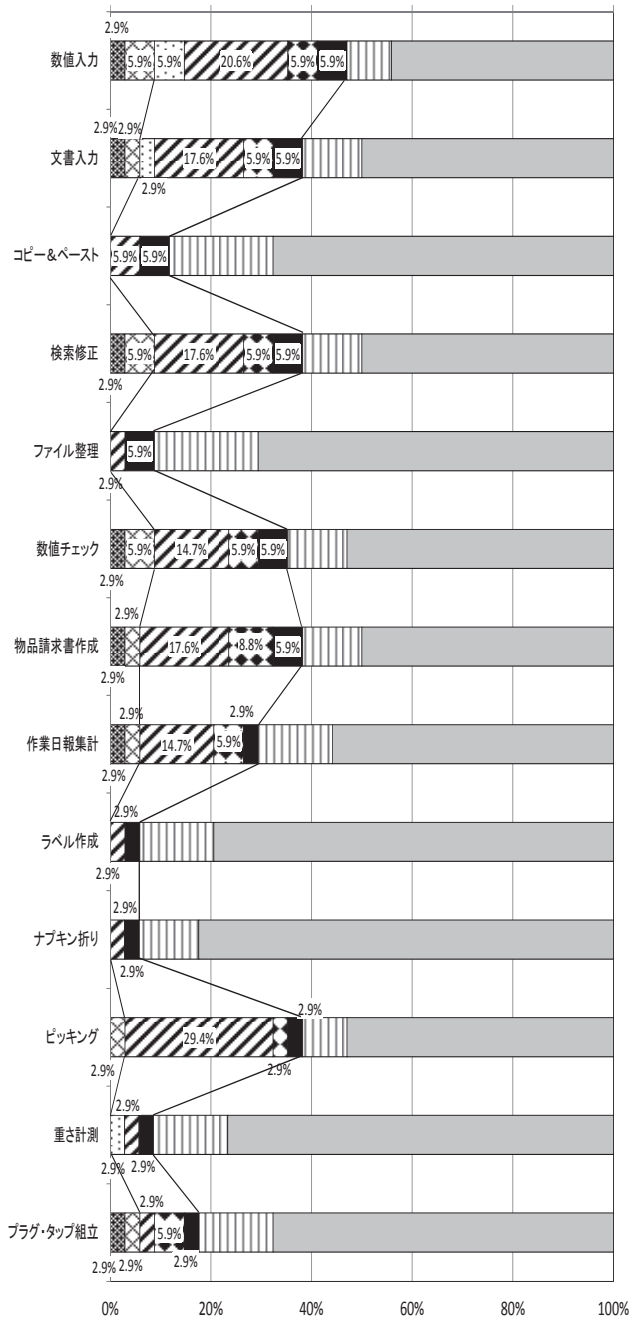
- ③ アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ⑤ 作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ② 対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④ 対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥ 作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑩ ②と④が混在していた
- ⑦ 自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧ 自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-20 知的障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 各種事業、n=31)



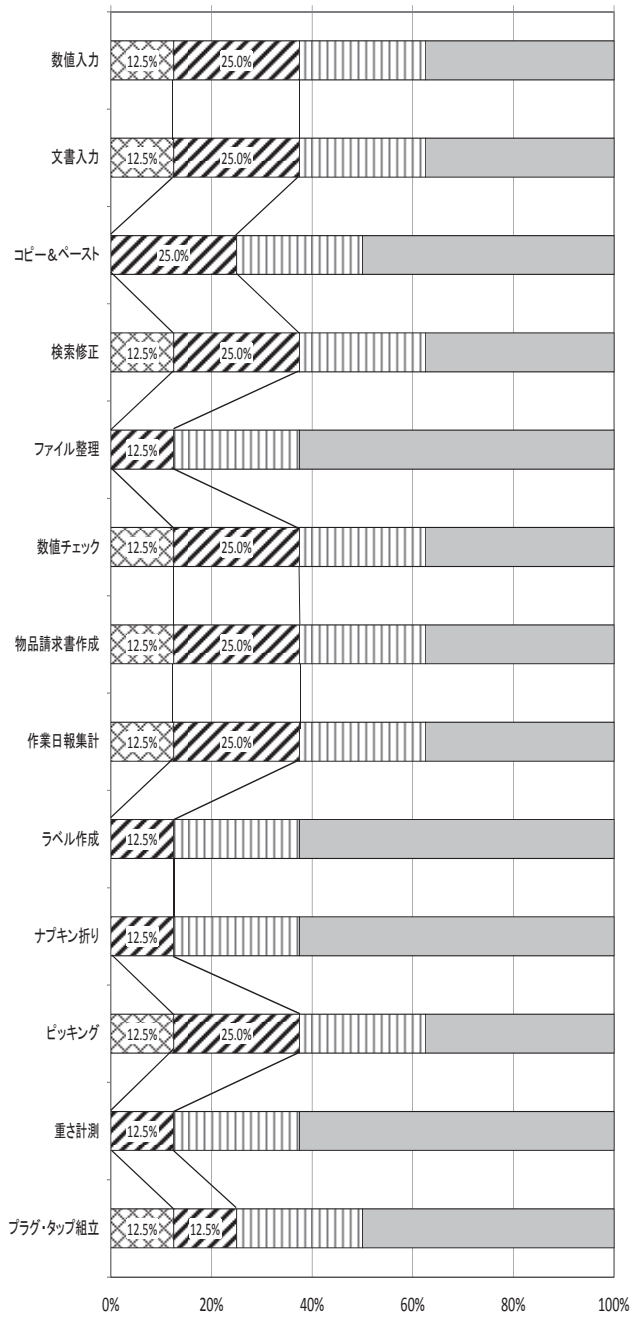
- ③ アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ⑤ 作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ② 対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④ 対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥ 作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑩ ②と④が混在していた
- ⑦ 自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧ 自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-21 高次脳機能障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 各種事業、n=30)



- ③ アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ⑤ 作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ② 対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④ 対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥ 作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑩ ②と④が混在していた
- ⑦ 自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧ 自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-22 発達障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 各種事業、n=34)



- ⑤ 作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ④ 対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑦ 自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧ 自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-23 その他の障害者に対する活用状況
(MWS 簡易版 各種事業、n=9)

(3) MWS 訓練版の活用状況

ア 職業相談・職業評価における MWS 訓練版の活用状況

前項「1 プロフィール(4) 担当業務」の「主な担当業務」と「その他の担当業務」において“職業相談・職業評価”を選択した回答者に対し、職業相談・職業評価における担当障害別活用状況を集計した。その結果を図 2-2-24～2-2-29 に示す。なお、この設問に対する無回答はなかった。

(ア) 身体障害者に対する活用状況 (図 2-2-24)

最も多く活用していたのは「数値入力」「文書入力」(両項目とも「必ず使った」「使うことがあった」に該当する選択肢の合計 34.6% (以下、() 内の%は全て同じ)) で、次いで「ピッキング」(合計 26.8%)、「数値チェック」(合計 23.0%) と続いた。

(イ) 精神障害者に対する活用状況 (図 2-2-25)

最も多く活用していたのは「数値入力」「文書入力」(両項目とも合計 52.4%) で、次いで「数値チェック」(合計 50.1%)、「ピッキング」(合計 45.5%)、「物品請求書作成」(合計 41.0%) と続いた。

(ウ) 知的障害者に対する活用状況 (図 2-2-26)

最も多く活用していたのは「ピッキング」(合計 43.8%) で、次いで「数値入力」「文書入力」(両項目とも合計 36.6%)、「数値チェック」(合計 31.7%) と続いた。

(エ) 高次脳機能障害者に対する活用状況 (図 2-2-27)

最も多く活用していたのは「文書入力」(合計 45.9%) で、次いで「数値入力」(合計 43.2%)、「数値チェック」「ピッキング」(両項目とも合計 37.8%)、「物品請求書作成」「作業日報集計」(両項目とも合計 35.1%) と続いた。

(オ) 発達障害者に対する活用状況 (図 2-2-28)

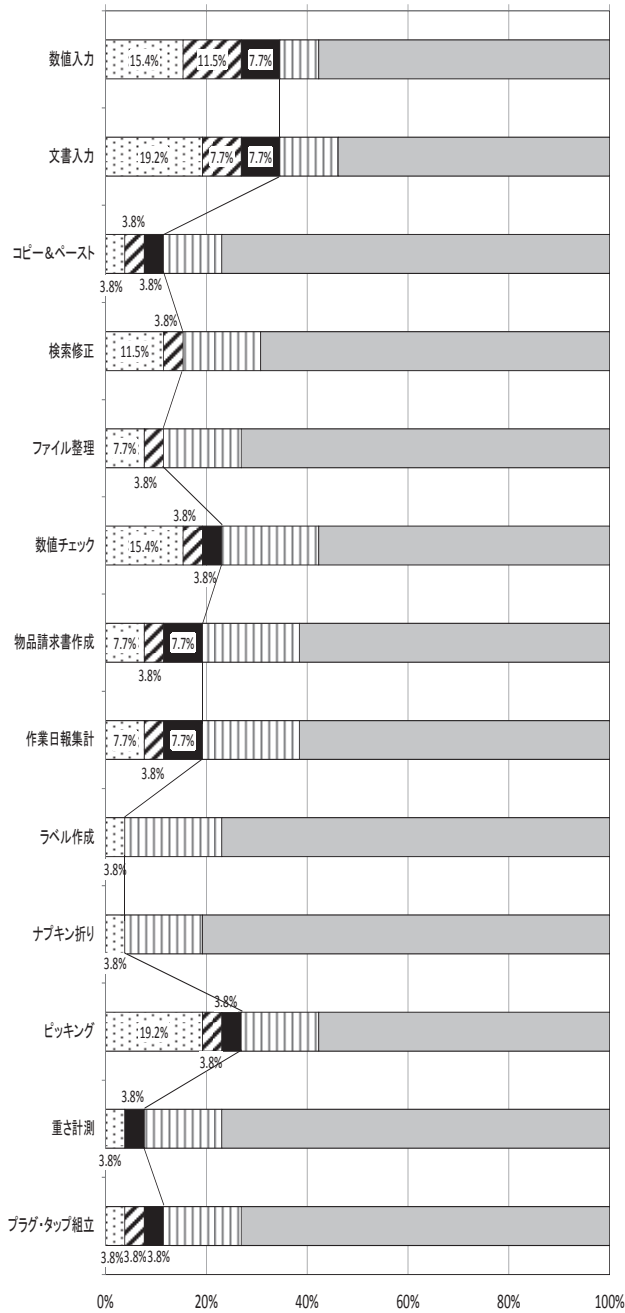
最も多く活用していたのは「文書入力」(合計 50.0%) で、次いで「数値入力」(合計 45.5%)、「ピッキング」(合計 43.2%)、「数値チェック」(合計 40.8%) と続いた。

(カ) その他の障害者に対する活用状況 (図 2-2-29)

最も多く活用していたのは「数値入力」「文書入力」(両項目とも合計 52.6%) で、次いで「ピッキング」(合計 36.9%)、「物品請求書作成」「作業日報集計」(両項目とも合計 36.8%) と続いた。

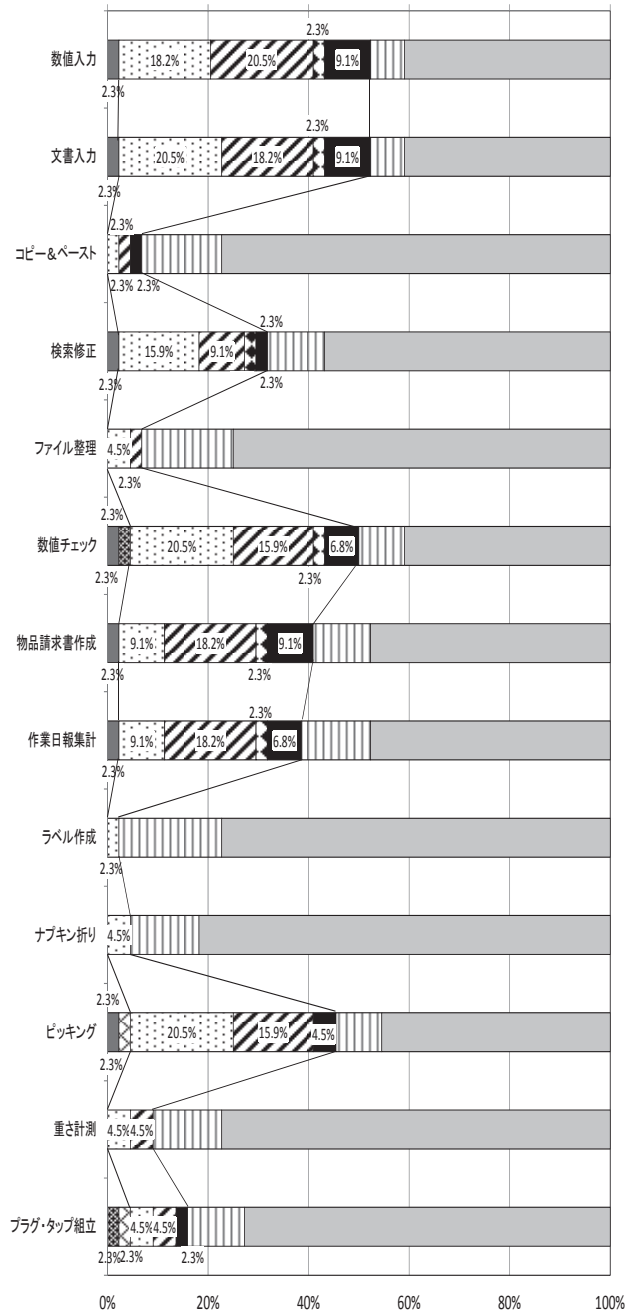
半数以上の回答者に活用されていたワークサンプルの数は、精神障害者が 3 つ、その他の障害者が 2 つ、発達障害者が 1 つであった。半数以上の回答者に共通して活用されているのは「文書入力」であった。職業相談・職業評価における MWS 訓練版の活用状況は、MWS 簡易版ほど高い割合ではないが、元々訓練のために開発されたものであるため、職業相談・職業評価での活用割合の低さは当たり前のこととも取れる。

活用状況を細かく見ると、職業相談・職業評価における MWS 簡易版と同様、回答者自身が実施者となって活用する(選択肢①②)以外に、アシスタントや指導員等に依頼して活用すること(選択肢③④)も多く、これについては職業準備支援を活用した評価で活用しているのではないかと推測される。



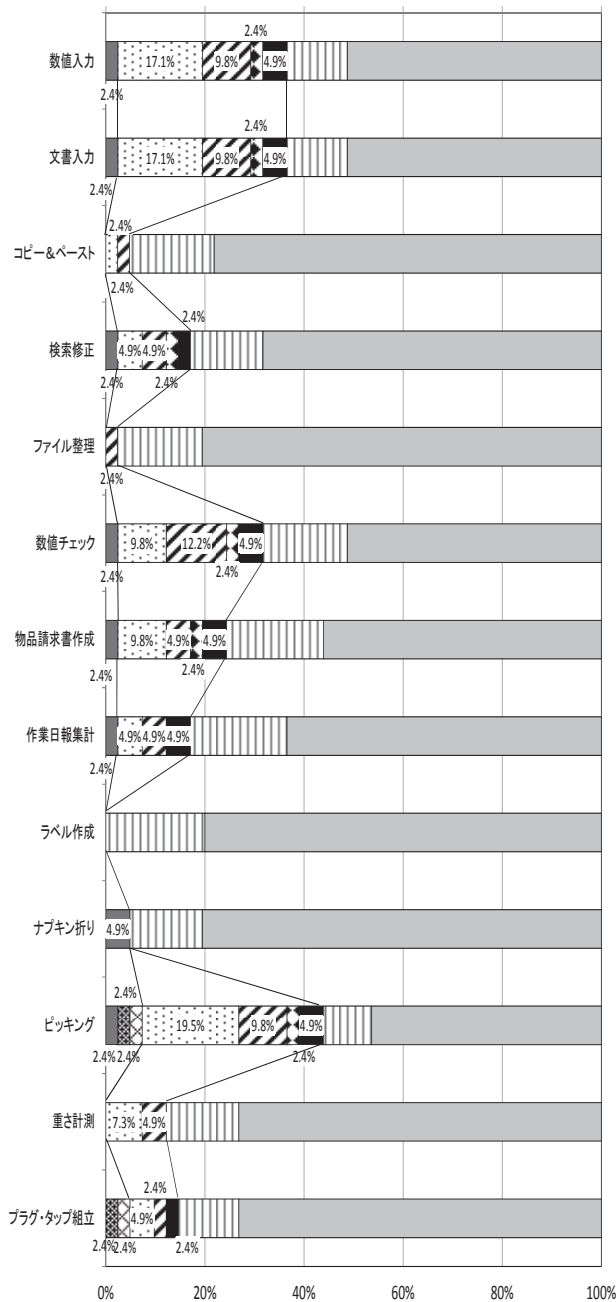
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑩②と④が混在していた
- ⑦自分もアシスタントや指導員等あまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等全く使わなかった

図 2-2-24 身体障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 相談・評価、n=26)



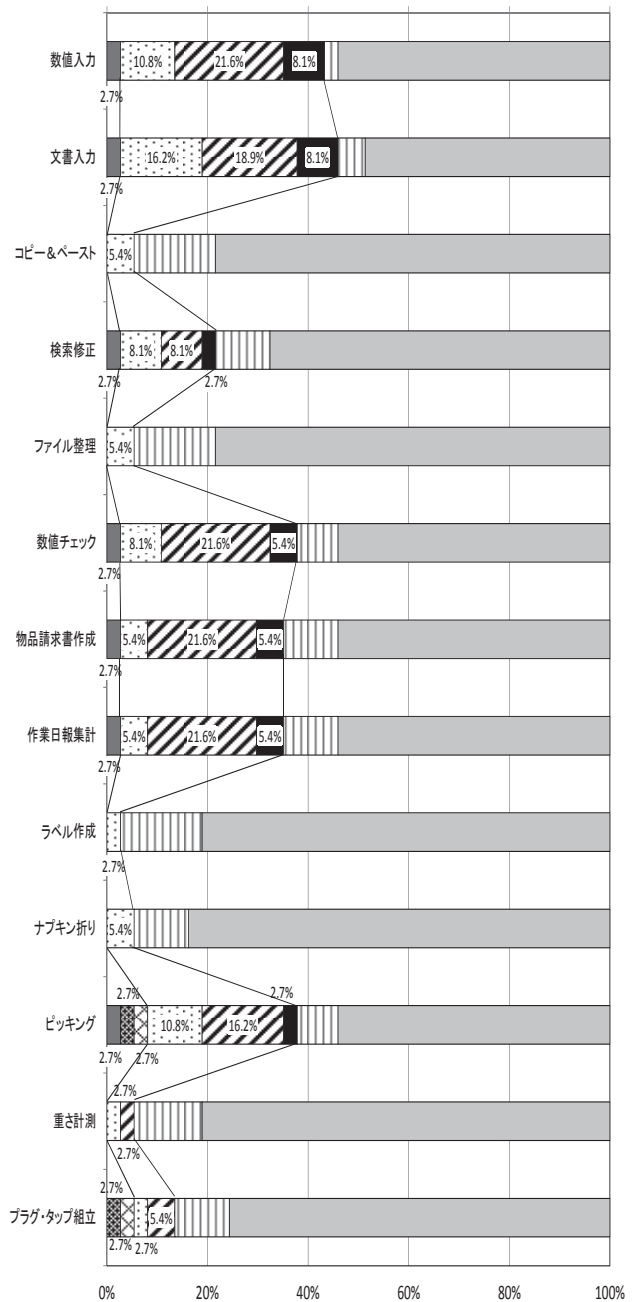
- ①自分が実施者となり、必ず使った
- ③アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ⑥作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑩②と④が混在していた
- ⑦自分もアシスタントや指導員等あまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等全く使わなかった

図 2-2-25 精神障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 相談・評価、n=44)



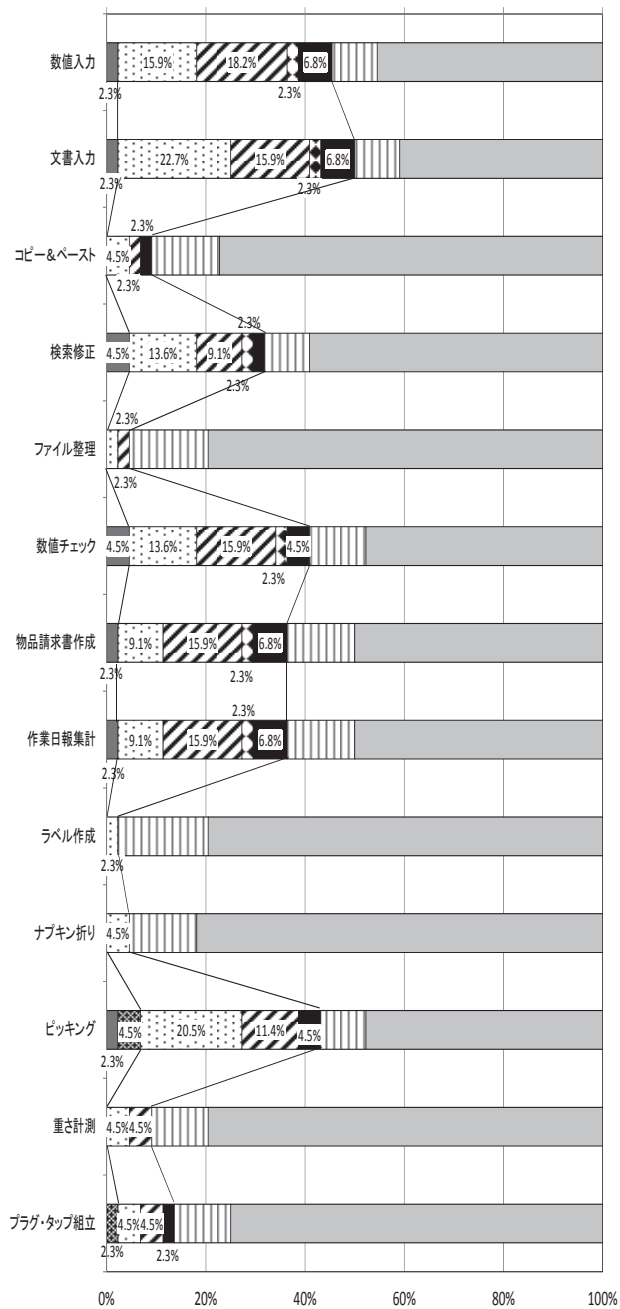
- ①自分が実施者となり、必ず使った
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ③アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑤作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ⑥作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑦自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-26 知的障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 相談・評価、n=41)



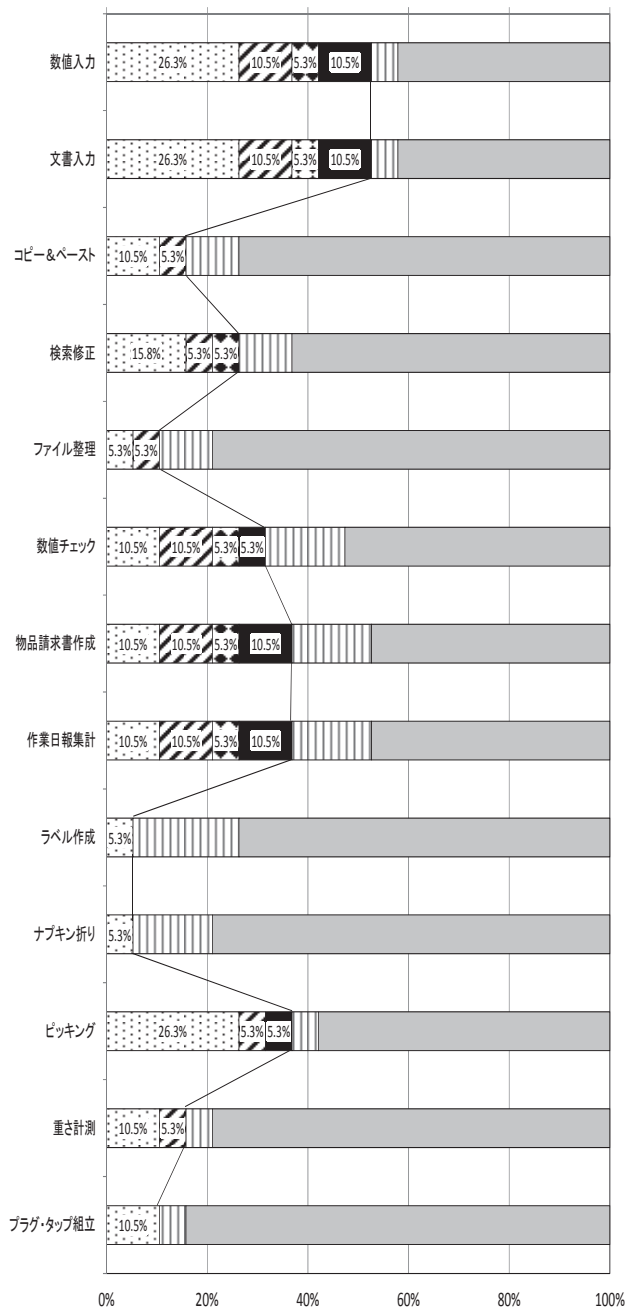
- ①自分が実施者となり、必ず使った
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ③アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑤作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ⑥作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑦自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-27 高次脳機能障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 相談・評価、n=37)



- ①自分が実施者となり、必ず使った
- ③アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑦⑧が混在していた
- ⑦自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-28 発達障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 相談・評価、n=44)



- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑦⑧が混在していた
- ⑦自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-29 その他の障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 相談・評価、n=19)

イ 各種事業における MWS 訓練版の活用状況

前項「1 プロフィール（4）担当業務」の「主な担当業務」と「その他の担当業務」において職業相談・職業評価以外の事業（“各種事業”）を選択した回答者に対し、各種事業における担当障害別活用状況を集計した。その結果を図 2-2-30～2-2-35 に示す。なお、この設問に対する無回答はなかった。

（ア）身体障害者に対する活用状況（図 2-2-30）

最も多く活用していたのは「数値入力」「数値チェック」「作業日報集計」（3項目全て「必ず使った」「使うことがあった」に該当する選択肢の合計 55.0%（以下、（）内の%は全て同じ））で、次いで「文書入力」「検索修正」「物品請求書作成」（3項目全て合計 50.0%）と続いた。

（イ）精神障害者に対する活用状況（図 2-2-31）

最も多く活用していたのは「数値チェック」（合計 73.8%）、次いで「検索修正」（合計 71.1%）、「文書入力」（合計 65.8%）、「作業日報集計」（合計 65.7%）、「数値入力」「物品請求書作成」（両項目とも合計 63.2%）、「ピッキング」（合計 55.2%）と続いた。

（ウ）知的障害者に対する活用状況（図 2-2-32）

最も多く活用していたのは「ピッキング」（合計 51.5%）で、半数以上の回答者に活用されていたのはこれのみであった。

（エ）高次脳機能障害者に対する活用状況（図 2-2-33）

最も多く活用していたのは「数値チェック」（合計 65.4%）で、次いで「数値入力」「文書入力」「作業日報集計」（3項目全て合計 62.0%）、「検索修正」「物品請求書作成」（両項目とも合計 58.6%）、「ピッキング」（同じく合計 55.0%）と続いた。

（オ）発達障害者に対する活用状況（図 2-2-34）

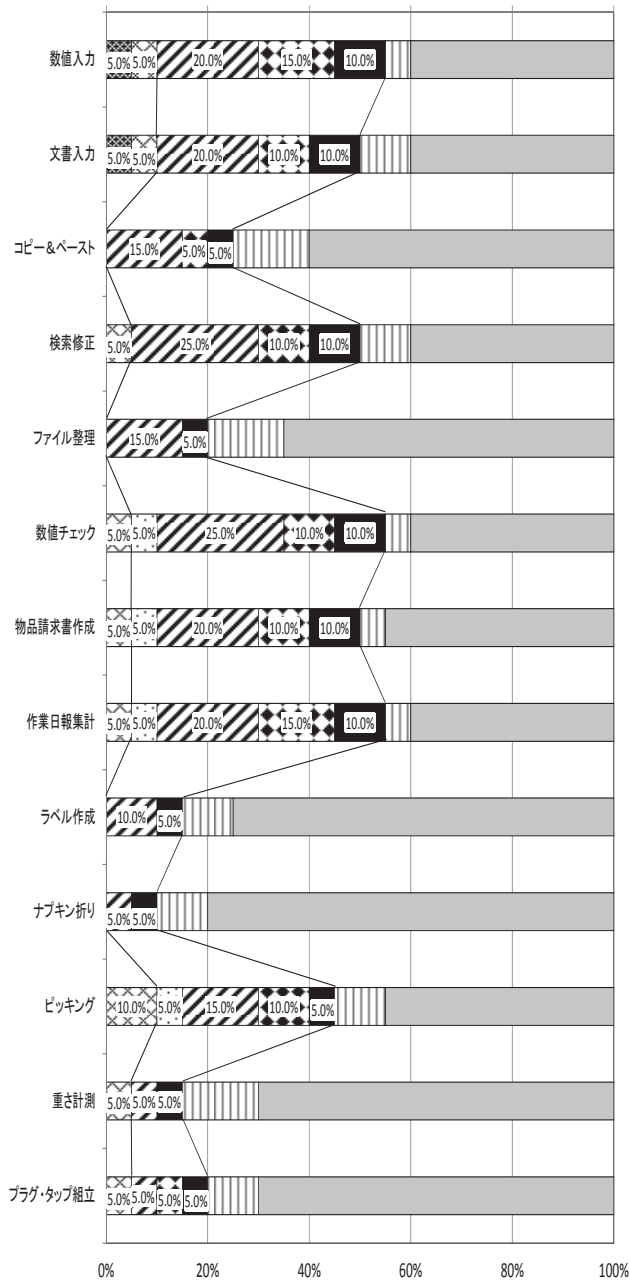
最も多く活用していたのは「数値チェック」（合計 67.6%）で、次いで「文書入力」「作業日報集計」（両項目とも合計 61.7%）、「数値入力」（合計 58.8%）、「検索修正」「物品請求書作成」（両項目とも合計 58.7%）、「ピッキング」（合計 55.7%）と続いた。

（カ）その他の障害者に対する活用状況（図 2-2-35）

最も多く活用していたのは「数値入力」「文書入力」「検索修正」「数値チェック」「物品請求書作成」「作業日報集計」「ピッキング」（7項目全て合計 62.5%）であった。

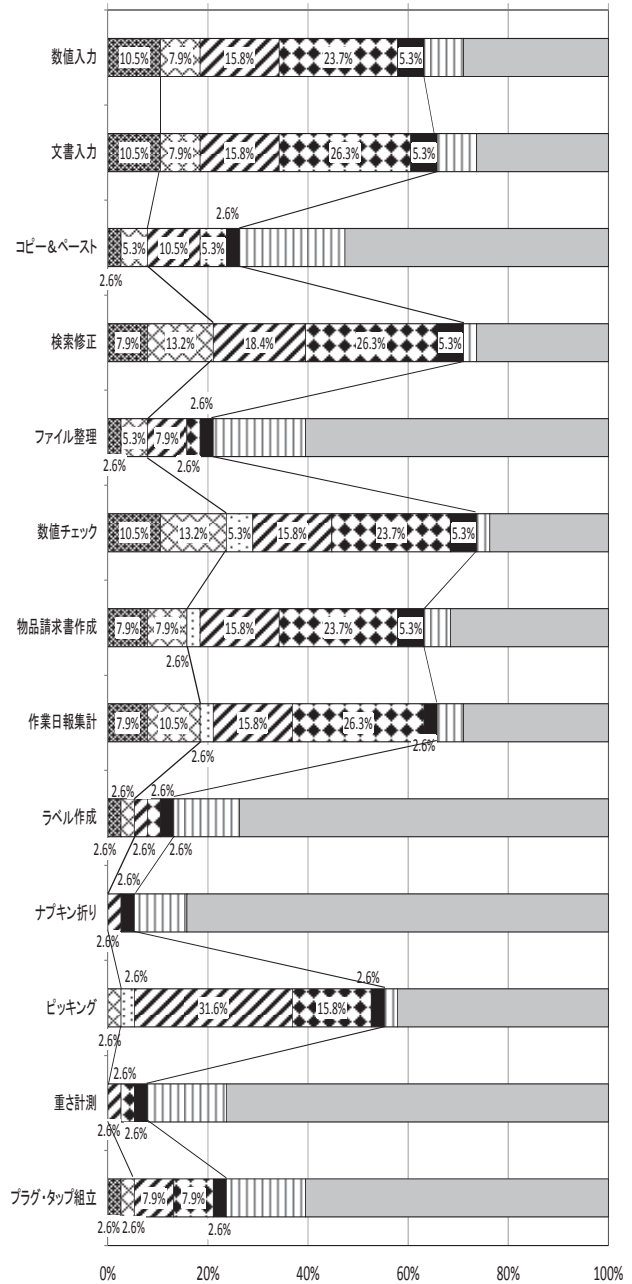
半数以上の回答者に活用されていたワークサンプルの数は、精神障害者・高次脳機能障害者・発達障害者・その他の障害者が 7 つ、身体障害者が 6 つ、知的障害者が 1 つであった。知的障害者を除き、全ての障害者に共通して、半数以上の回答者が活用しているワークサンプルは「数値入力」「文書入力」「検索修正」「数値チェック」「物品請求書作成」「作業日報集計」であった。

また、活用状況を細かく見ると、MWS 簡易版における各種事業と同様、回答者自身が実施者となって活用することは少なく、アシスタントや指導員等へ依頼する（選択肢③④）、または作業支援のメニューとして活用する（選択肢⑤⑥）ことが多いといえる。



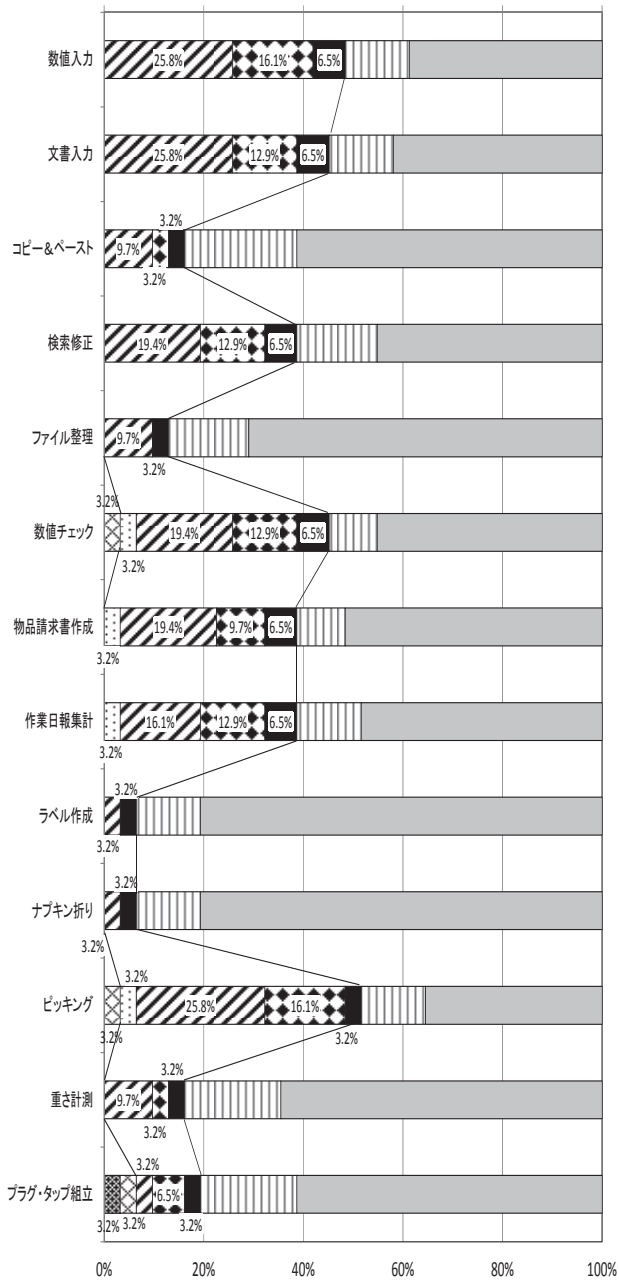
- ③アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ⑤作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑩②と④が混在していた
- ⑦自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-30 身体障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 各種事業、n=20)



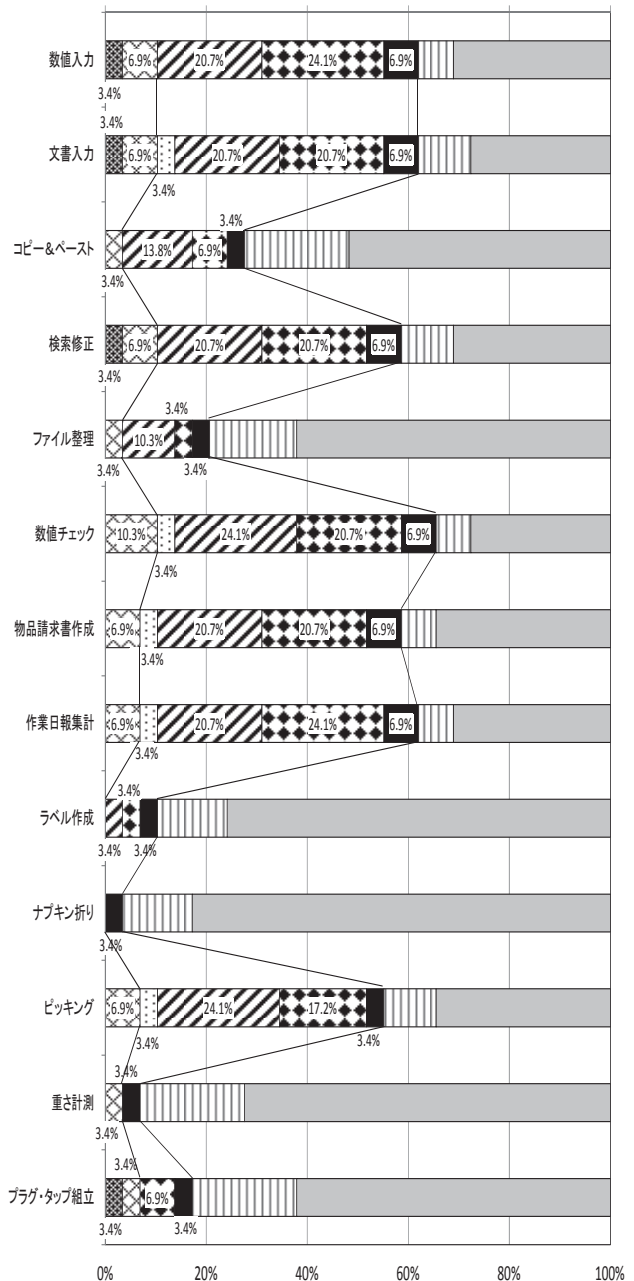
- ③アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ⑤作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ②対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑩②と④が混在していた
- ⑦自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-31 精神障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 各種事業、n=38)



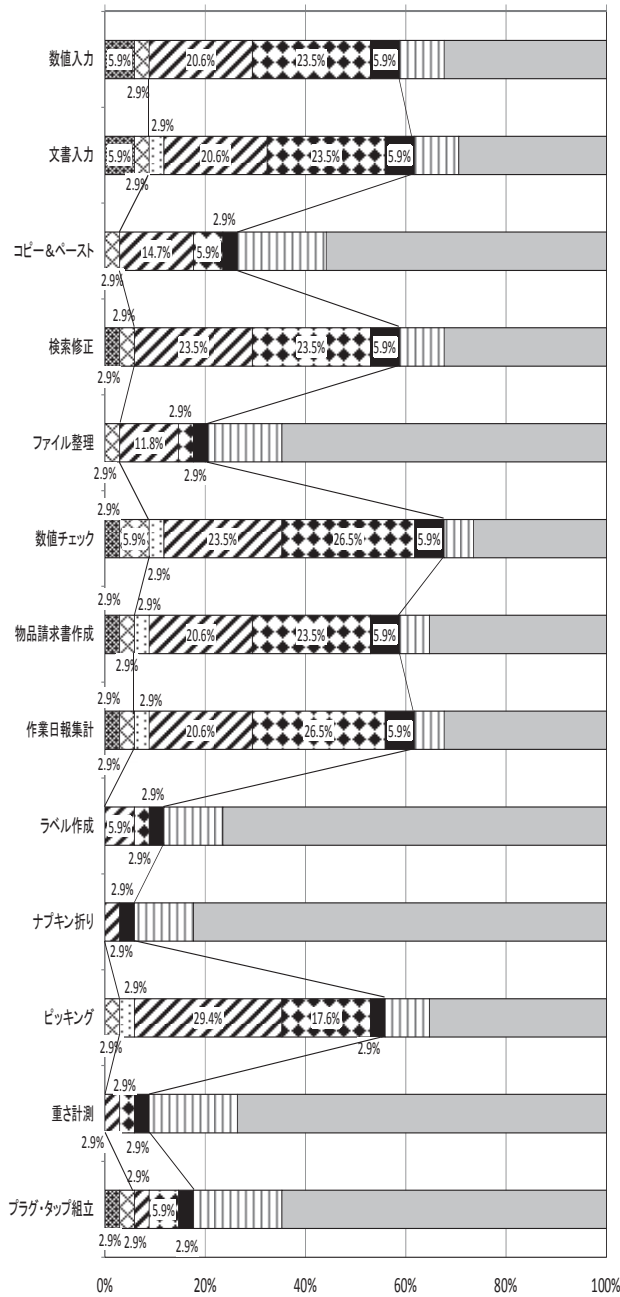
- ② 対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ③ アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ④ 対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑤ 作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ⑥ 作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑦ ②と④が混在していた
- ⑧ ②と④が混在していた
- ⑨ ②と④が混在していた
- ⑩ 自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑪ 自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-32 知的障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 各種事業、n=31)



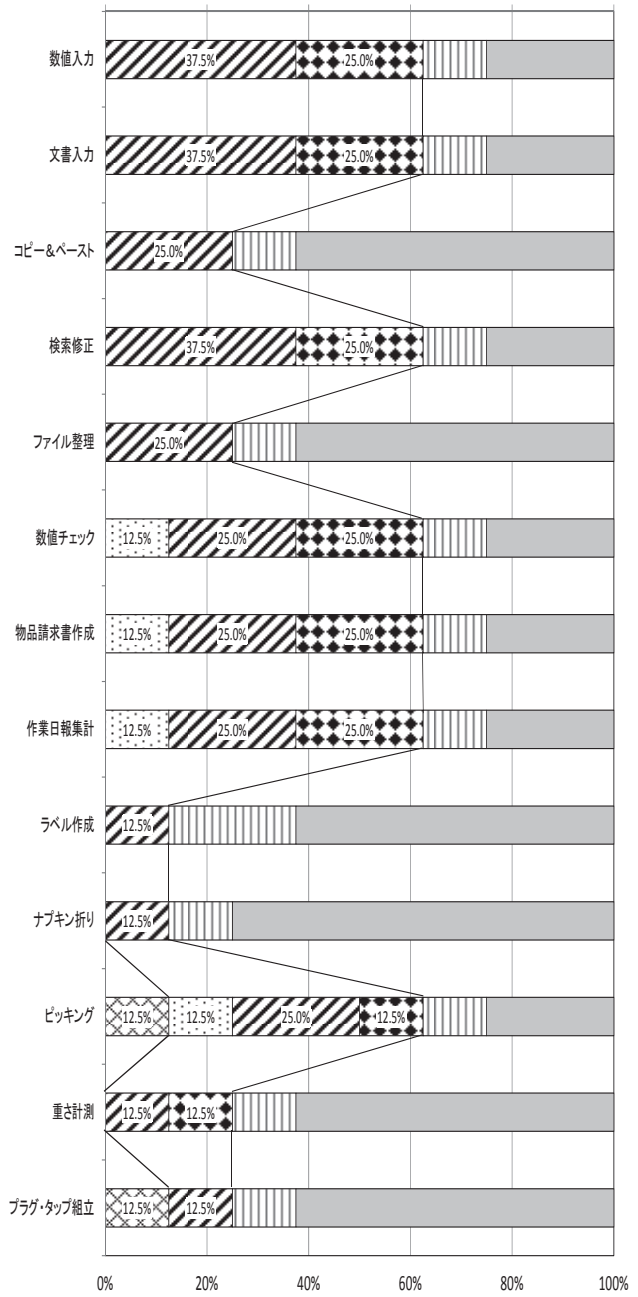
- ② 対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ③ アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ④ 対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑤ 作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ⑥ 作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑦ ②と④が混在していた
- ⑧ ②と④が混在していた
- ⑨ ②と④が混在していた
- ⑩ 自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑪ 自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-33 高次脳機能障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 各種事業、n=29)



- ③ アシスタントや指導員等に依頼し、必ず使った
- ⑤ 作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ② 対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④ 対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥ 作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑦ ②と④が混在していた
- ⑦ 自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧ 自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-34 発達障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 各種事業、n=34)



- ⑤ 作業支援のメニューに組み込まれており、必ず使った
- ② 対象者の状況によって、自分が実施者となり、使うことがあった
- ④ 対象者の状況によって、アシスタントや指導員等に依頼し、使うことがあった
- ⑥ 作業支援のメニューに組み込まれており、対象者の状況によって、使うことがあった
- ⑦ 自分もアシスタントや指導員等もあまり使わなかった
- ⑧ 自分もアシスタントや指導員等も全く使わなかった

図 2-2-35 その他の障害者に対する活用状況
(MWS 訓練版 各種事業、n=8)

(4) MWS ホームワーク版の活用状況

MWS ホームワーク版とは、市販化している MWS 簡易版・訓練版とは別に、平成 16 年度から 18 年度に実施した『事業主、家族等との連携による職業リハビリテーション技法に関する総合的研究』において開発した自宅自習用の支援ツールである。「事務作業」として“健康管理グラフ”、“宛名作成”、“家計簿作成”、「実務作業」として“食器洗い”、“洗濯物たたみ”、“包丁の使い方”の計 6 つのワークサンプルがあり、現在、広域・地域センターのみに配布している。

ア 職業相談・職業評価

知的障害者を除く 5 つの担当障害において“健康管理グラフ”、“宛名作成”、“家計簿作成”を「対象者の状況によって、自分が実施者となって使うことがあった」と回答した者が 1~2 名いた。知的障害者については、“健康管理グラフ”、“家計簿作成”を「対象者の状況によって、自分が実施者となって使うことがあった」と回答した者が 1 名いた。

イ 各種事業

職業相談・職業評価とは若干異なり、身体障害者・知的障害者に対して「実務課題」の“食器洗い”、“洗濯物たたみ”を活用している回答者がいた。また、「事務課題」の“宛名作成”を作業支援のメニューに組み込んでいるとする回答者もいた。ただし、活用している回答者は数名に留まっている。

(5) MWS 簡易版及び MWS 訓練版結果整理票の活用状況

ア MWS 簡易版結果整理票の活用状況

MWS 簡易版結果整理票の活用状況を図 2-2-36 に示す。

MWS 簡易版結果整理票は、MWS 簡易版の各ワークサンプルの正答数や作業時間を所定の様式に入力すると、自動的にパーセント順位を算出する様式である。

「よく活用している」と「時々、活用している」を合わせると 60.4%と、半数以上のカウンセラーが活用していた。また、「存在を知らない」カウンセラーは 3.6%と少数であった。

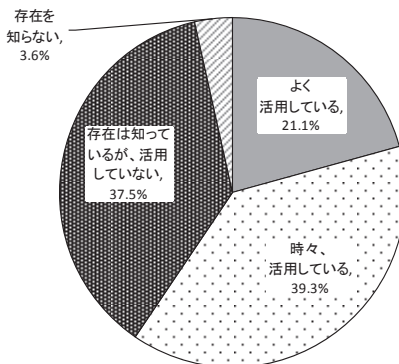


図 2-2-36 MWS 簡易版結果整理票の活用状況（全体、n=57）

イ MWS 訓練版結果整理票の活用状況

MWS 訓練版結果整理票の活用状況を図 2-2-37 に示す。

MWS 訓練版結果整理票は、MWS 訓練版の事務・実務作業の各ワークサンプルの正答数や作業時間を所定の様式に入力すると、自動的に正答率の算出や正答率グラフ等を作成する様式である。なお、OA 作業の各ワークサンプルの結果は、自動的に集計され、MWS 訓練版結果整理票と同じ様式を自動作成できるようにしている。

「よく活用している」と「時々、活用している」を合わせると 44.6%と半数を割り、MWS 簡易版結果整理票ほど活用されてはいないようであった。

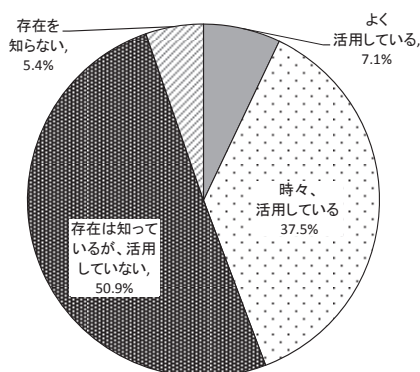


図 2-2-37 MWS 訓練版結果整理票の活用状況（全体、n=57）

3 活用の目的と効果

(1) 活用の目的と効果

この設問は、職業相談・職業評価、各種事業それぞれを担当したカウンセラーが回答対象となっている。回答にあたっては、「(1) 作業遂行力向上」から「(14) その他」の14項目に対し、「この目的で活用することが多かった」から「この目的で活用することは全くなかった」の4件法で回答を求め、次に、「この目的で活用することが多かった」及び「この目的で活用することが多少あった」を選択した回答者のみ、その効果について「とても効果があった」から「全く効果がなかった」の4件法で回答を求めた。

ア 職業相談・職業評価

職業相談・職業評価における活用の目的と効果を図2-2-38に示す。ただし、「(14) その他」の回答数は1件と少なかったため、図に含めていない。

活用の目的として回答が多かったのは、「(8) 作業能力や適性の評価」で、「この目的で活用することがとても多かった」と「この目的で活用することが多少あった」を合わせて91.3%であった。次いで、「(4) 自己認知の促進」(同じく73.9%)、「(10) 補完方法獲得に向けた検討」(同じく71.7%)、「(5) 障害の自己受容」「(11) 易疲労性の評価」(両項目とも、同じく67.4%)であった。

なお、「この目的で活用することがとても多かった」だけを見ると、「(8) 作業能力や適性の評価」(73.9%)、「(4) 自己認知の促進」(41.3%)、「(5) 障害の自己受容」(39.1%)が続き、職業相談・職業評価場面では、“評価”そのものとその結果に基づいた“自己理解へのアプローチ”のために活用されていると考えられる。

また、「この目的で活用することがとても多かった」及び「この目的で活用することが多少あった」を

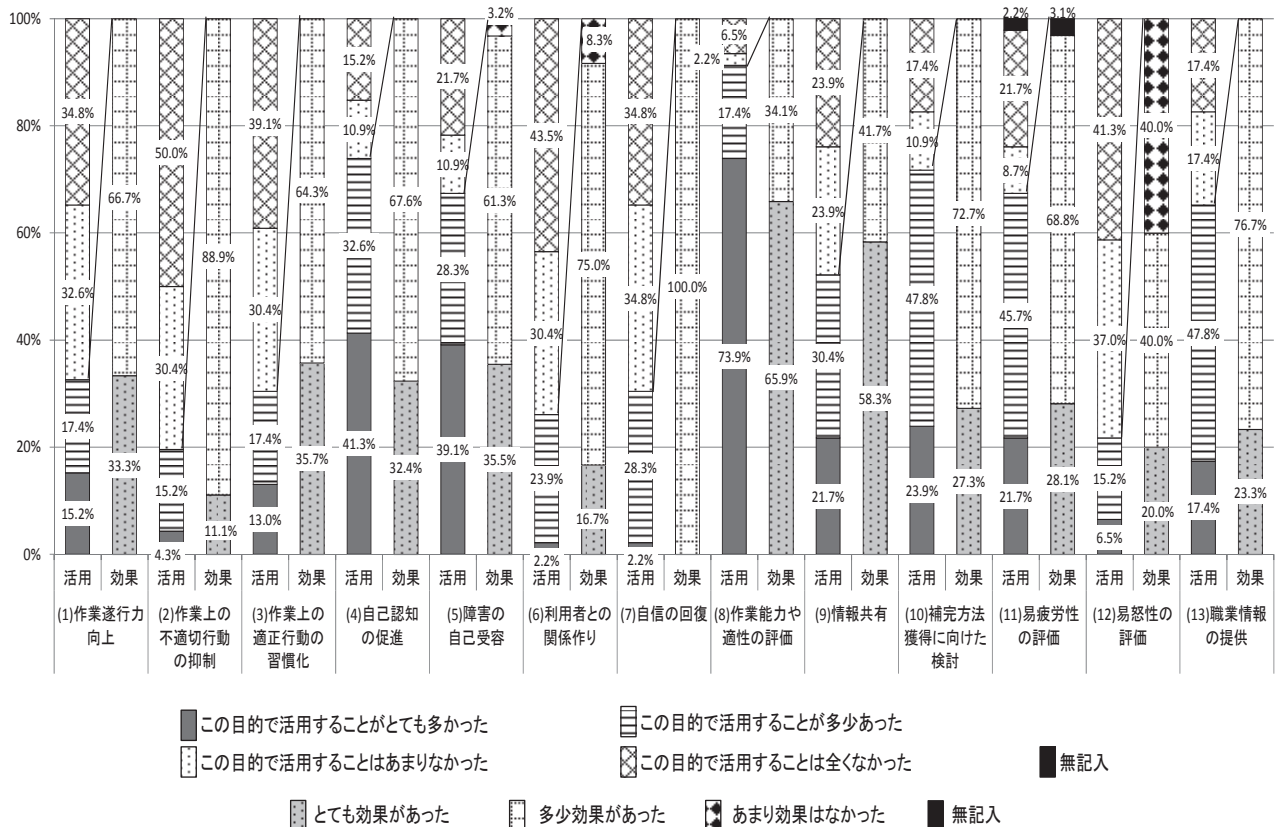


図 2-2-38 職業相談・職業評価における MWS 活用の目的と効果 (全体、n=46)

選択した回答者が感じたその効果について見ると、いずれの項目も「とても効果があった」と「多少効果があった」でほとんどを占め、「全く効果はなかった」とした回答はなかった。しかし、「あまり効果はなかった」とした回答が「(12) 易怒性の評価」(40.0%)、「(6) 利用者との関係作り」(8.3%)、「(5) 障害の自己受容」(3.2%)にあった。特に、「(12) 易怒性の評価」は40.0%と高い割合であった。その理由として、職業相談・職業評価場面では、前項の「2 活用状況」からMWS簡易版を中心に活用されていると推察され、短い時間で訓練版の全レベルを体験できるように構成されているMWS簡易版では、利用者が作業に困り、イライラするような場面は生じにくく、怒りの感情を外に出すに至らない場合が多いのではないかと考えられる。

「(14) その他」の回答は1件で、『求職中の利用者に対して事務課題を実施した後、事務系の仕事への興味・関心(苦にならないか等)を確認したり、観察の結果、持続できそうか予測するために活用することがある』という意見が挙げられた。

なお、「(9) 情報共有」で「この目的で活用することが多かった」と「この目的で活用することが多少あった」に回答した者が情報共有を行った相手について、図2-2-39に示す。

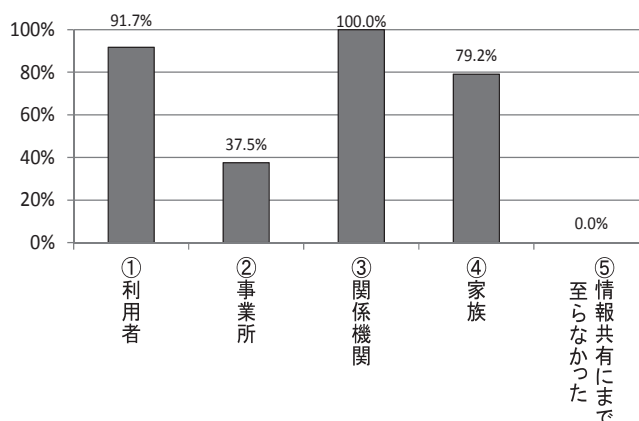


図2-2-39 職業相談・職業評価「(9) 情報共有」の相手(複数回答、n=24)

ここでは、回答者全員が「③関係機関」を挙げ、次いで「①利用者」(91.7%)、「④家族」(79.2%)が続いた。「②事業所」は37.5%と他と比べて低かった。

イ 各種事業

各種事業における活用の目的と効果を図2-2-40に示す。ただし、「(14) その他」は回答がなかったため、図には含めていない。

活用の目的として回答が多かったのは、職業相談・職業評価と同様「(8) 作業能力や適性の評価」で、「この目的で活用することがとても多かった」と「この目的で活用することが多少あった」を合わせて82.0%であった。次いで、「(4) 自己認知の促進」(同じく79.5%)、「(1) 作業遂行力向上」(同じく76.9%)、「(3) 作業上の適正行動の習慣化」「(11) 易疲労性の評価」(両項目、同じく71.8%)であった。

「この目的で活用することがとても多かった」だけを見ると、「(8) 作業能力や適性の評価」(48.7%)、「(1) 作業遂行力向上」(43.6%)、「(4) 自己認知の促進」(38.5%)が続き、職業相談・職業評価場面と異なり、“評価”そのものとその結果に基づいた“自己理解へのアプローチ”に加え、“訓練”のためにも活用されていると考えられる。

また、「この目的で活用することがとても多かった」及び「この目的で活用することが多少あった」を選択した回答者が感じたその効果について見ると、職業相談・職業評価と同じく、いずれの項目も「とても効果があった」と「多少効果があった」でほとんどを占め、「全く効果はなかった」とした回答はなかった。しかし、「あまり効果はなかった」とした回答が「(12) 易怒性の評価」(28.6%)、「(13) 職業情報の提供」(8.7%)、「(7) 自信の回復」(6.3%)、「(11) 易疲労性の評価」(3.6%)、「(4) 自己認知の促進」(3.2%)にあった。

「(12) 易怒性の評価」は28.6%と職業相談・職業評価と比べれば低い割合であったが、各種事業で

の活用が中心である MWS 訓練版においても、実施方法や利用者の障害状況により、作業に困り、イライラするような場面は生じにくく、怒りの感情を外に出すに至らない場合があると考えられる。また、「(13) 職業情報の提供」や「(7) 自信の回復」に関しては、MWS 訓練版を構成しているワークサンプルの内容だけでは、利用者の就職や復職の希望職種に合わない可能性やレベルの設定をしていてもその難易度が十分でないため自信の回復に至らない可能性があると考えられる。「(11) 易疲労性の評価」に関しては、本調査からその原因を特定することはできないが、疲労感を感じずに終了する作業量のワークサンプルもあるため、選択して活用したワークサンプルによっては疲労性の評価につながらない可能性があると考えられる。

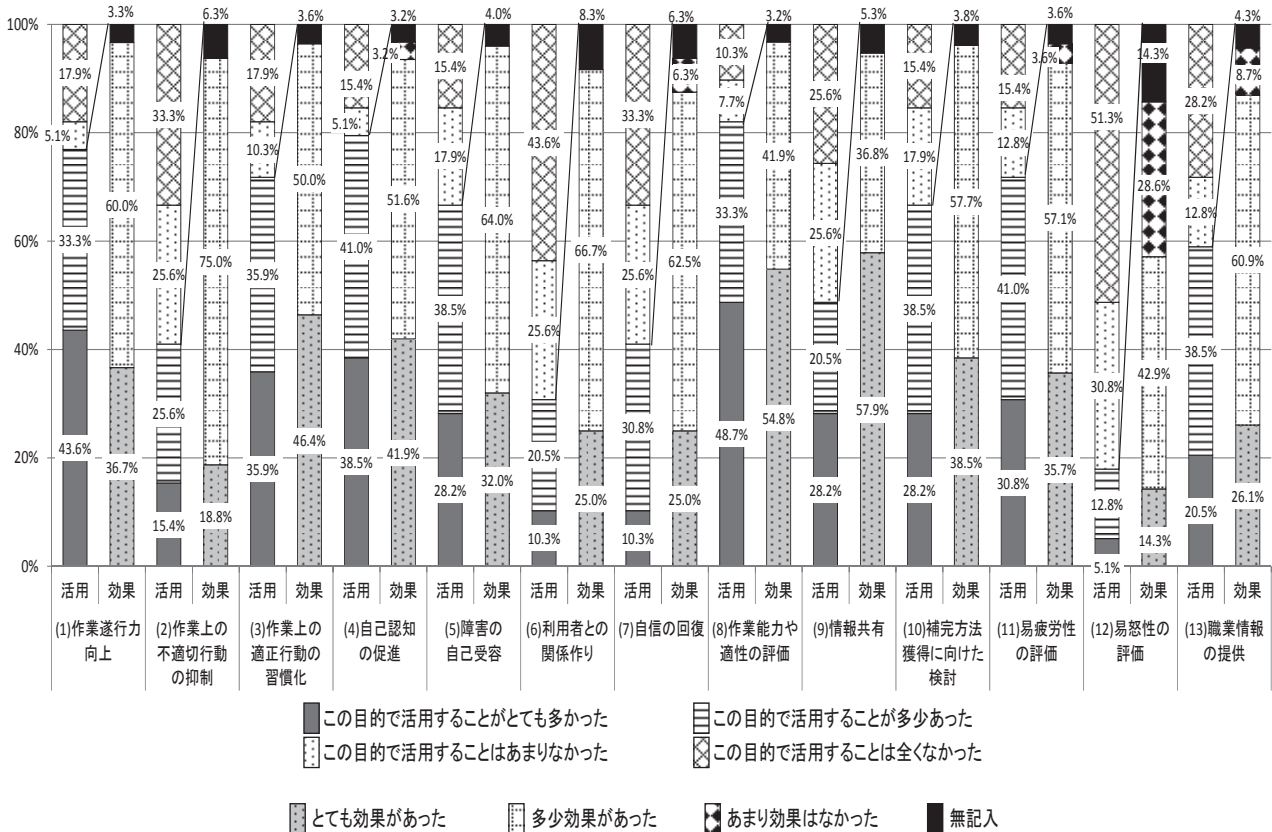


図 2-2-40 各種事業における MWS 活用の目的と効果 (全体、n=39)

なお、「(9) 情報共有」で「この目的で活用することが多かった」と「この目的で活用することが多少あった」の回答者が、情報共有を行った相手について、図 2-2-41 に示す。

ここでは、「①利用者」が最も多く 94.7%、次いで「③関係機関」(84.2%)、「④家族」(57.9%)が続いた。「②事業所」は 47.4%と他と比べて低かった。

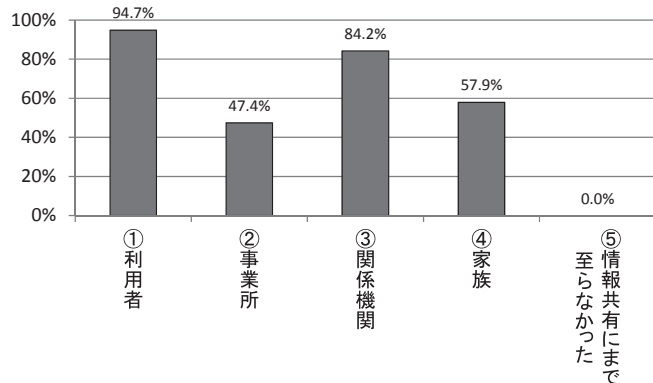


図 2-2-41 各種事業「(9) 情報共有」の相手 (複数回答、n=19)

(2) 結果の活かし方

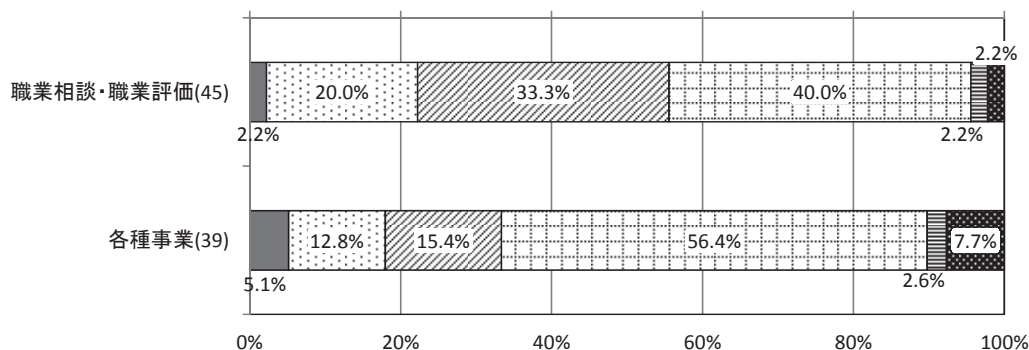
職業相談・職業評価及び各種事業における結果の活かし方を図 2-2-42 に示す。

この設問では、MWS で得られた結果をどのように活用しているか尋ねた。

職業相談・職業評価場面では、各種事業と比べると「③②に加えて、ミスの傾向まで利用者に伝えている」(20.0%)や「④③に加えて、カウンセラー主導で改善や向上の提案まで利用者に伝えている」(33.3%)の割合が高く、各種事業で「⑤③に加えて、利用者自身にもどうすれば改善や向上できるか考えてもらうようにしている」(56.4%)が半数以上を占めていた状況とは異なっていた。

なお、「①評価票等には記録するが、利用者に結果は伝えない」を選択した回答者はいなかった。

また、「⑥その他」には、『会社に結果(グラフ)を示し、良くなった点や、効果的な補完方法を説明している』、『教材・課題を紹介し、データを示して、復職後の職務内容を検討してもらっている』、『対象者によって②～⑤を使い分けている』、『利用者ごとに最も有効と思われるフィードバック方法について検討し、臨機応変に対応するようにしている』といった意見が挙げられた。



- ①評価票等には記録するが、利用者に結果は伝えない
- ②作業時間や正答率等、事実だけを利用者に伝えている
- ③②に加えて、ミスの傾向まで利用者に伝えている
- ▣ ④③に加えて、カウンセラー主導で改善や向上の提案まで利用者に伝えている
- ▤ ⑤③に加えて、利用者自身にもどうすれば改善や向上できるか考えてもらうようにしている
- ▥ ⑥その他
- 無記入

図 2-2-42 結果の活かし方

(3) 活用に係る意識

MWS 活用に係る意識を図 2-2-43 に示す。

この設問では、MWS 活用にあたって、それぞれどの程度自信があるか尋ねた。

5つの設問のうち、「(1) 単独で簡易版・訓練版とも利用者に実施する」と「(4) 実施方法等を施設内外の支援者等に研修する」以外は、「とても自信がある」と「やや自信がある」を合わせると50%を超えていた。特に、広域・地域センターの回答者は、普段からMWS以外のワークサンプル等による結果の解釈やそれを使ったフィードバックを行っているためか、「(2) 実施した結果を分析し、解釈する」や「(3) 分析・解釈した結果を利用者等にフィードバックする」に自信を持っているのであろう。

一方、「(4) 実施方法等を施設内外の支援者等に研修する」は、「あまり自信がない」と「全く自信がない」を合わせると63.1%と高く、「(1) 単独で簡易版・訓練版とも利用者に実施する」に関しても45.6%と「自信がある」とした群と拮抗していた。

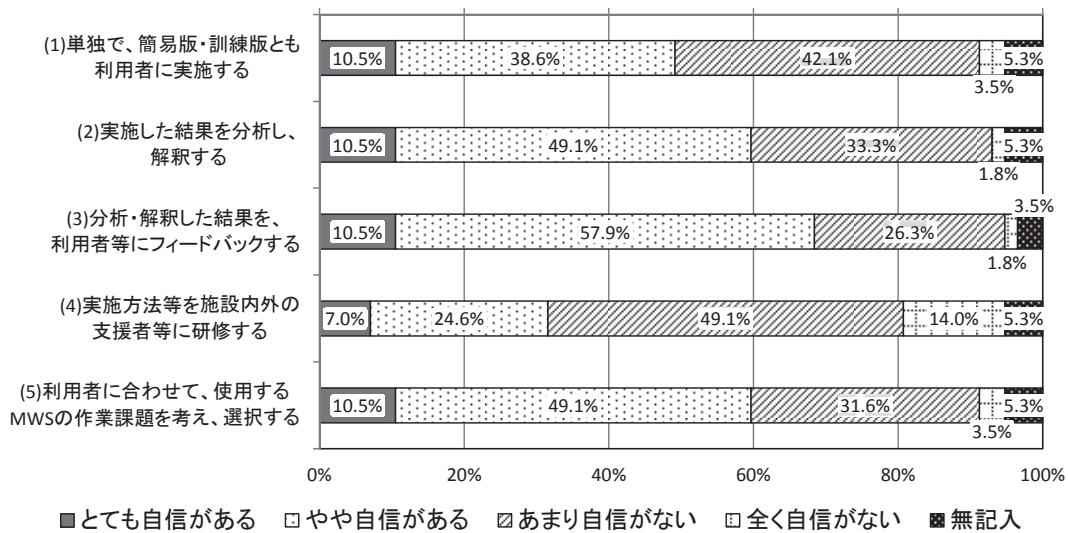


図 2-2-43 活用に係る意識（全体、n=57）

第3節 関係機関におけるMWS活用の現状

1 プロフィール

(1) 回答者の所属機関に関するプロフィール

ア 所属機関

回答者の所属機関を図 2-3-1 に示す。

「福祉機関」が 72.4%と大勢を占め、「医療機関」(8.6%)と合わせると 80%を超えていた。本調査対象期間中に MWS を購入した関係機関は、医療福祉に分類されている関係機関が約半分を占めているため、このように回答者の偏りが生じたと考えられる。

なお、「その他」には、“就労支援機関”、“就労支援センター”が挙げられた。

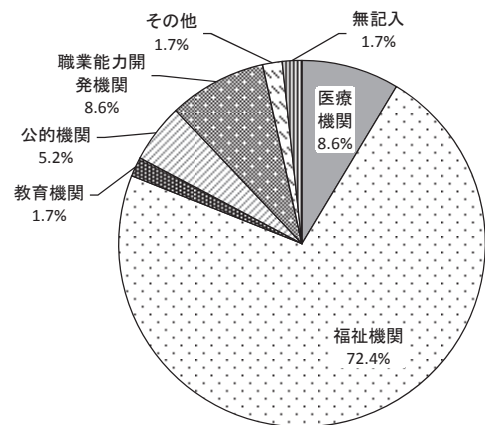


図 2-3-1 回答者の所属機関（全体、n=58）

イ 所属機関の就労支援実施年数

所属機関の就労（復職）支援の実施年数について図 2-3-2 に示す。

「5年未満」(53.4%)が最も多く、「10年未満」(29.3%)が続いた。10年以上の支援実施年数があったのは 13.8%で、就労支援の実施年数が短い関係機関の回答が多かった。

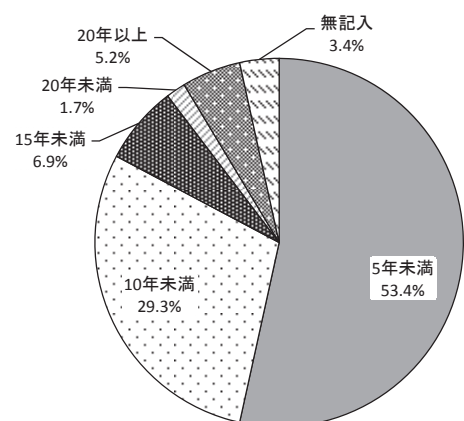


図 2-3-2 所属機関の就労支援実施年数（全体、n=58）

(2) 回答者自身のプロフィール

ア 年代

回答者の年代は、20代、30代が共に 29.3%、40代以上が 41.4%であった。

イ 回答者における就労支援の経験年数

回答者が就労（復職）支援に携わった経験年数について図 2-3-3 に示す。

「5年未満」(56.9%)が最も多く、「10年未満」(27.6%)が続いた。概ね、所属機関の就労実施年数と同様の傾向を示している。

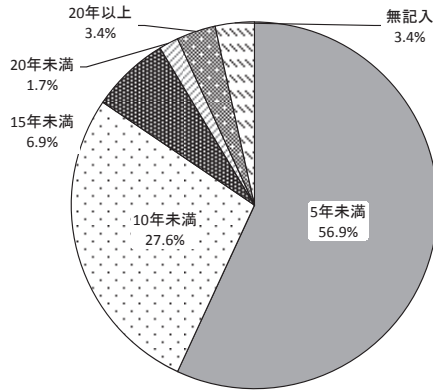


図 2-3-3 回答者の就労支援経験年数（全体、n=58）

ウ 資格

回答者が有している資格について図 2-3-4 に示す。

「社会福祉士」(25.9%)、「精神保健福祉士」(22.4%)が多かった。これは、回答者の所属機関で最も多いのが「福祉機関」ということもあり、これらの資格保持者が多いと考えられる。

なお、「その他」には、述べ21名の回答があり、「第1号ジョブコーチ」が8名、「保育士・幼稚園教諭」3名、「介護福祉士」2名の他、「障害者職業生活支援員」、「キャリアコンサルタント」、「相談支援専門員」、「介護支援専門員」、「自閉症スペクトラム支援士」、「特別支援教育士」等が挙げられた。

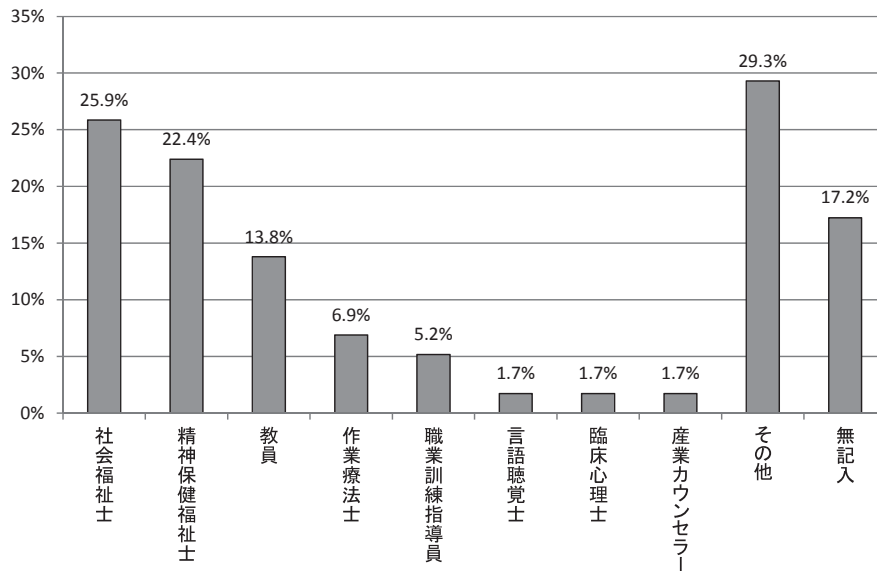


図 2-3-4 回答者の有する資格（複数回答、n=58）

エ 担当障害種類

回答者が担当した利用者の障害種類について図 2-3-5 に示す。

「知的障害」(67.2%)が最も多く、「精神障害」「発達障害」（共に60.3%）が続いた。

なお、「その他」では、“若年性アルツハイマー病”、“聴覚障害”、“難病”が挙げられた。

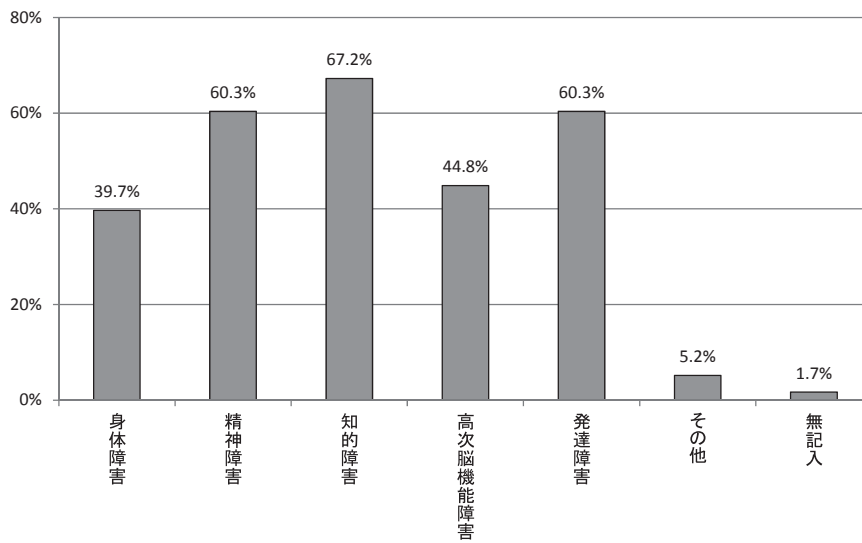


図 2-3-5 回答者の担当する障害種類（複数回答、n=58）

2 活用状況

(1) 所有するワークサンプル

回答者の所属機関で所有しているワークサンプルについて図 2-3-6 に示す。

いずれのワークサンプルも 6 割以上の機関で所有されていた。特に「数値入力」から「ファイル整理」までの“OAWork”^{*3}が 84.5%と最も多く、以下、「数値チェック」(81.0%)、「物品請求書作成」(75.9%)、「作業日報集計」(74.1%)と、事務作業の所有が多かった。

所有ワークサンプルの組合せを図 2-3-7 に示す。これを見ると、「全セット」（MWS 簡易版と MWS 訓

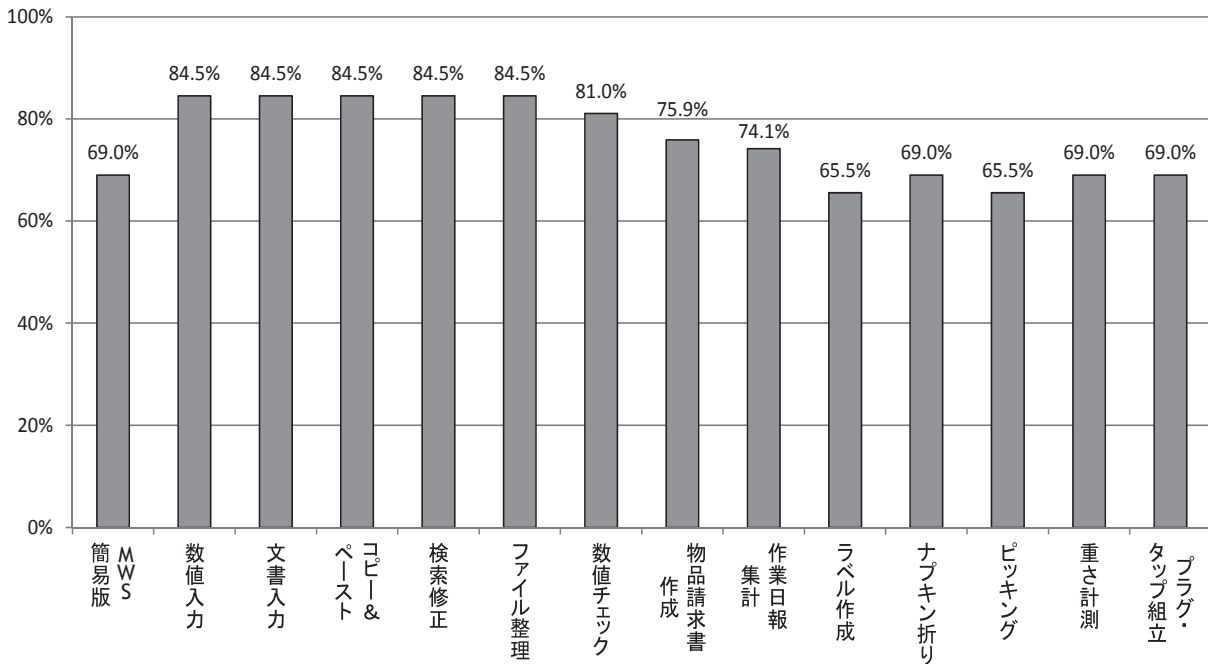


図 2-3-6 所属機関で所有しているワークサンプル（複数回答、n=58）

^{*3} 「数値入力」「文書入力」「コピー&ペースト」「検索修正」「ファイル整理」は、全てアプリケーションソフト“OAWork Ver.3.0”に収められているため、所有割合は同率となる。

練版全てを所有)が51.7%と最も多く、次いで「訓練版のみ選択」(MWS 訓練版 13 種類のうち数種類を所有)が20.7%、「簡易版+訓練版選択」(MWS 簡易版を所有し、さらに MWS 訓練版 13 種類のうち数種類を所有)が8.6%と続いた。

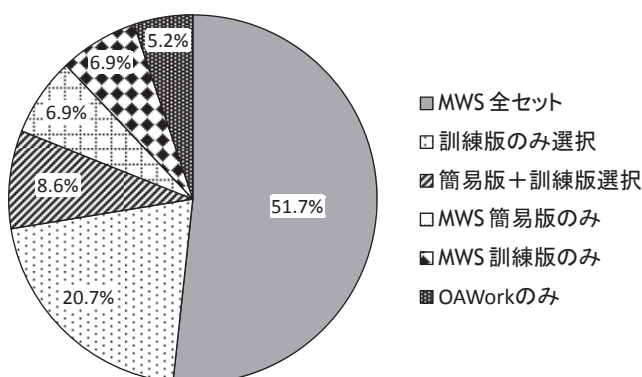


図 2-3-7 所属機関で所有しているワークサンプルの組み合わせ (全体、n=58)

(2) 周辺物品の活用状況

ア マニュアルの活用状況

マニュアル活用状況を図 2-3-8 に示す。

「13 冊全て読み、活用している」と「必要なものだけを読み、活用している」を合わせると 91.4%と、ほとんどの回答者に活用されていた。

イ DVD の活用状況

DVD 活用状況を図 2-3-9 に示す。

「全て見て、活用している」と「必要なものだけを見て、活用している」を合わせると 39.7%と、広域・地域センター同様、マニュアルと比較すると活用状況は低かった。

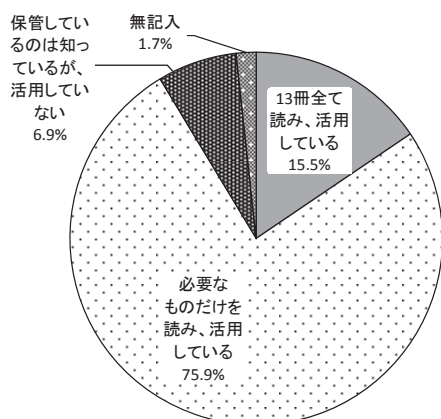


図 2-3-8 マニュアルの活用状況 (全体、n=58)

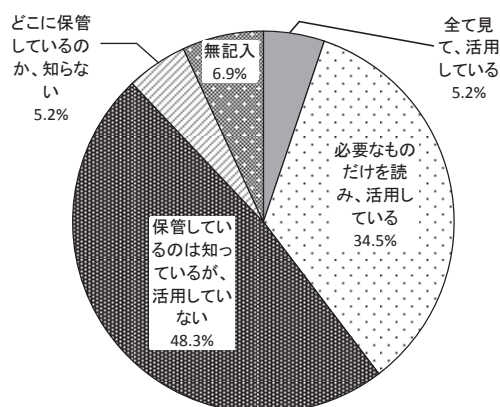


図 2-3-9 DVD の活用状況 (全体、n=58)

(3) MWS 簡易版の活用状況

本項「(1) 所有するワークサンプル」に示したように、MWS 簡易版を所有していない所属機関もあるため、ここでは、MWS 簡易版を所有しているとした回答者のみ集計対象としている。また、活用状況の集計にあたっては、前項「1 プロフィール (2) 回答者自身のプロフィール エ 担当障害種類」におい

て選択した担当障害種類ごとに集計した。その結果を図 2-3-10～2-3-15 に示す。

活用状況を表す選択肢は本来 4 項目あるが、活用状況が無記入の回答者もいたため、図中では「(必ず、または対象者の状況によって)使った」と「あまりまたは全く使わなかった、無記入」に区分し、境界線を引いている。

ア 身体障害者における活用状況 (図 2-3-10)

最も多く活用していたのは「数値入力」「文書入力」(両項目とも「(必ず、または対象者の状況によって)使った」の合計 64.7% (以下、()内の%は全て同じ))で、次いで「コピー&ペースト」「検索修正」「物品請求書作成」(3項目全て合計 47.1%)と続いた。

イ 精神障害者における活用状況 (図 2-3-11)

最も多く活用していたのは「文書入力」(合計 85.1%)で、次いで「数値入力」(合計 81.4%)、「検索修正」「数値チェック」「物品請求書作成」(3項目全て合計 70.3%)、「コピー&ペースト」(合計 66.6%)、「ファイル整理」(合計 62.9%)、「作業日報集計」「ピッキング」(両項目とも合計 59.2%)、「重さ計測」(合計 51.8%)と続いた。

ウ 知的障害者における活用状況 (図 2-3-12)

最も多く活用していたのは「ピッキング」(合計 65.6%)で、次いで「プラグ・タップ組立」(合計 62.6%)、「重さ計測」(合計 59.4%)、「文書入力」(合計 53.2%)、「数値入力」(合計 50.1%)と続いた。

エ 高次脳機能障害者における活用状況 (図 2-3-13)

最も多く活用していたのは「数値入力」「数値チェック」「ピッキング」(3項目全て合計 57.9%)で、次いで「文書入力」「コピー&ペースト」「検索修正」(3項目全て合計 52.7%)、「物品請求書作成」(合計 52.6%)と続いた。

オ 発達障害者における活用状況 (図 2-3-14)

最も多く活用していたのは「数値入力」(合計 68.9%)で、次いで「文書入力」(合計 65.5%)、「コピー&ペースト」「検索修正」「ピッキング」「プラグ・タップ組立」(4項目全て合計 58.6%)、「数値チェック」「物品請求書作成」(両項目とも合計 55.1%)、「ファイル整理」「重さ計測」(両項目とも合計 51.7%)と続いた。

カ その他の障害者における活用状況 (図 2-3-15)

その他の障害者に活用した回答者は 3 名、うち 1 名は無記入のため、活用状況は参考程度に留まる。

半数以上の回答者に活用されていたワークサンプルの数は、精神障害者・発達障害者が 10、高次脳機能障害者が 7つ、知的障害者が 5つ、身体障害者が 2つであった。全ての障害者に共通して、半数以上の回答者に活用されているのは「数値入力」「文書入力」で、これは広域・地域センターの職業相談・職業評価における MWS 簡易版の活用状況と同様であったが、「コピー&ペースト」「ファイル整理」「重さ計測」「プラグ・タップ組立」といった広域・地域センターでの活用が少ないワークサンプルも、障害種類によってはよく活用されている特徴があった。

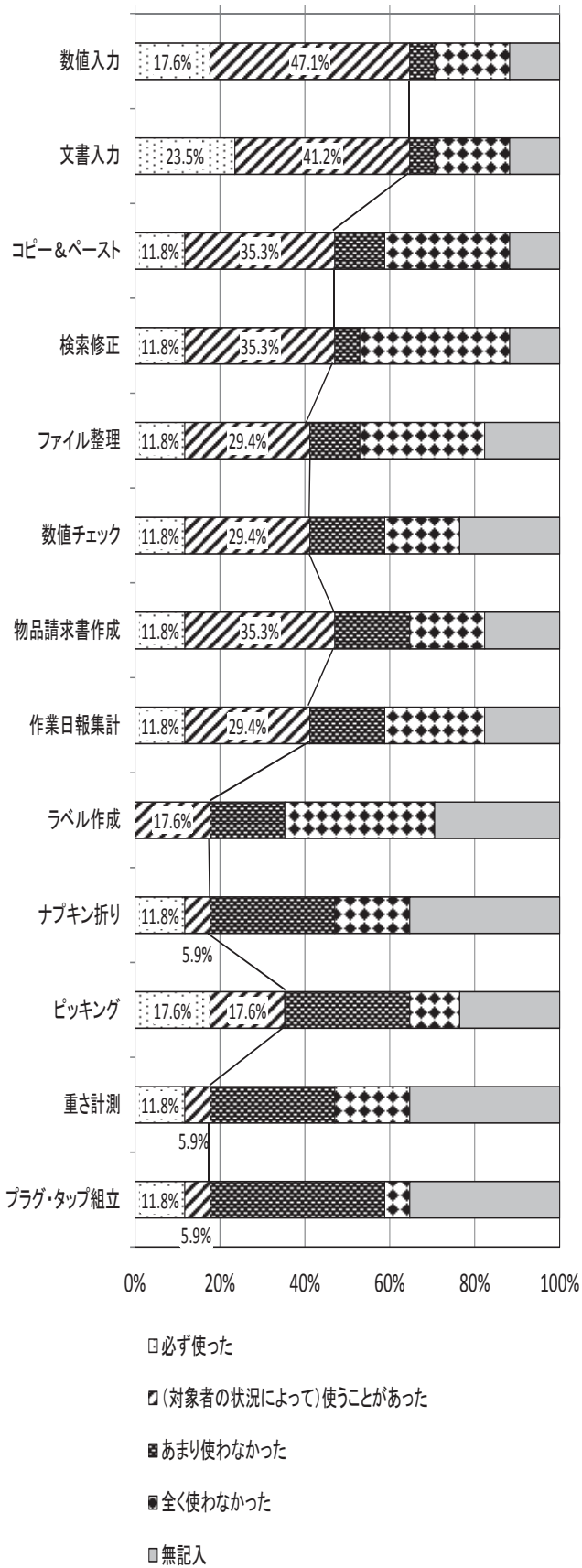


図 2-3-10 身体障害者における活用状況 (MWS 簡易版、n=17)

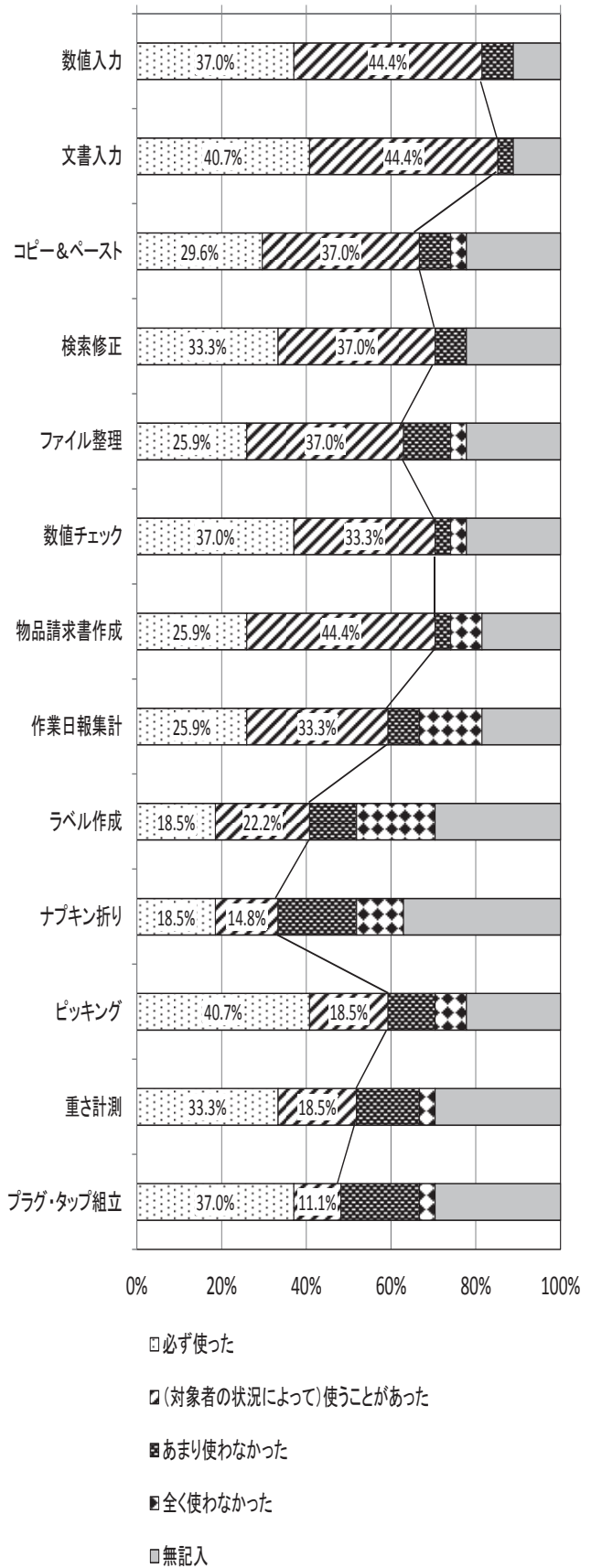


図 2-3-11 精神障害者における活用状況 (MWS 簡易版、n=27)

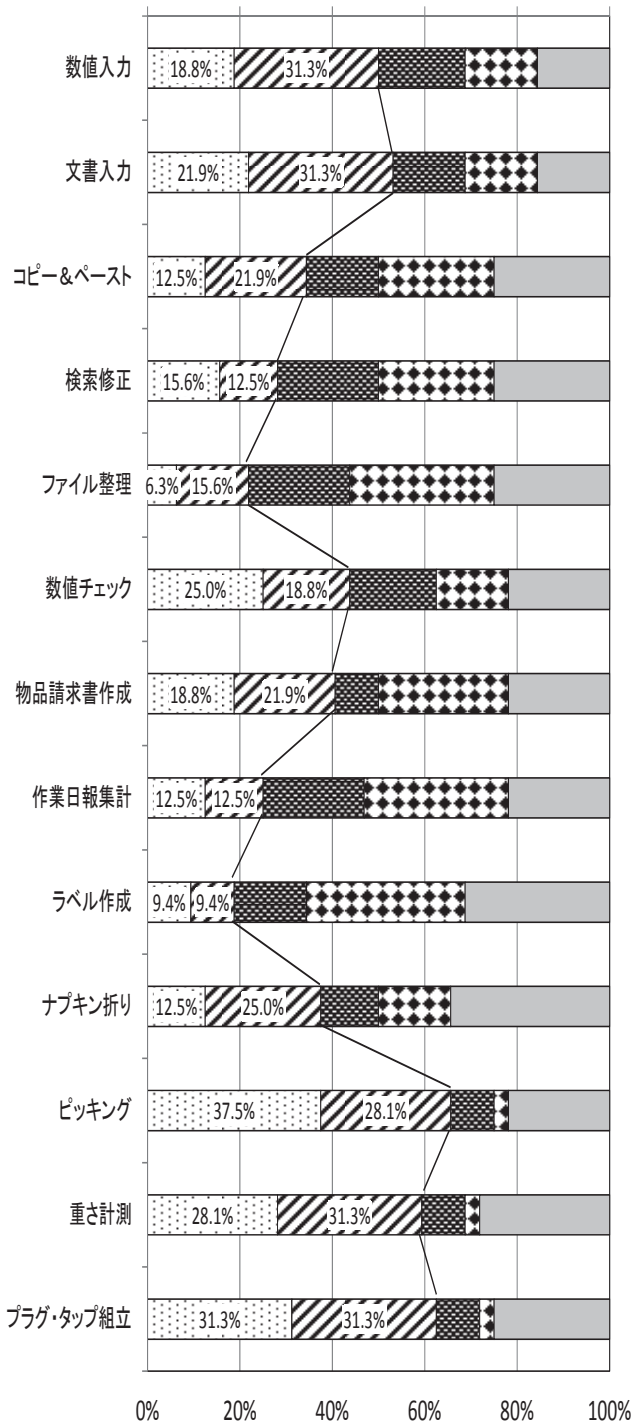


図 2-3-12 知的障害者における活用状況 (MWS 簡易版、n=32)

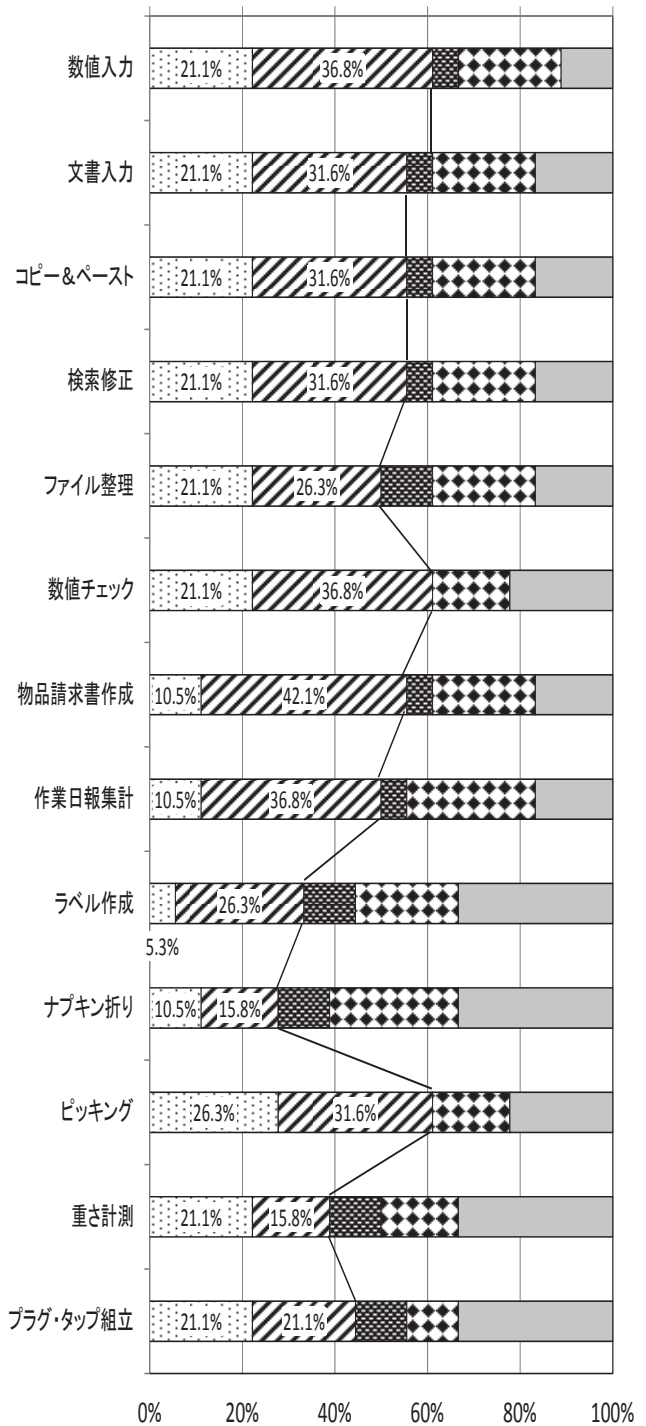
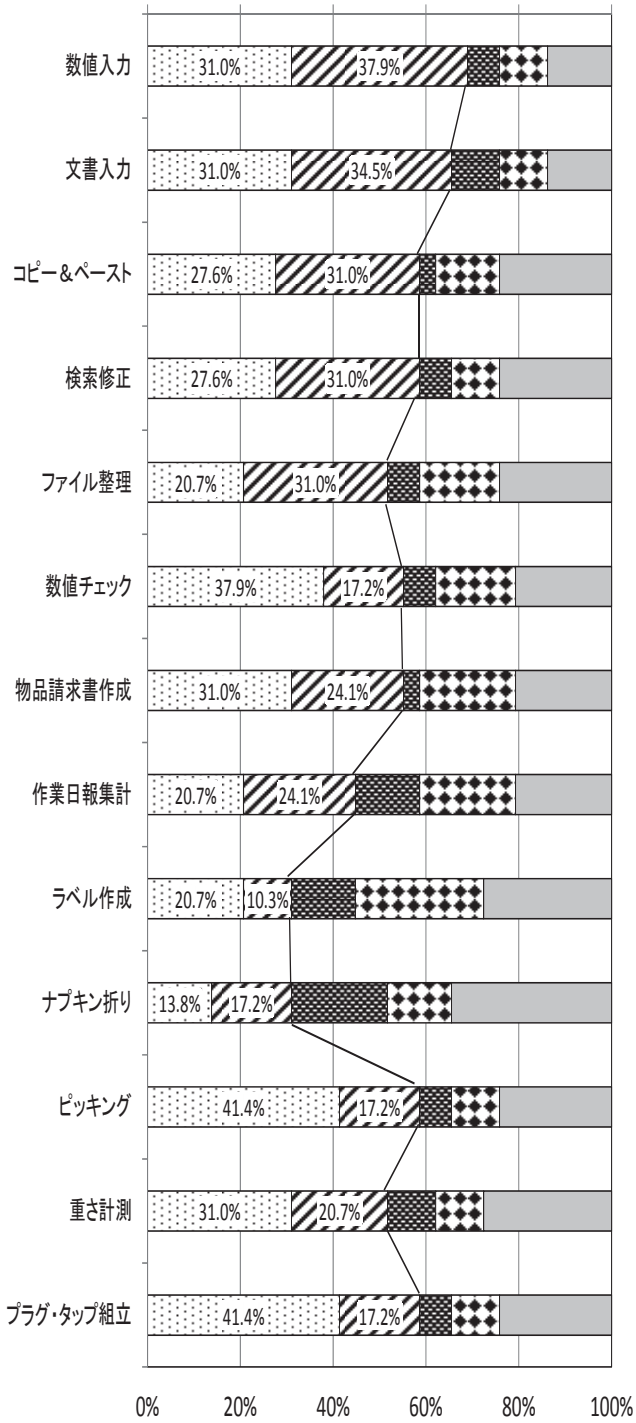
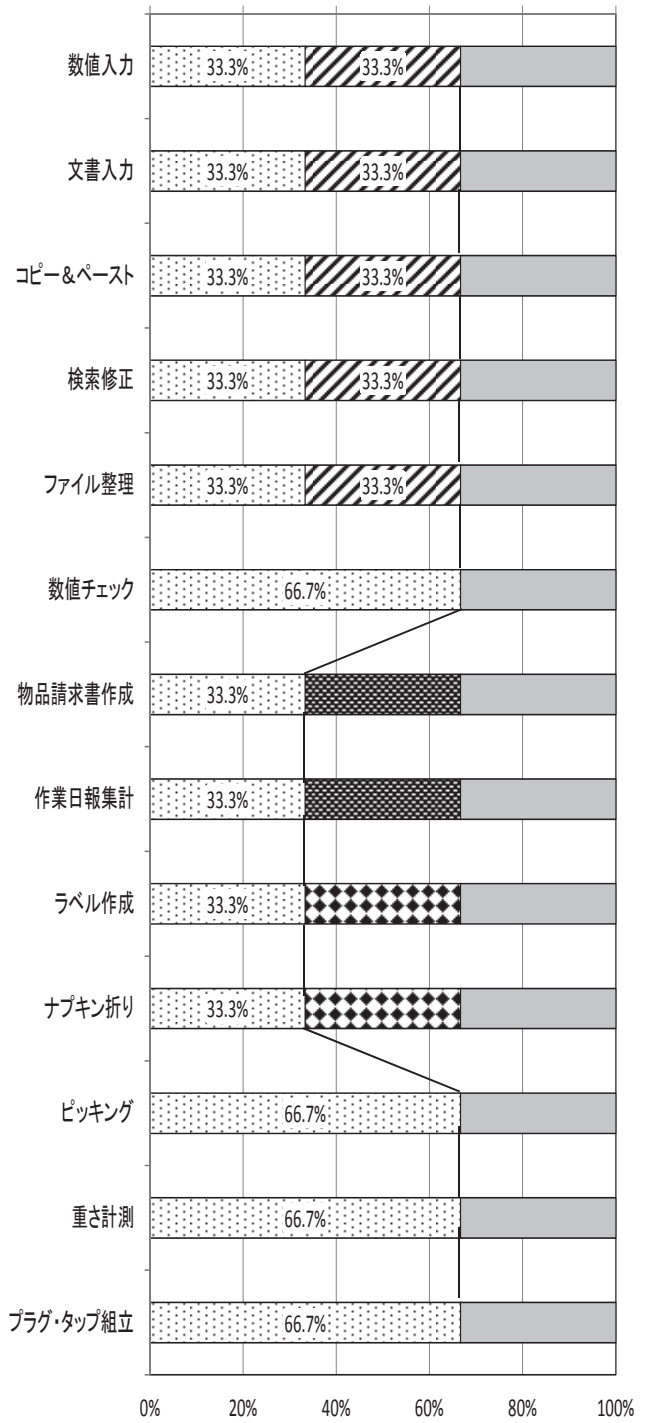


図 2-3-13 高次脳機能障害者における活用状況 (MWS 簡易版、n=19)



- 必ず使った
- (対象者の状況によって)使うことがあった
- あまり使わなかった
- 全く使わなかった
- 無記入

図 2-3-14 発達障害者における活用状況 (MWS 簡易版、n=29)



- 必ず使った
- (対象者の状況によって)使うことがあった
- あまり使わなかった
- 全く使わなかった
- 無記入

図 2-3-15 その他の障害者における活用状況 (MWS 簡易版、n=3)

(4) MWS 訓練版の活用状況

本項「(1) 所有するワークサンプル」に示したように、MWS 訓練版を所有していない所属機関もあるため、ここでは、MWS 訓練版 13 種類のいずれか 1 つ以上を所有していた回答者を集計対象とした。また、活用状況の集計にあたっては、前項「1 プロフィール (2) 回答者自身のプロフィール エ 担当障害種類」において選択した担当障害種類ごとに集計した。そのため、本項については、障害別においても、また同じ障害であっても MWS 訓練版 13 種類の所有状況により、回答者数が異なっており、回答者数は各ワークサンプル右横に示した。結果を図 2-3-16~2-3-21 に示す。

図中は MWS 簡易版同様「(必ず、または対象者の状況によって)使った」と「あまりまたは全く使わなかった、無記入」に区分し、境界線を引いている。

ア 身体障害者における活用状況

最も多く活用していたのは「文書入力」(「(必ず、または対象者の状況によって)使った」合計 50.0% (以下、()内の%は全て同じ))で、次いで「数値入力」(合計 45.5%)、「物品請求書作成」(合計 44.5%)と続いた。

イ 精神障害者における活用状況

最も多く活用していたのは「物品請求書作成」(合計 59.2%)で、次いで「数値チェック」(合計 57.2%)、「ピッキング」(合計 54.2%)、「文書入力」「作業日報集計」(両項目とも合計 50.0%)と続いた。

ウ 知的障害者における活用状況

最も多く活用していたのは「プラグ・タップ組立」(合計 55.1%)で、次いで「ピッキング」(合計 53.6%)と続いた。

エ 高次脳機能障害者における活用状況

最も多く活用していたのは「数値チェック」(合計 57.1%)で、次いで「ピッキング」(合計 55.6%)、「物品請求書作成」(合計 50.0%)と続いた。

オ 発達障害者における活用状況

最も多く活用していたのは「ピッキング」(合計 60.0%)で、次いで「プラグ・タップ組立」(合計 55.5%)、「物品請求書作成」(合計 53.4%)、「数値入力」「文書入力」「数値チェック」(3項目全て合計 50.0%)と続いた。

カ その他の障害者における活用状況

その他の障害者に活用した回答者は 3 名、うち 2 名は無記入のため、活用状況は参考程度に留まる。

半数以上の回答者に活用されていたワークサンプルの数は、発達障害者が 6 つ、精神障害者が 5 つ、高次脳機能障害者が 3 つ、知的障害者が 2 つ、身体障害者が 1 つであった。全ての障害者に共通して活用されているワークサンプルはなかったが、広域・地域センターと異なり、知的障害者や発達障害者に「プラグ・タップ組立」の活用が多い特徴があった。

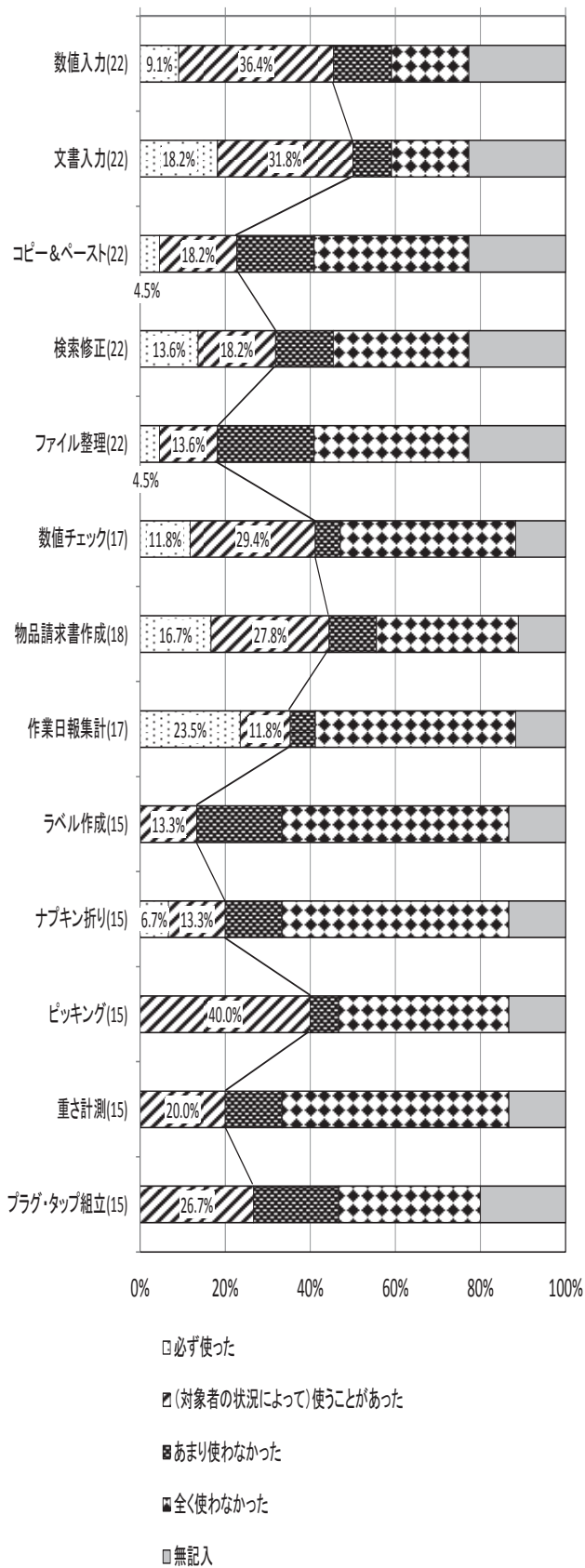


図 2-3-16 身体障害者における活用状況
(MWS 訓練版)

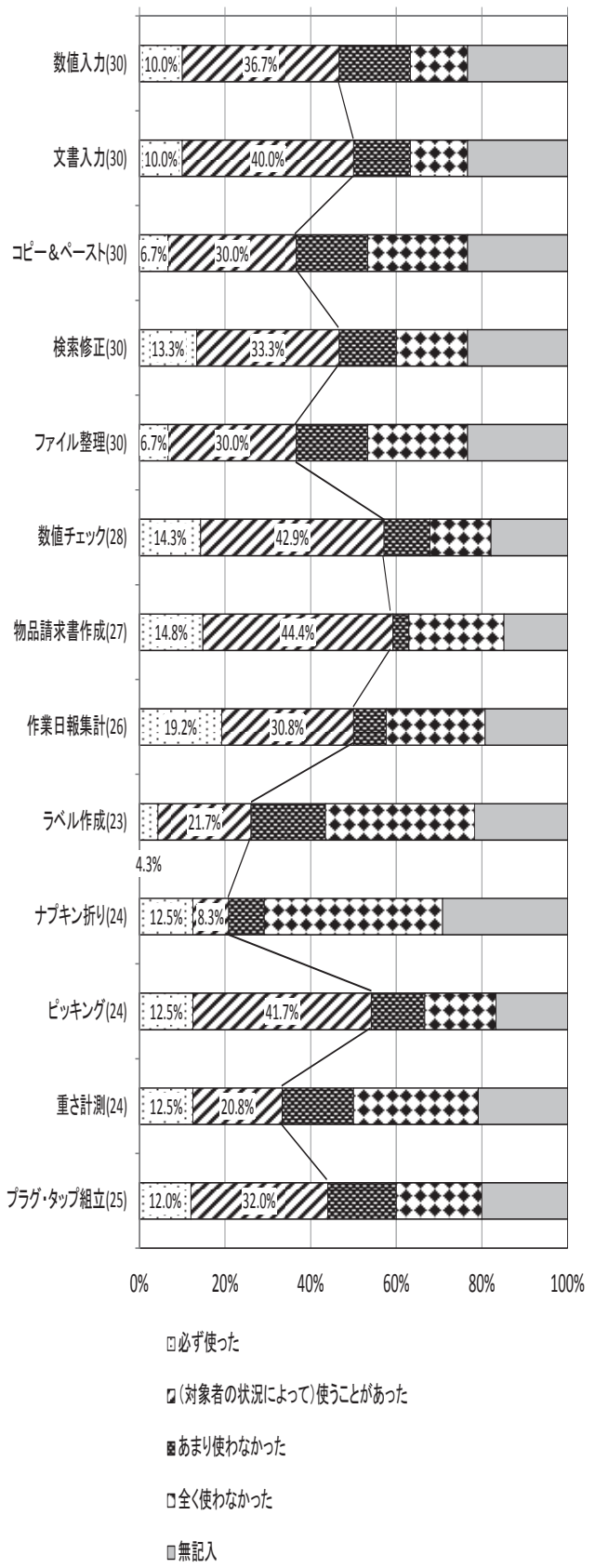


図 2-3-17 精神障害者における活用状況
(MWS 訓練版)

※各ワークサンプル右横の () 内数値：各ワークサンプル活用状況の回答者数

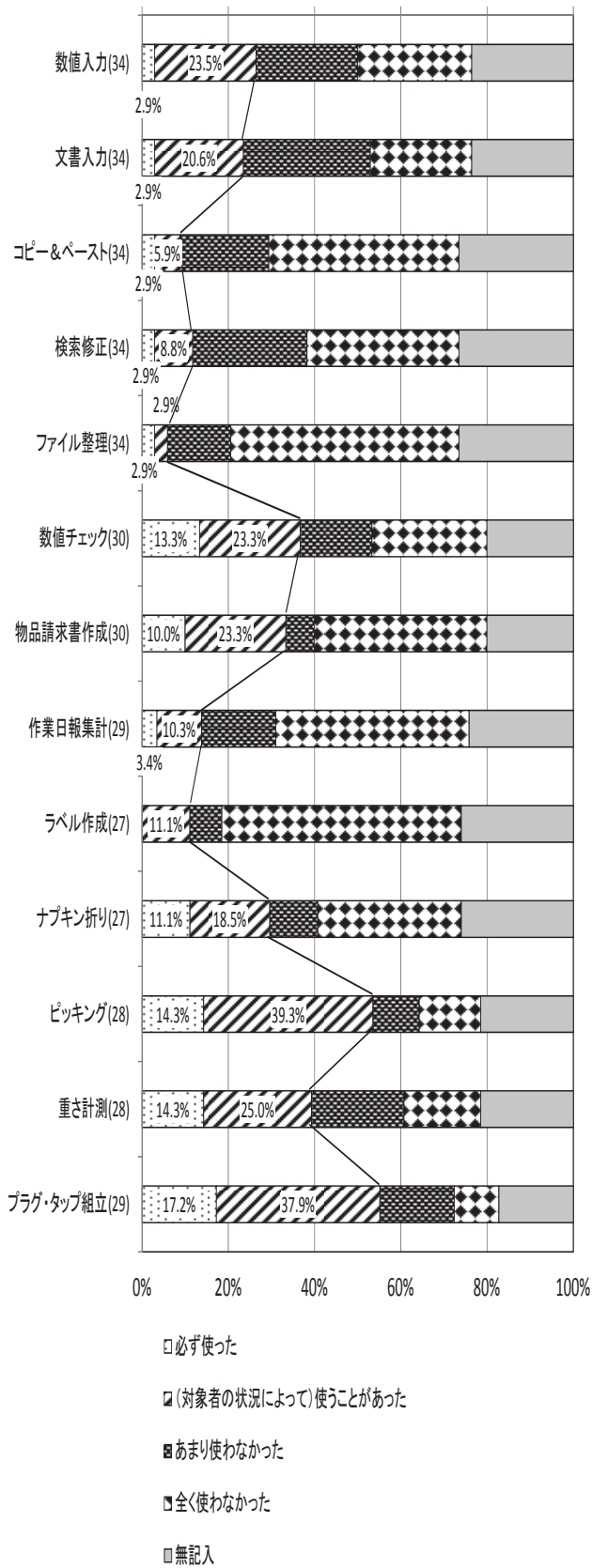


図 2-3-18 知的障害者における活用状況 (MWS 訓練版)

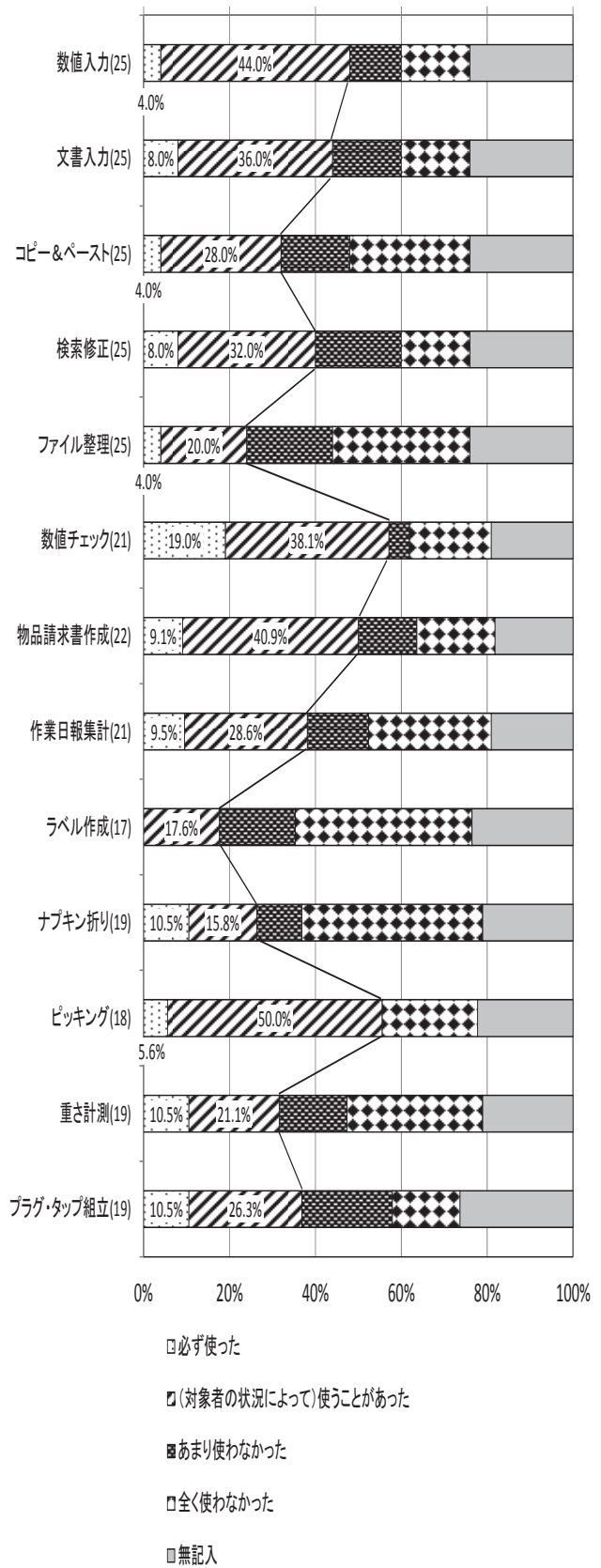


図 2-3-19 高次脳機能障害者における活用状況 (MWS 訓練版)

※各ワークサンプル右横の () 内数値：各ワークサンプル活用状況の回答者数

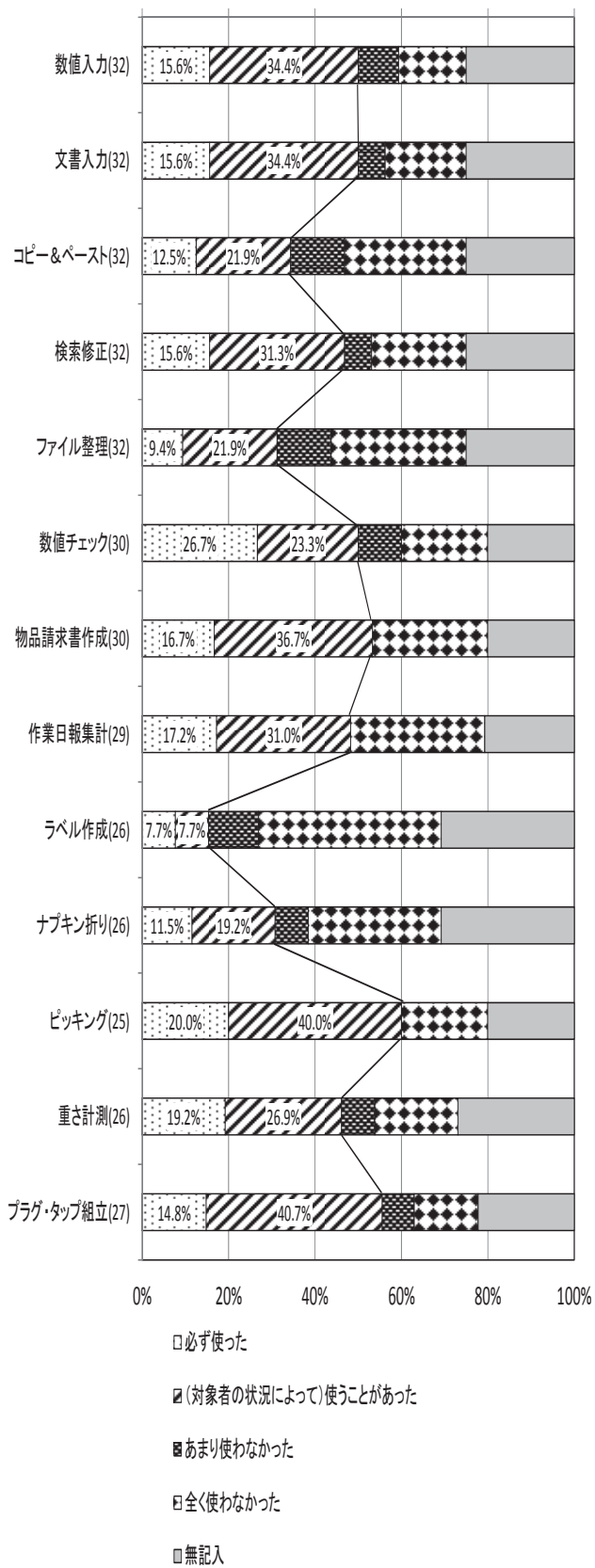


図 2-3-20 発達障害者における活用状況 (MWS 訓練版)

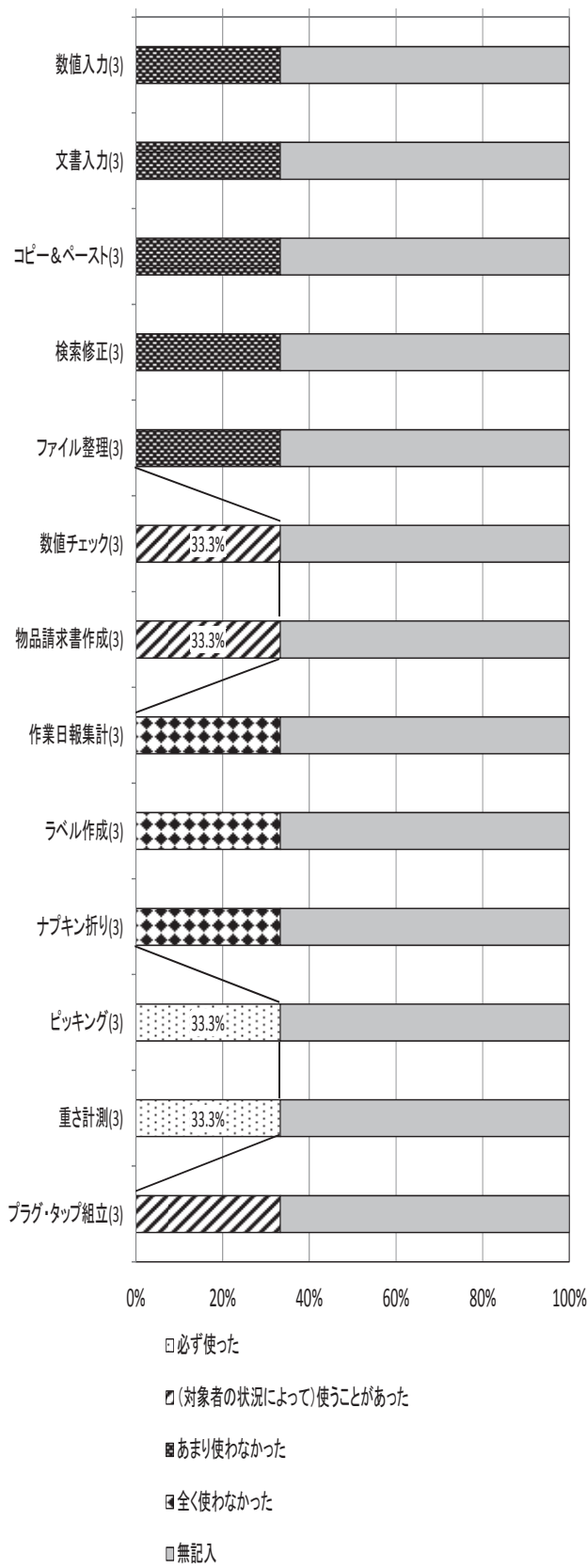


図 2-3-21 その他の障害者における活用状況 (MWS 訓練版)

※各ワークサンプル右横の () 内数値：各ワークサンプル活用状況の回答者数

(5) MWS 簡易版及び MWS 訓練版結果整理票の活用状況

ア MWS 簡易版結果整理票の活用状況

MWS 簡易版結果整理票の活用状況を図 2-3-22 に示す。

MWS 簡易版を所有している関係機関の回答者 40 名のうち、「よく活用している」と「時々、活用している」を合わせると 52.5%で、半数以上が活用していた。また、「存在を知らない」回答者は 5.0%であった。

イ MWS 訓練版結果整理票の活用状況

MWS 訓練版結果整理票の活用状況を図 2-3-23 に示す。

MWS 訓練版を所有している関係機関の回答者 54 名のうち、「よく活用している」と「時々、活用している」を合わせると 35.2%と半数を割り、MWS 簡易版結果整理票ほど活用されてはいないようである。また、「存在を知らない」回答者が 16.7%いた。

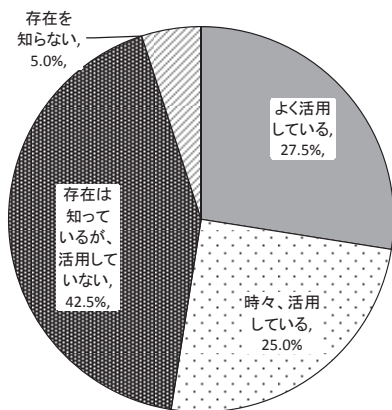


図 2-3-22 MWS 簡易版結果整理票の活用状況
(全体、n=40)

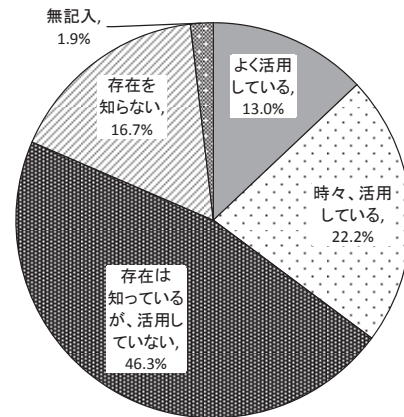


図 2-3-23 MWS 訓練版結果整理票の活用状況
(全体、n=54)

3 活用の目的と効果

(1) 活用の目的と効果

活用の目的と効果を図 2-3-24 に示す。「(14) その他」は回答数が少ないため、図に含めていない。

活用の目的として回答が多かったのは、「(8) 作業能力や適性の評価」で、「この目的で活用することが多かった」と「この目的で活用することが多少あった」を合わせて 93.1%であった。次いで、「(4) 自己認知の促進」「(1) 作業遂行力向上」(両項目とも、同じく 77.6%)、「(5) 障害の自己受容」(同じく 62.1%)、「(3) 作業上の適正行動の習慣化」(同じく 60.4%)であった。

なお、「この目的で活用することが多かった」だけを見ると、「(8) 作業能力や適性の評価」(67.2%)、「(1) 作業遂行力向上」(46.6%)、「(4) 自己認知の促進」(29.3%)が続き、“評価”を中心とし、その結果に基づいた“自己理解へのアプローチ”に加え、“訓練”のためにも活用されていると考えられる。

「この目的で活用することが多かった」及び「この目的で活用することが多少あった」を選択した回答者が感じた活用の効果について見ると、広域・地域センターの結果とは異なっていた。その内容を見ると「あまり効果はなかった」とした回答が 13 項目中 8 項目あり(広域・地域センター：職業相談・職業評価では 3 項目、各種事業では 5 項目)、「(3) 作業上の適正行動の習慣化」(10.3%)、「(5) 障害の自己受容」(7.5%)、「(4) 自己認知の促進」(6.1%)の割合が高かった。また、「(5) 障害の自己受容」に関

しては「全く効果はなかった」とした回答も 2.5%あった。

「(3) 作業上の適正行動の習慣化」「(5) 障害の自己受容」「(4) 自己認知の促進」について、本調査から「あまり効果がなかった」とされた原因を特定することはできないが、MWSを単なる作業課題として取り組んで終了するだけでは、利用者の自己認知にはつながりにくい。取り組んだ後、その結果を基に相談を行い、その中で利用者の障害が作業上どのように現れるかをフィードバックし、利用者自身の認識を確認しながら、必要な場合は補完手段を導入し習得するための訓練をしていくといったプロセスが必要となる。こうした手続きがなく活用されているのであれば、自己認知は進まず、障害の受容には至らず、その結果として作業上に現れる障害を適正化できないままということも考えられるだろう。これは、「第2節 広域・地域センターにおける MWS 活用の現状」の「3 活用の目的と効果」でも「あまり効果がなかった」とされた「(4) 自己認知の促進」にも同様のことが指摘されるだろう。

「(14) その他」の目的について、述べ7名の回答があったが、目的に該当した内容には、“作業体験”3名、“有効な指示の確認”2名、“意欲の向上”1名があった。残り1名については、『現状では、必要な利用者に対して活用しており、活用頻度は高くない。正誤が明確に示されること、結果をその場で共有できることは大きなメリットであるが、現状では手間がかかるため、必要最小限の活用に留まっている。実施の手間や実施結果の表示がシンプルになれば、もっと多くの利用者に活用したい。』と、次節改訂への要望に近い意見が挙げられていた。

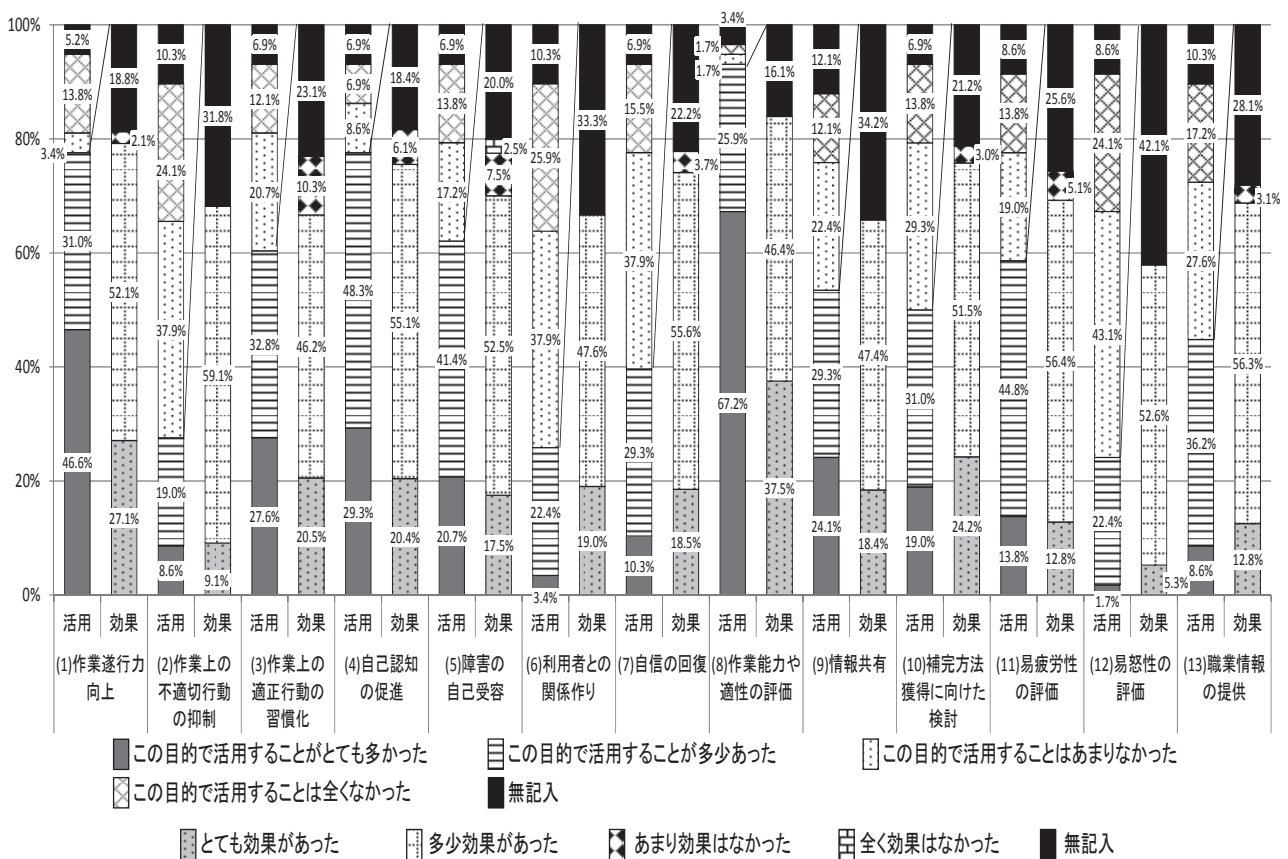


図 2-3-24 MWS 活用の目的と効果（全体、n=58）

なお、「(9) 情報提供」で「この目的で活用することが多かった」と「この目的で活用することが多少あった」の回答者が、情報共有を行った相手について、図 2-3-25 に示す。

関係機関では、「①利用者」(90.3%)が最も多く、次いで「②事業所」(64.5%)、「③関係機関」(48.4%)

が続いた。広域・地域センターと比べて「②事業所」との情報共有が高いことが特徴である。

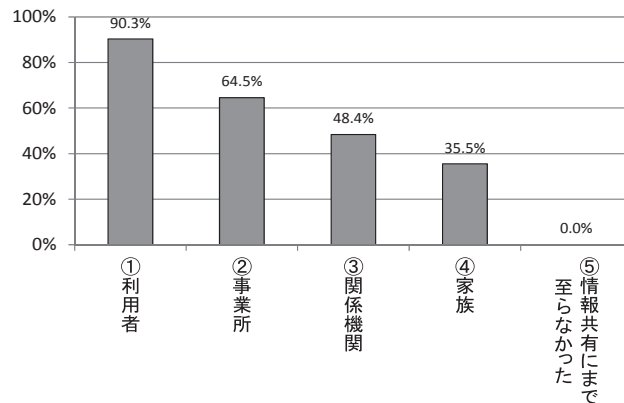


図 2-3-25 「(9) 情報共有」の相手 (複数回答、n=31)

(2) 結果の活かし方

結果の活かし方を図 2-3-26 に示す。

「④③に加えて、支援者主導で改善や向上の提案まで利用者に伝えている」と「⑤③に加えて、利用者自身にもどうすれば改善や向上できるか考えてもらうようにしている」を合わせた 60.3%が作業結果を踏まえた作業遂行力向上や補完手段につながる改善等まで行っていた。一方、広域・地域センターでは選択されていなかった「①評価票等には記録するが、利用者に結果は伝えていない」(3.4%)や、「②作業時間や正答率等、事実だけを利用者に伝えている」(10.3%)の割合も高かった(広域・地域センター：職業相談・職業評価では2.2%、各種事業では5.1%)。

「①評価票等には記録するが、利用者に結果は伝えていない」に関しては、『教育機関として、作業体験のみを目的としてMWSを活用しているため、結果の活用はしていない』と回答した関係機関もあり、各機関独自の活用方法により結果の活かし方は異なるといえるだろう。

また、「⑥その他」には、『就労場面での支援や配慮についての提案、または確認』、『自己理解の促進に活用』、『対象者によって③④⑤を使い分けていた』といった意見が挙げられた。

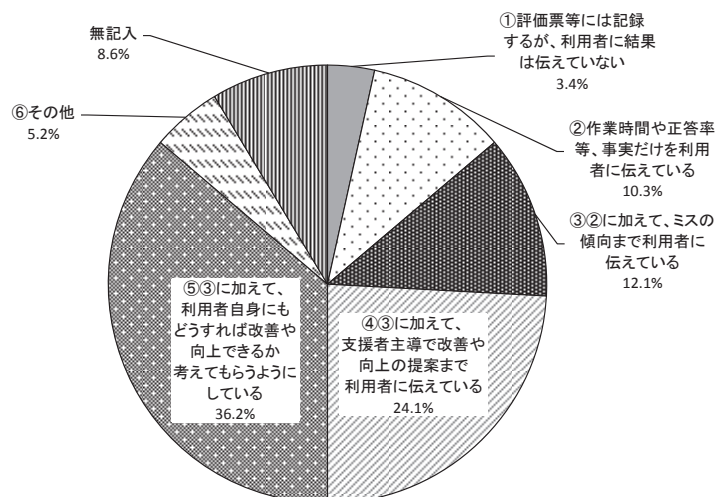


図 2-3-26 結果の活かし方 (全体、n=58)

(3) 活用に係る意識

MWS 活用に係る意識を図 2-3-27 に示す。

5つの設問のうち、「(1) 単独で簡易版・訓練版とも利用者に実施する」と「(5) 利用者に合わせて、使用する MWS の作業課題^{*4}を考え、選択する」以外は、「とても自信がある」と「やや自信がある」を合わせて 50%を下回っていた。広域・地域センターでは、前述の通り、特に各種事業において MWS 簡易版・訓練版を活用する場合、カウンセラー自身が実施者となって活用するよりも、アシスタント等が実施者となっている (p.23～34 参照)。こうした広域・地域センターの状況と異なり、関係機関では回答者自身が直接利用者に対して MWS を実施する機会があるため、「(1) 単独で簡易版・訓練版とも利用者に実施する」と「(5) 利用者に合わせて、使用する MWS の作業課題を考え、選択する」に関しては、経験を積むにつれ、自信が持てるようになって考えられる。

なお、「(4) 実施方法等を施設内外の支援者等に研修する」は、「あまり自信がない」と「全く自信がない」を合わせて 93.1%と非常に高く、広域・地域センターにおいてもこの設問については同様の傾向を示しており、自ら使えても、それを他者に教えるまでには至っていない状況といえる。

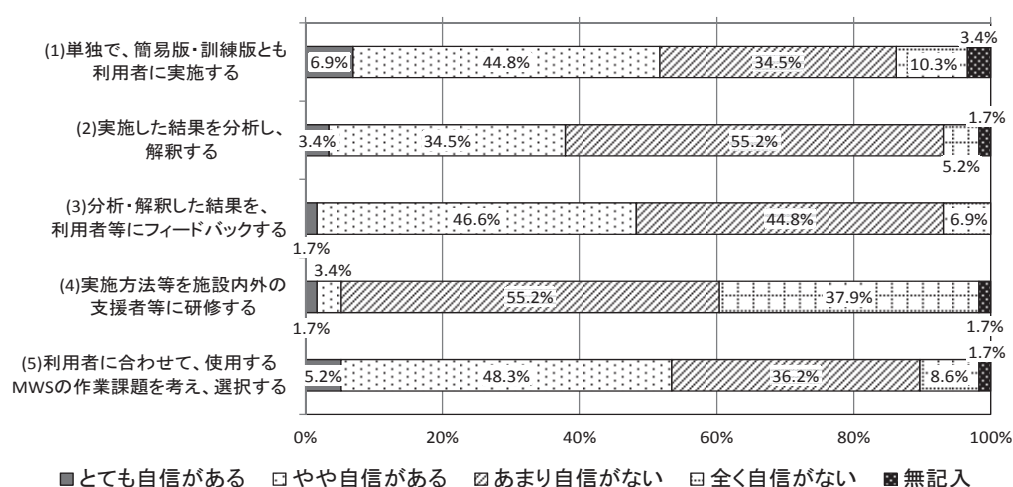


図 2-3-27 活用に係る意識 (全体、n=58)

第 4 節 MWS 改訂の希望

今後 MWS を改訂するにあたり、どのような改訂を望むか尋ねた。広域・地域センター及び関係機関共に同じ内容の設問を設定したため、本節では、両者をまとめて報告する。

(1) 希望する改訂の内容

現在の MWS において、必要と思われる改訂の内容を図 2-4-1 に示す。

広域・地域センターを見ると、「⑥グループでできるような作業課題を作してほしい」(73.3%)、「⑦社会的なスキルも必要になるような作業課題を作してほしい」(56.7%)、「⑫どの作業課題がどのような能力を反映しているのか、明らかにしてほしい」(55.0%)、「⑩利用者自身の感想や実施後の疲労感等を反映できる様式がほしい」(45.0%)、「⑤今よりも作業課題を増やしてほしい」「⑨結果の整理を簡単にしてほしい」(共に 43.3%) の順に高かった。

一方、関係機関を見ると、「⑥グループでできるような作業課題を作してほしい」(50.0%)、「⑦社会的なスキルも必要になるような作業課題を作してほしい」(46.6%)、「⑫どの作業課題がどのような能力を反映しているのか、明らかにしてほしい」(44.8%)、「⑨結果の整理を簡単にしてほしい」(39.7%)、「⑩利用

*4 アンケート調査の設問で使用している「作業課題」という単語は、MWS の 13 種類の「ワークサンプル」と同義である。

者自身の感想や実施後の疲労感等を反映できる様式がほしい」(31.0%)の順に高かった。

総じて、順位の変動はあるものの、両者とも“グループでできる作業課題”、“社会的スキルを使う作業課題”、“能力の反映の明確化”、“様式の充実や結果の整理方法の簡素化”について改訂の希望があることが分かった。

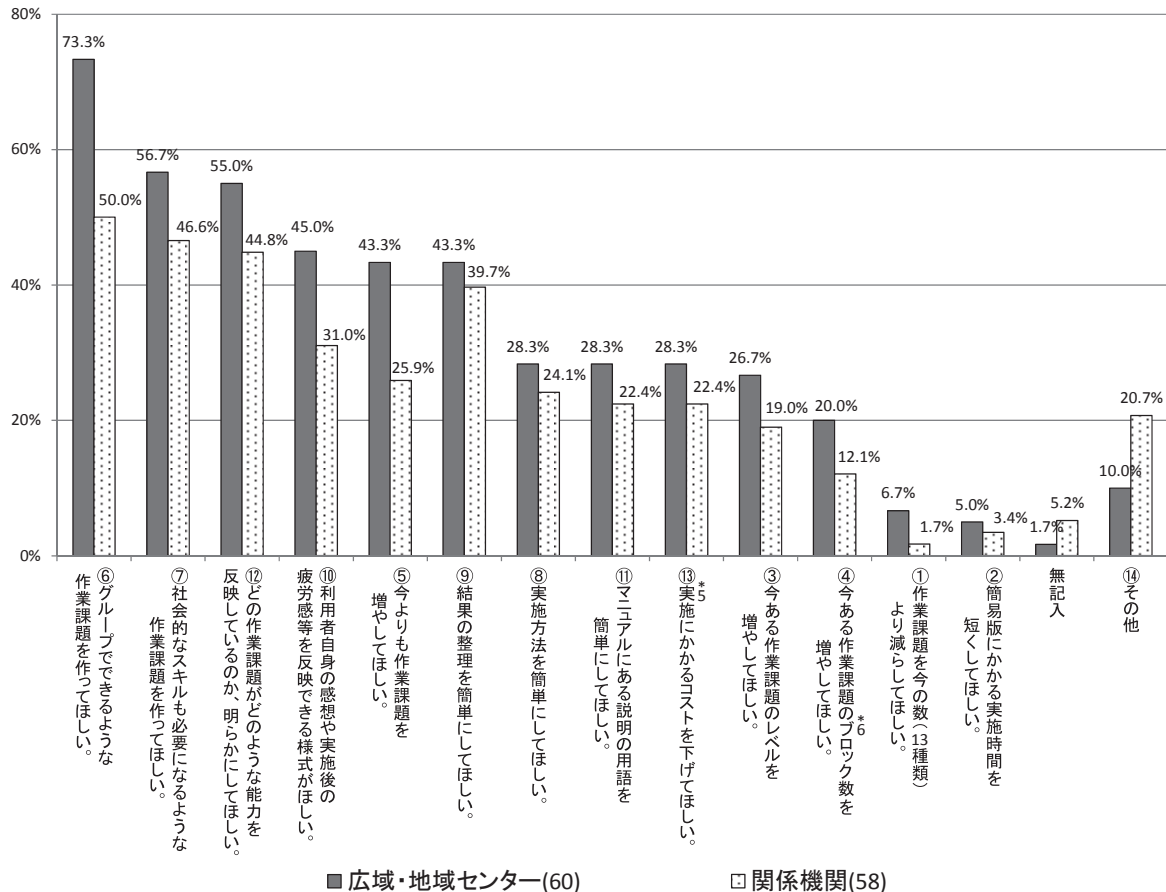


図 2-4-1 改訂を希望する内容 (複数回答)

また、「⑭その他」については、広域・地域センター6名、関係機関12名から意見が挙げられた。それぞれの内容を、「簡易版に関する内容」、「具体的な改訂に言及する内容」、「結果の整理に関する内容」、「その他」、「要望以外」の5カテゴリーに分類した。その結果を表 2-4-1 に示す。

「簡易版に関する内容」では、ボリュームや難易度を上げる要望が挙げられた。

「具体的な改訂に言及する内容」では、既存のワークサンプルに関する具体的な改訂の要望が挙げられた他、OA作業のレベルアップや新たな実務作業導入が挙げられた。

「結果の整理に関する内容」では、結果整理票のあり方の他、現在の標準値に対する要望、フィードバック方法に関する要望が挙げられた。

「その他」は、上記3カテゴリーに当てはまらない要望をまとめた。MWS 開発時のコンセプトである ABA デザインについての解説、補完方法の実例、障害とワークサンプルの関係を明らかにすること、教示内容の修正、研修の要望等であった。

^{*5} 実施にかかるコスト：例えば解答用紙のコピー代、実施にかかる手間、MWS の実施方法を習得するまでの時間等。

^{*6} ブロック数：MWS 訓練版の各ワークサンプルに設定されている課題の単位。最小単位を試行といい、概ね6試行で1ブロックとしている(ワークサンプルによって1ブロックを構成する試行数に違いがある)。

表 2-4-1 その他の改訂を希望する内容

	広域・地域センター	関係機関		広域・地域センター	関係機関
簡易版に関する内容	簡易版は作業によってあつなく終わり過ぎてしまうもの(ピッキング、数値チェック等)があり、職業評価で使いづらいと感じることがある。もう少し評価で使えるだけのボリュームがほしい	評価をもっと充実してほしい	その他	GATBの結果との相関関係など示してもらえるとありがたい	障害種類に従って、どの作業が最も使えるか、そしてその使い方について、具体的な資料がほしい ※知的で軽度でない方には、使い道が、限定されてしまうのが現状
		簡易版のレベルを上げてほしい、とどこどころ訓練版を活用しています(ピッキングなど)		ABA法による指導・支援をなぜすべきであるか、わかりやすく解説することが必要	補充方法の提案等、実例として情報提供してほしい
具体的な改訂に言及する内容	パソコンの課題を、基礎的スキルに加えて少し複雑な課題も導入してほしい	知的障害と発達障害で、OA・事務作業が難しいと思われる利用者が多いため、実務作業のメニューを増やしてほしい			教示内容、作業内容、採点箇所のマッチング(教示内容は作業内容をきちんと説明するものであってほしい)
	1事例実験モード、というべきABA法を自動的にやれるモードがあるとよい	文書入力に漢字にルビをふってほしい			実際の就労に必ずしも必要でない課題も含まれているように思う。本当に就労に必要な物を厳選してほしい
	重さ計測課題は、音声教材を作してほしい	ナプキン折り ビジュアルマニュアルについて、完成写真や途中の過程を飛ばさないようなものを作してほしい			定期的に研修会を開き、どのように利用、活用すべきか教えてほしい
	作業日報も、音声教材を作してほしい。レベルごとに指示するものと、レベルをランダムにシャッフルしたものがあるとよい			要望以外	MWSのように研究開発された内容ではないですが既存の内容をアレンジして注文書を作成し実施してもらっている場合があります
結果の整理に関する内容	パーセントなどの客観的な指標について、訓練版も簡易版と同様に、入力して出るようにしてほしい(現在は訓練版のパーセントは、表をもとに範囲で作成)	結果の整理票を充実させてほしい(簡易版)			
	訓練版の結果の整理シートの自由度が低く、自分で自分の作業の進め方をコントロールしているリワークの利用者には使用できないので改善してほしい				
	例えば、簡易版の数値チェックなどで1間でも間違えるとパーセントが15になってしまうなど、難易度や問題数の設定がバラツキが大きいので改善してほしい				
	結果のフィードバックの仕方や例について、実施者も利用者も理解しやすいように整理し、実施者の技能や経験に左右されないような仕組みを検討してほしい				

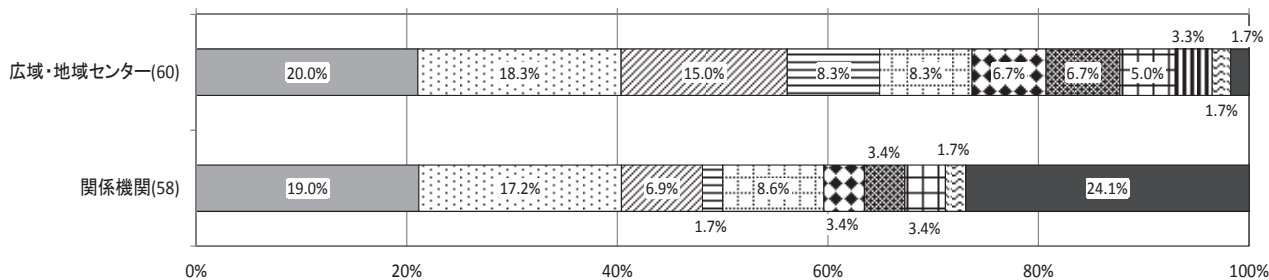
(2) 特に希望する改訂の内容

この設問では、「(1) 希望する改訂の内容」で選択した改訂の内容のうち、最も強く改訂を希望する内容を1つ選択してもらった。その結果を図 2-4-2 に示す。

広域・地域センターでは、「⑦社会的なスキルも必要になるような作業課題を作してほしい」(20.0%)、「⑥グループでできるような作業課題を作してほしい」(18.3%)、「⑤今よりも作業課題を増やしてほしい」(15.0%)の順に高かった。

関係機関では、無記入者も多かったが、「⑦社会的なスキルも必要になるような作業課題を作してほしい」(19.0%)、「⑥グループでできるような作業課題を作してほしい」(17.2%)、「⑫どの作業課題がどのような能力を反映しているのか、明らかにしてほしい」(8.6%)の順に高かった。

特に1つだけを選ぶとすると、「(1) 希望する改訂の内容」とは異なり、広域・地域センター、関係機関共に、「⑦社会的なスキルも必要になるような作業課題を作してほしい」が「⑥グループでできるような作業課題を作してほしい」よりも希望する割合は高くなっていた。



- ⑦ 社会的なスキルも必要になるような作業課題を作ってほしい。
- ⑤ 今よりも作業課題を増やしてほしい。
- ⑩ 利用者自身の感想や実施後の疲労感等を反映できる様式がほしい。
- ⑬ 実施にかかるコストを下げてください。
- ③ 今ある作業課題のレベルを増やしてほしい。
- ⑪ マニュアルにある説明の用語を簡単にしてほしい。
- ⑧ 実施方法を簡単にしてほしい。
- ④ 今ある作業課題のブロック数を増やしてほしい。
- ⑥ グループでできるような作業課題を作ってほしい。
- ⑩ 利用者自身の感想や実施後の疲労感等を反映できる様式がほしい。
- ⑬ 実施にかかるコストを下げてください。
- ③ 今ある作業課題のレベルを増やしてほしい。
- ⑪ マニュアルにある説明の用語を簡単にしてほしい。
- ⑫ 無記入

図 2-4-2 最も改訂を希望する内容

(3) 具体的改訂を望むワークサンプル

この設問では、「(1) 希望する改訂の内容」で「①作業課題を今の数(13種類)より減らしてほしい」、「②簡易版にかかる実施時間を短くしてほしい」、「③今ある作業課題のレベルを増やしてほしい」、「④今ある作業課題のブロック数を増やしてほしい」を選択した回答者に、具体的に希望するワークサンプルを選択してもらった。

ア 減らしてほしいワークサンプル

「(1) 希望する改訂の内容」で「①作業課題を今の数(13種類)より減らしてほしい」を選択した回答者は少なかった(広域・地域センター:4名、関係機関:1名)。

(ア) MWS 簡易版 (図 2-4-3)

広域・地域センターにおいて、複数の回答者が「ナプキン折り」「重さ計測」「プラグ・タップ組立」「ラベル作成」の4ワークサンプルを選択していた。

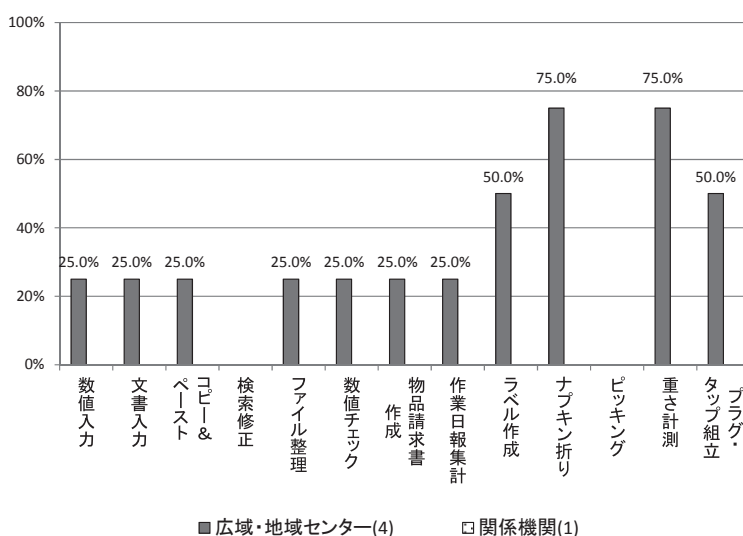


図 2-4-3 減らしてほしいワークサンプル (MWS 簡易版、複数回答)

(イ) MWS 訓練版 (図 2-4-4)

広域・地域センターについては、MWS 簡易版と同様、複数の回答者が「ナプキン折り」「重さ計測」「プラグ・タップ組立」「ラベル作成」の4ワークサンプルを選択していた。

関係機関においては、「数値チェック」と「ナプキン折り」が挙げられた。

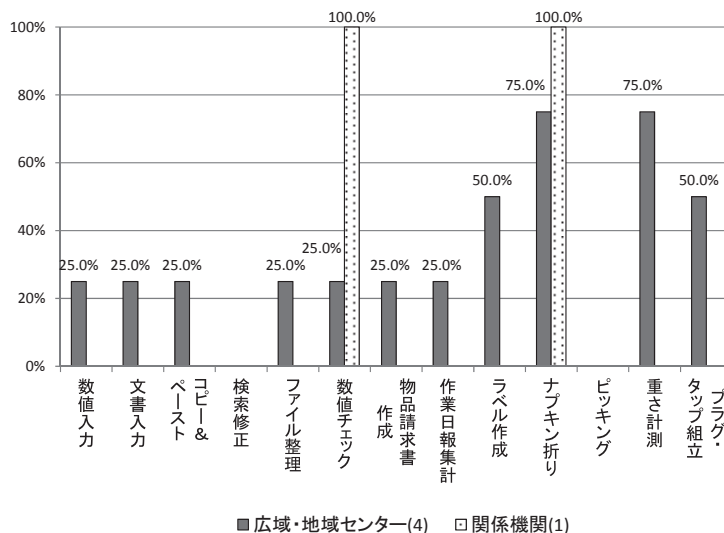


図 2-4-4 減らしてほしいワークサンプル (MWS 訓練版、複数回答)

イ 短くしてほしいワークサンプル (MWS 簡易版、図 2-4-5)

「(1) 希望する改訂の内容」で「②簡易版にかかる実施時間を短くしてほしい」を選択した回答者は少なかった(広域・地域センター: 3名、関係機関: 2名)。その中で、広域・地域センター、関係機関いずれも選択していたのは「文書入力」「数値チェック」「作業日報集計」であった。

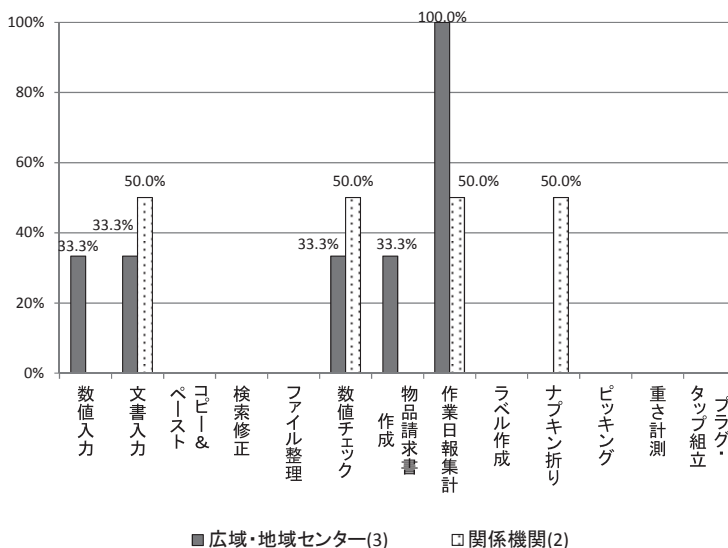


図 2-4-5 短くしてほしいワークサンプル (MWS 簡易版、複数回答)

ウ レベルを増やしてほしいワークサンプル (MWS 訓練版、図 2-4-6)

「(1) 希望する改訂の内容」で「③今ある作業課題のレベルを増やしてほしい」を選択した回答者は広域・地域センターで16名、関係機関で11名いた。

広域・地域センターを見ると、「数値入力」(81.3%)、「数値チェック」(75.0%)、「文書入力」「検索修正」(共に 68.8%)、「物品請求書作成」「ピッキング」(共に 43.8%)の順に高かった。

関係機関を見ると、「数値入力」「文書入力」「検索修正」(全て 54.5%)、「ピッキング」(45.5%)、「数値チェック」「物品請求書作成」(共に 36.4%)の順に高かった。

総じて、OA作業の「数値入力」「文書入力」「検索修正」及び事務作業の「数値チェック」「物品請求書作成」、実務作業の「ピッキング」に対するレベルアップが望まれている。

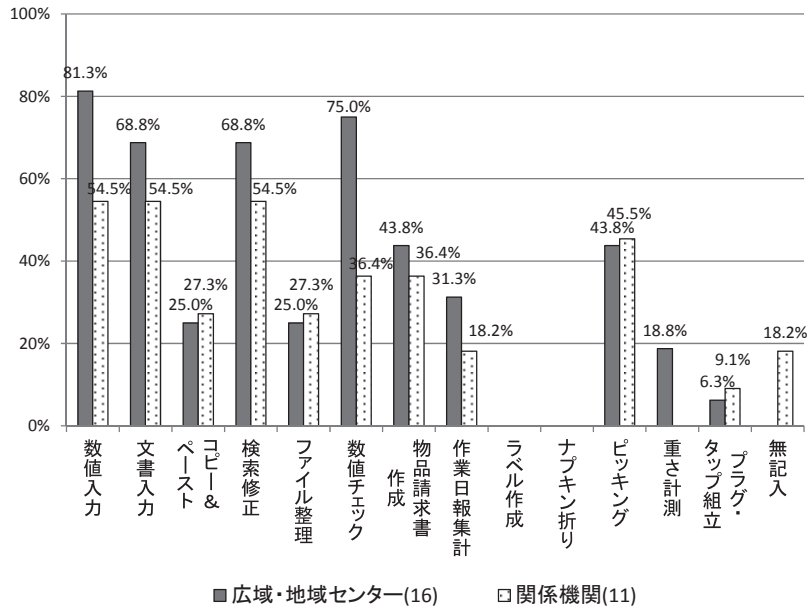


図 2-4-6 レベルを増やしてほしいワークサンプル (MWS 訓練版、複数回答)

エ ブロック数を増やしてほしいワークサンプル (MWS 訓練版、図 2-4-7)

「(1) 希望する改訂の内容」で「④今ある作業課題のブロック数を増やしてほしい」を選択した回答者は広域・地域センターで 12 名、関係機関で 7 名いた。

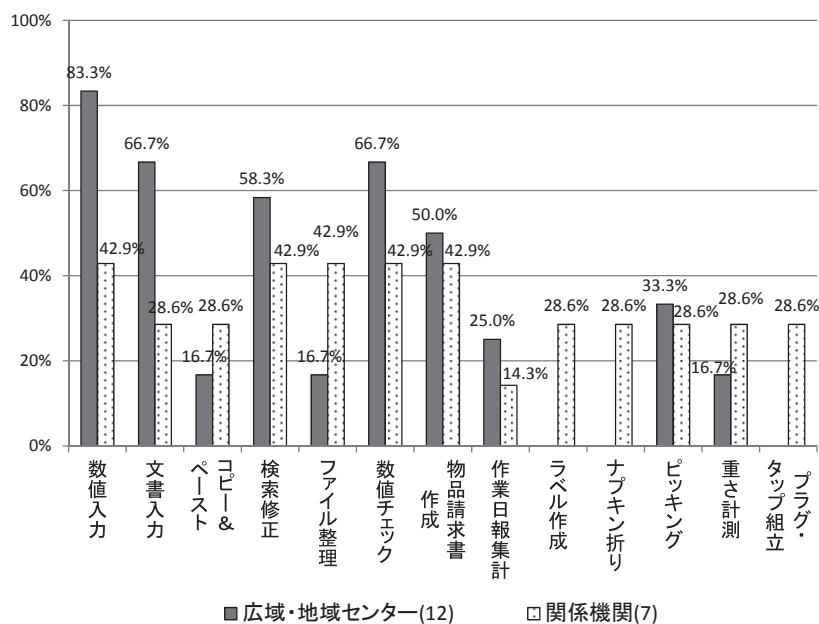


図 2-4-7 ブロック数を増やしてほしいワークサンプル (MWS 訓練版、複数回答)

広域・地域センターを見ると、「数値入力」(83.3%)、「文書入力」「数値チェック」(共に66.7%)、「検索修正」(58.3%)、「物品請求書作成」(50.0%)の順に高かった。

関係機関を見ると、「数値入力」「検索修正」「ファイル整理」「数値チェック」「物品請求書作成」が同率で42.9%であった。

総じて、OA作業の「数値入力」「検索修正」及び事務作業の「数値チェック」「物品請求書作成」に対するブロック数増加が望まれている。

(4) 具体的にイメージする改訂の内容(自由記述)

この設問では、「(1) 希望する改訂の内容」で「⑤今よりも作業課題を増やしてほしい」、「⑥グループでできるような作業課題を作してほしい」、「⑦社会的なスキルも必要になるような作業課題を作してほしい」を選択した回答者に、具体的作業名やイメージする作業等を自由記述で回答してもらった。

広域・地域センター37名、関係機関14名から回答を得られた。

自由記述の集計にあたっては、客観性を確保するために3名で実施した。集計では、個別回答の内容がカテゴリーに該当した場合にカウントし、カテゴリーが重複すると判断される場合は、該当カテゴリー全てにカウントする方法で行った。なお、カテゴリーは「作業課題を増やす」、「グループでできる作業」、「社会的スキルが必要な作業」、「その他」の4カテゴリーとした。その結果を図2-4-8に示す。

広域・地域センターでは「その他」(45.9%)が、関係機関では「⑥グループでできるような作業課題を作してほしい」(64.3%)の割合が最も高かった。

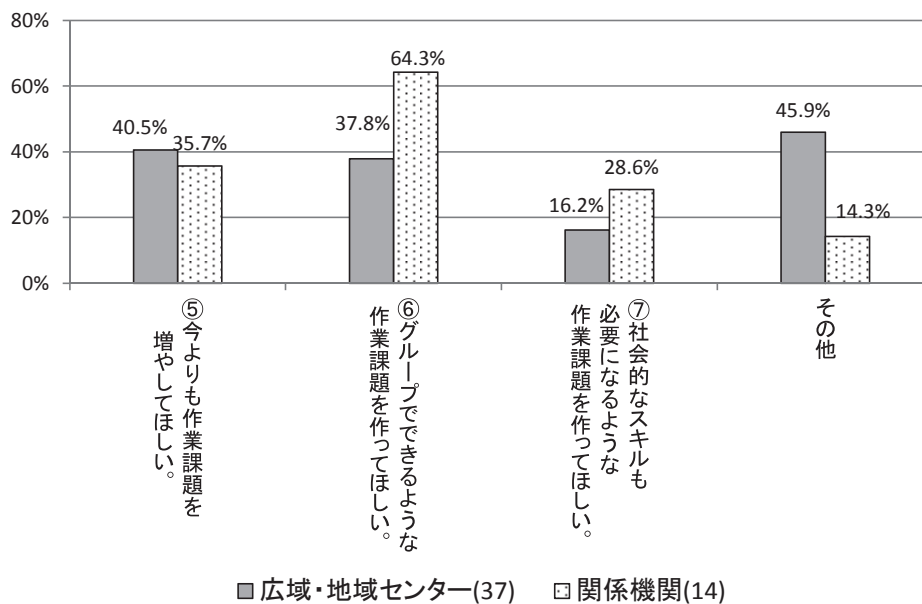


図 2-4-8 具体的にイメージする改訂内容 (複数回答)

各カテゴリーに分類された内容を表2-4-2～2-4-5に示す。なお、表中グレーに網掛けしている内容は関係機関からの希望を示している。

表 2-4-2 「作業課題を増やす」内容

既存ワークサンプルに関する内容		
OA作業	事務作業	実務作業
事務課題、OA課題の種類が増えたら利用してみたい	簡易事務作業の課題があれば増やしてほしい	実務作業課題の充実
エクセルの機能を活用して課題に取り組む作業を追加してほしい	検索修正等についてパソコンを使用せず実施できるパターンも用意してほしい。パソコン作業の苦手な方や機能的に制約がある方にも対応できる	より現実的な作業課題を増やしてほしい
OA課題のうち、能力の高い発達障害者の相談も増えているため、検索修正課題より難易度の高い課題を作してほしい	物品請求書作成やピッキングで使用する書類を日ごと、週ごとでとりまとめるなど作業の連動をもたせてほしい	実務課題に、もっと微細な部品を扱う作業を加えてほしい
作業日報のパソコン版を作してほしい。入力セルがいくつもあって、正しい結果が得られるか？手作業と同じくらい、実は大変かもしれない。入力する人と、検査する人、という仕分けでも良い		重さ計測課題とプラグ・タップ組立課題の中間的な課題があるとよい

新規作業課題に関する内容			
連動する作業	事務系作業	清掃	実務系作業
事務作業で入力した伝票をピッキングに活かす仕組みを作してほしい	ファイリング課題(実際の文書、書類のファイリング)など	清掃や研磨などの仕上げ作業に関する評価で、スピードや精度などが明らかになる課題がほしい。塗り絵ソフトなどを利用してきれいにする評価ができないか。	組み立て作業(プラグ、タップみたいなもの、箱作り、おもちゃ(光りもの)の組み立て)
物流の一連の流れ作業(伝票作成→ピッキング→検品→返却)と連動させて、経理処理の作業もあると良い	伝票わけ→ファイリング	清掃作業に応用できる訓練メニュー(マニュアル)	
封入作業、検算作業、判子押し、領収書の科目分け→パソコン入力、納品書、見積書等の入力など	郵便の仕分け、三つ折り、など事務補助の仕方の実務に沿った課題もあるとよい	清掃を希望される方に対応できる課題があるとよい	
伝票集計(日付押印・種類別に仕分け・パソコンにデータ入力までの一連の作業)	録音データをさきながら、議事録作成		
	文具類(はさみ、ホチキス、テープ、のり、シュレッダー、コピー)を使ったトレーニング		

分類不能
リワーク用に作業のバリエーションや難易度を上げてほしい
複数の作業を同時に指示し、経過の状況を踏まえて段取りよく遂行できるバッテリーを開発してほしい
作業を協働で行う、流れ作業的なもの
1つ1つ完結ではなく、流れのある(連続的)作業も作ってほしい

※表中グレー網掛けセル: 関係機関からの要望 以下、表2-4-5まで全て同じ。

表 2-4-3 「グループでできる作業」内容

流れ作業	ピッキング作業	その他	分類不能
ワークサンプルが流れ作業のようにつながりがあると集団に活かしやすいと思う(例:注文書を作成→注文書をもとにピッキング→注文書と納品書を数値チェックする)。	共同でのピッキング作業	作業日報のパソコン版を作してほしい。入力セルがいくつもあって、正しい結果が得られるか？入力する人と、検査する人、という仕分けでもいい	協同作業、グループ作業があればよい
ピッキングや重さ計測などを活用した受注、発注、検品作業等の一連の流れ作業等	複数名が同時にピッキングを行い、他の作業者が必要に応じて材料等を補充するなど利用者同士のコミュニケーションや状況判断が求められる作業	管理能力、調整力、ベ-ス配分、実行機能、役割行動等が確認できるもの(グループで〇〇の企画を行う課題等)	作業を協働で行う、流れ作業的なもの
電話受注→注文書の発行(物品請求書作成のような作業課題)→ピッキングなど、複数の作業課題をグループで実施できる仕組みを作りたい	流れ作業や、声かけのあるもの(セリフでも可)で行う。2人で互いにスピードを意識しながらできるもの(組み立て等)	実務作業などは特にラインの流れや周囲の人・ベアにあわせたスピードや協調性等も必要になるので、グループもしくはベアで行う作業を取り入れてほしい	具体的なイメージはないが、共同での作業の経験ができると思い思う
物流の一連の流れ作業(伝票作成→ピッキング→検品→返却)、これと連動させて、経理処理の作業もあるとよい	/	/	1つ1つ完結ではなく、流れのある(連続的)作業も作っていただければ、嬉しい
グループで物品担当や集計、納品書作成担当等、連動した形で行える作業課題。構造化されたものがあるとよい			2人以上で作業課題を分担、もしくは協力できるようなものがあるとありがたい
製造・発送部門と注文管理部門など、実際の職場であり得る連携を作業に取り入れ、自然にコミュニケーションが必要となる課題			具体的なイメージはないが、個人課題がほとんどなので、特に準備支援で活用する場合等グループでできる作業の仕組みがあれば効果的と思われる。
事務作業で入力した伝票をピッキングに活かす仕組みを作してほしい			MWSで集団作業の評価ができるようになると事業で役立てられそう。他者とのコミュニケーション(相談、依頼、質問、報告等)が必要になり、適度なプレッシャーなどの負荷が調整できる作業があれば、使ってみたい。
			流れ作業の中で全体(基準)の速度についていけるか

表 2-4-4 「社会的スキルが必要な作業」内容

コミュニケーションに関する内容	分類不能
重さ計測のような相互コミュニケーションのある作業	ソーシャルスキルを要する課題(例:小売業における接客場面等)
コミュニケーションや、臨機応変さが求められるような課題(他者とのやりとりが必要、企業によって伝票の種類が違うなど…)	管理能力、調整力、ベ-ス配分、実行機能、役割行動等が確認できるもの(グループで〇〇の企画を行う課題等)
MWSで集団作業の評価ができるようになると事業で役立てられそう。他者とのコミュニケーション(相談、依頼、質問、報告等)が必要になり、適度なプレッシャーなどの負荷が調整できる作業があれば、使ってみたい	SSTや互いに教えあえる様なくみ
製造・発送部門と注文管理部門など、実際の職場であり得る連携を作業に取り入れ、自然にコミュニケーションが必要となる課題	/
職場で必要とされている最低限のコミュニケーションスキルを向上させるために、必ず、指示者に質問をしなければ完成できない作業課題があると利用してみたい	
複数名が同時にピッキングを行い、他の作業者が必要に応じて材料等を補充するなど利用者同士のコミュニケーションや状況判断が求められる作業	
流れ作業や、声かけのあるもの(セリフでも可)で行う。2人で互いにスピードを意識しながらできるもの(組み立て等)	

表 2-4-5 「その他」の希望する内容

サブカテゴリと内容		サブカテゴリと内容	
臨機応変な対応を要する作業	途中で課題数が増える等、臨機応変さへの対応やストレス度が確認できる仕組みがあるとよい	その他	途中で課題数が増える等、臨機応変さへの対応やストレス度が確認できる仕組みがあるとよい
	同時並行、段取り、スケジューリングなど遂行機能にスポットを当てた検査内容があるとよい		教示方法の統一や観察記録用紙の整備等
	複数の作業を同時に指示し、経過の状況を踏まえて段取りよく遂行できるバッテリーを開発してほしい		各記録表の記入方法。行動観察を記入しやすいフォームを希望
	管理能力、調整力、ペース配分、実行機能、役割行動等が確認できるもの(グループで〇〇の企画を行う課題等)		評価をする際の時間的制約や対象者への負担感を考慮した上で、なるべく多方面から本人の能力を把握することを想定すると、それぞれの作業の実施方法を簡単にしてもらえれば他種類の作業が可能になる
	コミュニケーションや、臨機応変さが求められるような課題(他者とのやりとりが必要、企業によって伝票の種類が違うなど…)		対象者によっては実施方法次第で作業適応が変わってくる可能性もあり、検査者が対象者の状況により工夫しているが、客観的データとの整合性がとれるかどうか疑問もあるため、いくつかバージョンを示してもらえるとありがたい
難易度に関する内容	途中で課題数が増える等、臨機応変さへの対応やストレス度が確認できる仕組みがあるとよい		他者によるチェック機能
	リワーク用に作業のバリエーションや難易度を上げてほしい		ナブキン折りは不評だが、障害特性が見えると思う。しかし、現実的にそのような仕事がないので、対象者、職員、関係者ともモチベーションが上がりにくい。評価としてもっと簡易にならないか
	OA課題のうち、能力の高い発達障害者の相談も増えているため、検索修正課題より難易度の高い、OA課題の設定。重さ計測課題とプラグタップ組立課題の中間的な課題があるとよい		セルフトレーニングツールとして活用しているセンターもあるようだが、セルフトレーニングでは支援策がアセスメントできないこと、フィードバックしていくABA法に基づく支援の意味、効果を説明し、きちんと活用できるようサポートすることの方が大切ではないかと思われる
同時並行作業を行う処理を	同時並行、段取り、スケジューリングなど遂行機能にスポットを当てた検査内容があるとよい		
	複数の作業を同時に指示し、経過の状況を踏まえて段取りよく遂行できるバッテリーを開発してほしい		
	障害の多様化から、単発の作業はできても複数の作業を同時に取り組むことに難しさを感じる利用者も多くいるので、注意を様々な方向に向けて同時並行的に処理しなければならない作業課題の設定があればよい		

第5節 まとめ

広域・地域センター及び関係機関に対する MWS 活用の現状及び改訂希望に関するアンケート調査について報告した。最後に、それぞれの特徴を簡単にまとめる。

1 活用の現状

(1) MWS の活用状況

ア MWS 簡易版

活用割合の高かった広域・地域センターの職業相談・職業評価での活用状況と関係機関の活用状況について、担当した障害別に「どのような状況でも使った」または「必ず、または対象者の状況によって使った」に該当する合計割合の高い順を表 2-5-1 にまとめた。なお、「その他の障害」については、関係機関の回答者数が少なかったため、ここでは割愛した。

表 2-5-1 を見ると、広域・地域センターでは上位に挙がるワークサンプルが「数値入力」「文書入力」等の OA 作業や「数値チェック」等の事務作業中心であること、障害によりさらにピッキングが加わり、全体的に活用状況はよく使うものとそうでないものに 2 極化している傾向にある。一方、関係機関では、広域・地域センターにおいて活用の割合が低い「コピー&ペースト」「ファイル整理」「ラベル作成」「ナブキン折り」「重さ計測」「プラグ・タップ組立」が、身体障害者・知的障害者を除いた各障害において広域・地域センターより 20%以上高い活用割合を示している(表中網掛け部分)。

このような違いについて、広域・地域センターでは、MWS 簡易版以外にも、職業相談・職業評価で使用

表 2-5-1 広域・地域センターと関係機関における

MWS 簡易版活用状況

	活用 順位	広域・地域センター 職業相談・職業評価	関係機関
身体 障害	1	数値入力(26) 65.4%	数値入力(17) 64.7%
	2	文書入力 57.7%	文書入力 64.7%
	3	数値チェック 57.7%	コピー&ペースト 47.1%
	4	物品請求書作成 57.7%	検索修正 47.1%
	5	ピッキング 50.0%	物品請求書作成 47.1%
	6	検索修正 46.2%	ファイル整理 41.2%
	7	作業日報集計 42.3%	数値チェック 41.2%
	8	コピー&ペースト 26.9%	作業日報集計 41.2%
	9	ファイル整理 23.1%	ピッキング 35.3%
	10	重さ計測 19.2%	ラベル作成 17.6%
	11	プラグ・タップ組立 11.5%	ナブキン折り 17.6%
	12	ラベル作成 7.7%	重さ計測 17.6%
	13	ナブキン折り 7.7%	プラグ・タップ組立 17.6%
精神 障害	1	数値入力(44) 77.3%	文書入力(27) 85.2%
	2	数値チェック 70.5%	数値入力 81.5%
	3	文書入力 68.2%	検索修正 70.4%
	4	物品請求書作成 63.6%	数値チェック 70.4%
	5	ピッキング 63.6%	物品請求書作成 70.4%
	6	作業日報集計 52.3%	コピー&ペースト 66.7%
	7	検索修正 47.7%	ファイル整理 63.0%
	8	コピー&ペースト 22.7%	作業日報集計 59.3%
	9	ファイル整理 20.5%	ピッキング 59.3%
	10	重さ計測 18.2%	重さ計測 51.9%
	11	プラグ・タップ組立 13.6%	プラグ・タップ組立 48.1%
	12	ラベル作成 6.8%	ラベル作成 40.7%
	13	ナブキン折り 4.5%	ナブキン折り 33.3%
知的 障害	1	数値チェック(41) 61.0%	ピッキング(32) 65.6%
	2	数値入力 56.1%	プラグ・タップ組立 62.5%
	3	ピッキング 56.1%	重さ計測 59.4%
	4	文書入力 51.2%	文書入力 53.1%
	5	物品請求書作成 43.9%	数値入力 50.0%
	6	作業日報集計 29.3%	数値チェック 43.8%
	7	重さ計測 26.8%	物品請求書作成 40.6%
	8	検索修正 24.4%	ナブキン折り 37.5%
	9	コピー&ペースト 19.5%	コピー&ペースト 34.4%
	10	プラグ・タップ組立 14.6%	検索修正 28.1%
	11	ファイル整理 12.2%	作業日報集計 25.0%
	12	ナブキン折り 7.3%	ファイル整理 21.9%
	13	ラベル作成 2.4%	ラベル作成 18.8%
高次 脳機 能障 害	1	数値入力(37) 75.7%	数値入力(19) 57.9%
	2	数値チェック 70.3%	数値チェック 57.9%
	3	文書入力 67.6%	ピッキング 57.9%
	4	ピッキング 59.5%	文書入力 52.6%
	5	検索修正 51.4%	コピー&ペースト 52.6%
	6	物品請求書作成 51.4%	検索修正 52.6%
	7	作業日報集計 48.6%	物品請求書作成 52.6%
	8	コピー&ペースト 18.9%	ファイル整理 47.4%
	9	ファイル整理 18.9%	作業日報集計 47.4%
	10	重さ計測 16.2%	プラグ・タップ組立 42.1%
	11	プラグ・タップ組立 13.5%	重さ計測 36.8%
	12	ナブキン折り 5.4%	ラベル作成 31.6%
	13	ラベル作成 2.7%	ナブキン折り 26.3%
発達 障害	1	数値入力(44) 79.5%	数値入力(29) 69.0%
	2	数値チェック 75.0%	文書入力 65.5%
	3	文書入力 70.5%	コピー&ペースト 58.6%
	4	ピッキング 63.6%	検索修正 58.6%
	5	物品請求書作成 61.4%	ピッキング 58.6%
	6	作業日報集計 56.8%	プラグ・タップ組立 58.6%
	7	検索修正 52.3%	数値チェック 55.2%
	8	コピー&ペースト 20.5%	物品請求書作成 55.2%
	9	ファイル整理 20.5%	ファイル整理 51.7%
	10	重さ計測 20.5%	重さ計測 51.7%
	11	プラグ・タップ組立 15.9%	作業日報集計 44.8%
	12	ラベル作成 6.8%	ラベル作成 31.0%
	13	ナブキン折り 4.5%	ナブキン折り 31.0%

※表中網掛け：関係機関の方が広域・地域センターより 20%以上高い割合のワークサンプル

しているワークサンプルが既にあり、それらと重複しない OA 作業や事務作業が選択されるため、このような活用割合の低さを示すと考えられる。関係機関については、就労支援経験が 5 年未満とする所属機関が半数を超えており、評価として使えるツールが所属機関に不足しているため全体的に活用の割合が高くなっているのではないかと考えられる。

また、知的障害を見ると、OA 作業や事務作業の活用をしている広域・地域センターと異なり、関係機関は「プラグ・タップ組立」「重さ計測」が活用順位の上位となっており、実務作業での評価を行っていた。

総じて、両者ともに OA 作業や事務作業が中心であるが、全体的な活用の割合は関係機関の方が高いこと、知的障害者に対する活用の仕方に特徴があることが示された。

イ MWS 訓練版

MWS 訓練版は、元々訓練に活用することを主たる目的に開発されている。そこで、広域・地域センターの各種事業での活用状況と関係機関の活用状況について、担当した障害別に「どのような状況でも使った」または「必ず、または対象者の状況によって使った」に該当する合計割合の高い順を表 2-5-2 にまとめた。なお、「その他の障害」については、関係機関の回答者数が少なかったため、ここでは割愛した。

表 2-5-2 を見ると、身体障害を除いた 4 つの障害種において、活用割合の異なるワークサンプルがあり、「ナブキン折り」「重さ計測」「プラグ・タップ組立」といった実務作業に関しては関係機関の方が、「検索修正」や「作業日報集計」に関しては、広域・地域センターの方が活用しているこ

表 2-5-2 広域・地域センターと関係機関における

MWS 訓練版活用状況

	活用 順位	広域・地域センター 各種事業	関係機関
身体障害	1	数値入力(20) 55.0%	文書入力(22) 50.0%
	2	数値チェック 55.0%	数値入力(22) 45.5%
	3	作業日報集計 55.0%	物品請求書作成(18) 44.4%
	4	文書入力 50.0%	数値チェック(17) 41.2%
	5	検索修正 50.0%	ピッキング(15) 40.0%
	6	物品請求書作成 50.0%	作業日報集計(17) 35.3%
	7	ピッキング 45.0%	検索修正(22) 31.8%
	8	コピー&ペースト 25.0%	プラグ・タップ組立(15) 26.7%
	9	ファイル整理 20.0%	コピー&ペースト(22) 22.7%
	10	プラグ・タップ組立 20.0%	ナブキン折り(15) 20.0%
	11	ラベル作成 15.0%	重さ計測(15) 20.0%
	12	重さ計測 15.0%	ファイル整理 18.2%
	13	ナブキン折り 10.0%	ラベル作成(15) 13.3%
精神障害	1	数値チェック(38) 73.7%	物品請求書作成(27) 59.3%
	2	検索修正 71.1%	数値チェック(28) 57.1%
	3	文書入力 65.8%	ピッキング(24) 54.2%
	4	作業日報集計 65.8%	文書入力(30) 50.0%
	5	数値入力 63.2%	作業日報集計(26) 50.0%
	6	物品請求書作成 63.2%	検索修正(30) 46.7%
	7	ピッキング 55.3%	数値入力(30) 46.7%
	8	コピー&ペースト 26.3%	プラグ・タップ組立(25) 44.0%
	9	プラグ・タップ組立 23.7%	コピー&ペースト(30) 36.7%
	10	ファイル整理 21.1%	ファイル整理(30) 36.7%
	11	ラベル作成 13.2%	重さ計測(24) 33.3%
	12	重さ計測 7.9%	ラベル作成(23) 26.1%
	13	ナブキン折り 5.3%	ナブキン折り(24) 20.8%
知的障害	1	ピッキング(31) 51.6%	プラグ・タップ組立(29) 55.2%
	2	数値入力 48.4%	ピッキング(28) 53.6%
	3	文書入力 45.2%	重さ計測(28) 39.3%
	4	数値チェック 45.2%	数値チェック(30) 36.7%
	5	検索修正 38.7%	物品請求書作成(30) 33.3%
	6	物品請求書作成 38.7%	ナブキン折り(27) 29.6%
	7	作業日報集計 38.7%	数値入力(34) 26.5%
	8	プラグ・タップ組立 19.4%	文書入力(34) 23.5%
	9	コピー&ペースト 16.1%	作業日報集計(29) 13.8%
	10	重さ計測 16.1%	検索修正(34) 11.8%
	11	ファイル整理 12.9%	ラベル作成(27) 11.1%
	12	ラベル作成 6.5%	コピー&ペースト(34) 8.8%
	13	ナブキン折り 6.5%	ファイル整理(34) 5.9%
高次脳機能障害	1	数値チェック(29) 65.5%	数値チェック(21) 57.1%
	2	数値入力 62.1%	ピッキング(18) 55.6%
	3	文書入力 62.1%	物品請求書作成(22) 50.0%
	4	作業日報集計 62.1%	数値入力(25) 48.0%
	5	検索修正 58.6%	文書入力(25) 44.0%
	6	物品請求書作成 58.6%	検索修正(25) 40.0%
	7	ピッキング 55.2%	作業日報集計(21) 38.1%
	8	コピー&ペースト 27.6%	プラグ・タップ組立(19) 36.8%
	9	ファイル整理 20.7%	コピー&ペースト(25) 32.0%
	10	プラグ・タップ組立 17.2%	重さ計測(19) 31.6%
	11	ラベル作成 10.3%	ナブキン折り(19) 26.3%
	12	重さ計測 6.9%	ファイル整理(25) 24.0%
	13	ナブキン折り 3.4%	ラベル作成(17) 17.6%
発達障害	1	数値チェック(34) 67.6%	ピッキング(25) 60.0%
	2	文書入力 61.8%	プラグ・タップ組立(27) 55.6%
	3	作業日報集計 61.8%	物品請求書作成(30) 53.3%
	4	数値入力 58.8%	数値入力(32) 50.0%
	5	検索修正 58.8%	文書入力(32) 50.0%
	6	物品請求書作成 58.8%	数値チェック(30) 50.0%
	7	ピッキング 55.9%	作業日報集計(29) 48.3%
	8	コピー&ペースト 26.5%	検索修正(32) 46.9%
	9	ファイル整理 20.6%	重さ計測(26) 46.2%
	10	プラグ・タップ組立 17.6%	コピー&ペースト(32) 34.4%
	11	ラベル作成 11.8%	ファイル整理(32) 31.3%
	12	重さ計測 8.8%	ナブキン折り(26) 30.8%
	13	ナブキン折り 5.9%	ラベル作成(26) 15.4%

※表中網掛け太文字：関係機関の方が広域・地域センターより 20%以上高い割合のワークサンプル

※表中白抜き太文字：広域・地域センターの方が関係機関より 20%以上高い割合のワークサンプル

とが分かった。

このような違いについて、広域・地域センターでは、MWS 訓練版以外にも、各種事業で使用している様々な作業課題があるため、それらと重複しない OA 作業や事務作業が選択されると考えられる。一方、関係機関については、MWS 簡易版同様、就労支援経験が 5 年未満とする所属機関が半数を超えており、訓練として使えるツールが求められているのではないかと考えられる。

また、MWS 簡易版と同様、知的障害においては、広域・地域センターが OA 作業や事務作業を、関係機関は「プラグ・タップ組立」「重さ計測」が活用順位の上位となり、実務作業を活用している割合が高かった。この違いは、同じ知的障害者であっても障害の程度の違いによるもの、また広域・地域センターの方が OA 作業や事務作業を基に類似作業への就労にチャレンジしている可能性があること等から生じるのではないかと考えられる。

(2) 活用の目的及び効果等

広域・地域センターにおける職業相談・職業評価場面では、“評価”そのものとその結果に基づいた“自己理解へのアプローチ”のため、各種事業では、それに加えて「作業遂行力向上」や「適正行動の習慣化」といった“訓練”のために活用しているといえる。一方、関係機関においては、MWS 簡易版と MWS 訓練版の活用割合も併せると、どちらかという“評価”を中心に活用されているのではないかと考えられた。

実施した効果については、両者に違いがあり、広域・地域センターがほとんどの項目で「効果があった」と回答しているのに

対し、関係機関からは「効果がなかった」とする項目がいくつかあった。本調査では、その原因を特定することはできないが、実施方法や実施後の利用者への対応の違いで効果の実感に差が出たのではないかと推測される。

また、本調査は、回答者個人の活用状況を尋ねるものであったが、広域・地域センターの回答者の特徴として、職業相談・職業評価で用いられる MWS 簡易版と MWS 訓練版のうち、よく活用されているワークサンプルについては回答者自身が実施者となり活用していること、各種事業で用いられる MWS 簡易版と MWS 訓練版は、回答者がアシスタント等に依頼するか、作業支援のメニューとなっており、実施主体は主にアシスタント等であることが示された。広域・地域センターにはこのような実施主体の違いがあるため、直接利用者に実施する機会がある関係機関の回答者の方が「単独で実施」することや「利用者に合わせて作業課題を選択」することに自信を持っており、普段から他のワークサンプル等での経験を積んでおり、MWS においても活用結果の報告を受け利用者と相談している広域・地域センターの回答者の方が「結果の分析」や「結果の解釈・フィードバック」に自信を持っているという違いにつながったのであろう。また、両者とも共通して「施設内外の支援者へ研修する」ことについては、自信がないとする回答が多く、マニュアルや DVD を配布していても、活用方法の習得には至っていない現状があることが分かった。

2 改訂の希望

広域・地域センター、関係機関共に、今後の MWS 改訂にあたっては、“グループでできる作業課題”、“社会的スキルを使う作業課題”、“能力の反映の明確化”、“様式の充実や結果の整理方法の簡素化”について希望があることが分かった。

その中で、“グループでできる作業課題”には、これまでのように単独作業で完結せず、既存のワークサンプル活用をはじめとして、いくつかの作業を複数人で実施する「流れ作業」が求められていることが分かった。また、“社会的スキルを使う作業課題”には、質問・報告・相談・依頼等職場の中で必要となる最低限のコミュニケーションスキルを必要とするワークサンプルが求められていた。

また、単独作業で完結するワークサンプルとして、新たな希望が挙げられたのは、ファイリング、郵便物仕分け、テープ起こし、清掃に関する作業、おもちゃ等の組立であった。

なお、既存ワークサンプルにも MWS 訓練版のレベルやブロック数の増加が求められているものや、実施方法の変更（パソコン上での実施を紙ベースで行う、またはその逆で行う等）が求められているものがあった。

以上のように、新規ワークサンプルのキーワードとして“グループでできる”、“社会的スキルを使う”、既存ワークサンプルは“現在よりもボリュームを増やす”といった「課題自体に対する改訂の希望」が、また、『作業日報のパソコン版を作ってほしい』や『検索修正等についてパソコンを使用せず実施できるパターンを用意してほしい。機能に制限がある人やパソコンが苦手な人にも使える』といった意見にあるように、既存ワークサンプルで“より広い対象者に適用するため実施方法のバリエーションを増やす”ことや『教示方法や記録用紙の整備』といった「実施や管理方法に関する改訂の希望」の2つの方向が示されたといえるだろう。

第3章

MWS 活用及び改訂希望に関する ヒアリング調査

第3章 MWS 活用及び改訂希望に関するヒアリング調査

第1節 ヒアリング調査の目的と方法

1 目的

第2章では、アンケート調査により、広域・地域センター及び関係機関の活用状況及び MWS の改訂希望を明らかにした。広域・地域センターでは、回答者であるカウンセラー自身は MWS 簡易版の活用が中心であり、MWS 訓練版はアシスタント等が職業準備支援等で活用していること、関係機関の支援者は MWS 簡易版と MWS 訓練版の活用割合を考えると評価を中心に活用していることが示された。このような活用状況の中、新規ワークサンプルは“グループでできる”、“社会的スキルを使う”、既存ワークサンプルは“現在よりもボリュームを増やす”といった「課題自体に対する改訂の希望」が、また『作業日報のパソコン版を作ってほしい』や『検索修正等についてパソコンを使用せず実施できるパターンを用意してほしい。機能に制限がある人やパソコンが苦手な人にも使える』といった意見にあるように、既存ワークサンプルで“より広い対象者に適用するため実施方法のバリエーションを増やす”ことや『教示方法や記録用紙の整備』といった「実施や管理方法に関する改訂の希望」の2つの方向が示されたといえる。しかし、これら活用状況や改訂希望は、あくまでも量的調査の結果であること、回答者の多くが MWS の活用に関して、例えば「単独で実施する」や「利用者に合わせて作業課題を選択する」、「施設内外の支援者へ研修する」等何らかにおいて自信がないと回答していることからさらに詳細な改訂希望に関する調査が必要と考えた。

そのため、広域・地域センター及び関係機関の支援者のうち、MWS を始めとしたトータルパッケージをよく活用している支援者を対象に、

- 福祉・医療・教育機関や広域・地域センターといった職業リハビリテーション関連機関ではどのように MWS は活用されているのか（活用の意図・目的を含む）
- MWS を活用している福祉・医療・教育機関や広域・地域センターといった職業リハビリテーション関連機関ではどのような新規ワークサンプルや活用方法に関する開発要望があるのか（開発を希望する理由を含む）

を明らかにすることを目的として、ヒアリング調査を実施した。

2 方法

(1) グループインタビュー

現在の MWS の活用状況やどのような新規ワークサンプルの要望を持っているか把握するためには、数人規模のグループインタビューが適切であると考えられる。ある発言者の反応が他の人の発言につながったり、グループでの相互作用がより広範なデータを提供する、といったメリットがあることが考えられるからである（Vaughn 他, 1996）。

広域・地域センターに所属するカウンセラー及び福祉・医療・教育機関に所属する就労支援を担当する者（以下、「就労支援担当者」と言う。）を2つのグループに分けてグループインタビューを行った。時間はそれぞれ3時間程度であった。カウンセラーグループの参加者は4名であり、全員日常業務で MWS をよく活用していたが、中には MWS の開発に携わっている者が含まれていた。就労支援担当者グループは3名であり、全員日常業務で MWS をよく活用していた。

グループインタビューをガイドする項目あるいは議題は、「現状では MWS をどのように使用しているのか」「現状の MWS に関する改訂の要望」「新規ワークサンプルに関する開発の要望としてはどのようなものがある

るか」であった。

一方で上述したようなグループインタビューには、初対面の者同士では緊張のため意見が出にくい、グループでの話し合いであるため意見同調の圧力が働き、異なった意見が言いにくくなるといったデメリットがあることも考えられる。そのため、最初に自己紹介や自分の所属組織の紹介を行ってもらい緊張を解く、進行役である研究担当者がその場で流れている意見とあえて逆の意見を尋ねること等を意図的に行い、多様な意見が出やすくする工夫を行った。

(2) データ分析の方法

いずれのグループについても、まずグループインタビューで語られた内容を文字起こしし、「現在、MWSをどのように使用しているのか」「現行ワークサンプルに関する改訂の要望」「新規ワークサンプルに関する開発の要望」の3点について、各グループでの特徴的な発言をまとめた。ただし、カウンセラーグループには、特に「現行ワークサンプルに関する改訂の要望」「新規ワークサンプルに関する開発の要望としてはどのようなものがあるか」について、MWSの開発者であり、かつ障害者職業カウンセラーの経験がある、上述したグループインタビューとは別日程で行われた勿田文記氏の意見も含めることにした。

第2節 関係機関におけるMWS活用の現状と改訂の希望

1 ヒアリング対象機関の概要

各機関の属性、活用状況等の概要について、表3-2-1に示す。

表3-2-1 関係機関の属性とMWS活用状況

	A 機関	B 機関	C 機関
属性	リハビリテーションセンター	特別支援学校	自立支援法に基づく事業所
活用の対象	主に就労希望の高次脳機能障害者等	主に就労希望の知的障害者	主に就労希望の精神障害者
活用場面	職能訓練のカリキュラムの一環として実施	高等部の職業教育のカリキュラムの一環として実施	法人内の労働支援プロジェクト、委託訓練事業等のカリキュラムの一環として実施
活用状況 (使用頻度の高いワークサンプル)	数値入力、文書入力、物品請求書作成、作業日報集計、ピッキング	簡易版は全て実施 訓練版は、数値入力、文書入力、数値チェック、ピッキング、重さ計測	簡易版を中心として、その後必要に応じ訓練版を継続的に実施
備考	・高次脳機能障害者には7割程度、就労支援対象障害者には9割強の割合で活用。	・高等部1年：前期に簡易版、後期に訓練版実施。 ・高等部2～3年：実習前の集中訓練として訓練版を実施。	・法人外の地域就労支援センターと連携した共同プログラムの実施。

2 MWS活用の目的と効果

各機関の活用の目的と効果に関する内容を以下にまとめた。

(1) 作業能力や適性の評価

- ・訓練実施前の評価として活用することが多い (A 機関)。
- ・高等部 1 年時に 2 回 (前期と後期各 1 回)、生徒の全般的なアセスメントを目的に、**MWS 簡易版**のワークサンプルを実施している (B 機関)。
- ・職業能力 (主として職業準備性) の把握をねらいとして、作業体験プログラムの中で **MWS 簡易版**を実施している (C 機関)。

(2) 障害受容の促進

- ・中途障害が主な対象のため、本人の障害認識を深めるための手段の 1 つとして活用している (A 機関)。

(3) 作業遂行力の向上

- ・高等部の 2、3 年生の時に、個別支援として、**MWS 訓練版**を集中訓練 (職場実習実週前の 1~2 週間ほどから午前、午後通しで作業学習を継続するもの) の場で使用している (実習先の職場の作業を想定しながら課題を選定、B機関)。
- ・**MWS 簡易版**実施後、二次的なアセスメントとして **MWS 訓練版**を継続して実施。対象者の作業能力や課題がどの程度変化しているか等をみている (C 機関)。

(4) 補完方法の獲得

- ・苦手な面を補完するという見方が生徒や支援者にもできることによって、自分の苦手な面を、補完方法を使用して、できるという実感をもたせてあげられる。このことは、教育活動としての効果が大きく、職員が職業能力の評価や作業学習のあり方を考えていく上でも有効である (B 機関)。

(5) 情報共有

- ・病院から他の支援機関に移行する利用者の割合も多いため、**MWS 簡易版**の結果のデータや訓練状況を具体的に提供することは、関係機関との情報共有という面で効果的である (A 機関)。
- ・主治医から、ワークサンプルの評価や訓練結果について企業の方へ情報提供し、実際の職場の中で想定される状況等を伝えることによって、企業の理解が深まる (A 機関)。
- ・補完方法を活用することによって、このようなことならできるといった点を企業と共有することは、受け入れ側の不安を取り除くことにつながる (B 機関)。

(6) 作業上の適正行動の習慣化、易疲労性の評価

- ・セルフマネジメントやストレス・疲労のマネジメントもねらいとしている。準備から評価までマニュアルを見ながら自分で実施できるようにしたり、どのようなストレスや疲労が感じられるのか生徒と一緒に考えながら行っている。さらに、1 日の終わりにグループワークを実施し、そこで得られたストレス・疲労のサインを生徒同士で情報交換できるようにしている (B 機関)。

(7) 職業情報の提供

- ・高等部 1 年時における **MWS 簡易版**実施にあたっては、アセスメントだけでなく、仕事体験的な意味合いもねらいとしている (どのような仕事があるのか、**MWS**の体験を通じて理解を深める、B 機関)。

3 MWS 改訂の希望

(1) 現行ワークサンプルに関する改訂

ア OA 作業

- ・「文書入力」「検索修正」について、エラー箇所を分かりやすく示してもらえると、対象者へのフィードバックの面で有効（A 機関）。
- ・「文書入力」について、対象者によっては、ふりがなの設定をつけられるようなモードがあるとよい（A 機関、B 機関）。
- ・「文書入力」について、問題の中に「未熟児」という単語がある。敏感な生徒もいるため改善してほしい（B 機関）。
- ・Windows 7 への対応を望む（A 機関）。

イ 事務作業

- ・作業量が増やせるとよい（C 機関）。

ウ 実務作業

- ・「ピッキング」について、難易度をさらに高められるとよい（A 機関、B 機関）。
- ・「ピッキング」について、作業時間参考値（処理時間）がどの組み合わせで実施されたものなのか記載されたものがあるとよい（A 機関）。
- ・長期スパンで実施する場合は、同じ課題の繰り返しになり、本人のモチベーションが低下しやすい。可能ならば、課題の量を増やすといった改善が望まれる（C 機関）。

(2) 新規ワークサンプルの開発

ア 個別課題

- ・実際の仕事に近い、「データ入力」の課題があるとよい（A 機関）。
- ・OA 作業として「やってみよう！パソコン入力」（障害者職業総合センター，2007）の作業課題を取り入れるのもよい（A 機関）。
- ・事務系の就労を考えた場合、「電話対応」の課題があるとよい（A 機関）。
- ・聴覚情報に基づいて作業を遂行するような、「テープ起こし」の課題があるとよい（C 機関）。
- ・実務作業のバリエーションを増やすことができるとよい（A 機関、B 機関）。

<具体例>

- ・袋詰めや梱包の仕事に関連した課題として、「検品」「仕分け」「数量チェック」。
- ・サービス関係の仕事に関連した課題として、「清掃」「厨房関係の作業」（皿洗い、野菜カット等）。
- ・介護施設での仕事に関連した課題として、「衣服のたたみ作業」。
- ・事務補助での仕事に関連した課題として、「郵便物、メール便の仕分け」。

イ 複数及びグループでの実施

- ・実際の会社での作業環境に近づけ、職業の理解を深めることをねらいとして、複数の作業を同時に処理するような課題と環境設定があるとよい（A 機関、B 機関）。

<活用例>

- ・複数の課題（ナプキン折り、ピッキング、OA Work）を一連の流れの中でグループで実施。それぞれに役割意識を持たせながら訓練を行った。その後、生徒達が製造、物流、事務の会社見学に行き、MWS の作業体験と結びつけることによって、働くことや会社への理解を高めることにつながった。このような職業理解を深めるための使い方もできるとよい（B 機関）。

- ・MWS 課題ではないが、訓練プログラムの一環として病院の職員から名刺の注文を受けて販売を実施している。営業、事務、製作の3つのグループに分けて訓練を実施しているが、訓練効果は高い（A 機関）。
- ウ 社会的なスキルが必要な作業
- ・精神障害の場合、緊張が高いといった特徴により、作業がたとえできたとしても、関係する他者（職員やメンバー）に対して、連絡、報告等の引継ぎをするといったコミュニケーションの面で苦手な者も多い。このため、コミュニケーションが必要な場面設定の中でスキルを高められるような訓練課題があるとよい（C 機関）。

（3） その他（MWS 以外の事項に関する意見）

ア 実施時間の問題

- ・カリキュラムや授業時間の枠内で一定の課題を終了させなければならないという制約がある（A 機関、B 機関、C 機関）。

イ 集団で実施する場合の問題点

- ・他校から、集団でできないのかと聞かれることが多い（2、3人でやる分には可能、少人数のグループで3つぐらいのワークサンプルをローテーションでやる形なら実現可能ではないかとも思う、B 機関）。
- ・教育現場では、訓練的なイメージを押し出すと敷居が高い印象がある。「アセスメント」として使うとか、「お仕事体験キット」のイメージであればスムーズに理解してもらえるように思う（B 機関）。

ウ 補完手段、補完行動に対する意識

- ・レベルを上げていくことだけでなく、補完手段を主体的に活用できるようするための指導の方向性を持つことが大切。本校では、生徒、職員とも「補完行動が作業のポイント」が合い言葉となっている（B 機関）。

エ トータルパッケージこそその意義

- ・MWS と併せて他の M-メモリーノートや MSFAS も活用しながら行うことに意味がある。グループワークについても、さらに参考となるようなものができるとうよい（B 機関）。
- ・就労支援に携わる支援者が、単に評価だけの目的ではなく、トータルパッケージの中でやることによって（利用者の課題について）改善できるという意識を共有することが大切（C 機関）。

オ わかりやすいマニュアルの整備

- ・わかりやすいパンフの作成、活用事例等が掲載されているとうよい。
- ・MWS に関する「専門用語集」についても検討できないだろうか。

カ ホームワーク版の充実

- ・通院患者の方の利用も多いため、宿題のような形で使える「ホームワーク版」がもう少し充実するとうよい（A 機関）。

4 まとめ

関係機関に対する MWS 活用の現状及び改訂希望に関するヒアリングの結果について報告した。最後に、活用の目的と効果、改訂希望についてそれぞれの特徴をまとめる。

（1） 活用の目的と効果

MWS 簡易版については、対象者の障害特性の把握や職業準備性に着目しての本来の目的である「職業能力の評価」を目的として実施されている傾向が強く、MWS 訓練版については、MWS 簡易版での初期評価の結果を踏まえて、主に「作業能力の向上や作業能力の変化の把握」「補完手段の獲得」「障害受容の促進」

を目的として活用されている傾向が見られる。

その他として、評価という視点だけでなく「職業理解を促すための作業体験として活用」、結果の活用方法として「関係機関との情報共有」「企業の障害特性の理解や受入れの不安感の軽減」に効果的であるといった意見も挙げられた。

(2) MWS 改訂の希望

現行ワークサンプルについては、「エラーした箇所を分かりやすく表示してほしい (OA 作業：文書入力、検索修正)」「難易度をさらに高めてほしい (実務作業：ピッキング)」「繰り返し実施する場合のモチベーションを高めるために、課題の量を増やしてほしい」といった意見が挙げられた。

新規ワークサンプルについては、個別課題において「就職先企業で従事する仕事に類似した、より臨場感ある課題の設定」に関する希望が多かった。ヒアリング対象機関の属性が反映されている面もあるが、「実務作業のバリエーションが増えるとよい」といった意見も挙げられた。

また、「複数及びグループで実施できるワークサンプル (それぞれの役割分担を明確にした上での作業設定)」に関する希望や効果に対する期待、社会的スキルが必要な作業として「コミュニケーション能力が必要となる場面設定」に関する希望があること等が分かった。

第3節 広域・地域センター等における MWS 活用の現状と改訂の希望

1 ヒアリング対象機関の概要

広域・地域センター等における活用状況等の概要について、表 3-3-1 に示す。

表 3-3-1 広域・地域センター等の MWS 活用状況

	Dセンター	Eセンター	Fセンター	Gセンター
活用の対象	精神障害者・ 発達障害者	精神障害者・ 発達障害者	精神障害者・発達障害 者・高次脳機能障害者	精神障害者・発達障害 者・高次脳機能障害者
活用場面	職業評価・職業準備支 援・リワーク支援	職業評価・職業準備支 援・リワーク支援	一般訓練の前の導入訓 練	職場復帰支援・ジョブデ ザインサポートプログラ ム・ワークシステムサポ ートプログラム
活用状況 (使用頻度の 高いワーク サンプル)	数値入力・文書入力・ 検索修正・数値チェッ ク・物品請求書作成・作 業日報集計・ピッキ ング・重さ計測	検索修正・数値チェッ ク・物品請求書作成・作 業日報集計・ピッキ ング・プラグ・タップ組立	OA 作業・事務作業	対象者の復職先や希望職 種に合わせて選択。ただ し、OA 作業・事務作業・ ピッキングが多い傾向に ある
備考	・対象者に合わせて適 宜選択。 ・職業評価は簡易版中 心。	・本庁舎に実務作業がな いため、職業評価で活用 できない事情がある。	・簡易版は使用していな い。 ・グループに分けて、少 人数で実施。	・訓練版を活用する際は、 評価→訓練→再評価の手 順に従ってほぼマンツー マンに近い形で行う。

2 MWS 活用の目的と効果

広域・地域センター等の活用の目的と効果に関する内容を以下にまとめた。

(1) 作業能力や適性の評価

- ・職業評価で **MWS 簡易版**を中心に適宜活用している（**D センター**）。
- ・精神障害者・発達障害者に **MWS 簡易版**を適宜実施している（**E センター**）。
- ・評価として、**MWS 簡易版**の全ワークサンプルを実施している（**G センター**）。

(2) 作業課題としての活用

- ・職業準備支援で作業課題として活用しており、ミスの有無に関係なく、一通り全レベルの全課題をやってもらっている（**E センター**）。

(3) 作業遂行力の向上

- ・職業準備支援では、**MWS 訓練版**を使って、自分で作業の準備をするところから、可能な人には作業終了後の自己チェック（採点）まで、自立した作業を行っている（**D センター**）。

(4) 体験の共有

- ・高次脳機能障害者だと、同じ作業でもあるところまではミスなくできるけど、例えば試行数が多くなった時等に急にできなくなる利用者がある。レベルが統制されているから見えることなのかと思う（**G センター**）。
- ・発達障害者は、ワークサンプルを何種類かやってもらおうと、好き嫌いや本人の向き不向きが出る。やってみて初めて気づく。また、注意力の散漫は、よく出てくるのでありがたい。本人は正しくやっている、できていたはずだと思っていたものが、実際やってみるとできなかつたりミスが出たり、体験することで自分の思いと実際の差を共有できて、これから先のことを考える礎になる（**D センター**）。
- ・よく「パソコンが得意だから絶対パソコンの仕事で」と言う利用者にはやってもらおうと、ミスがいつまでたってもなくならず、違うものでやったらミスなくできることがある。「仕事ならこっちのほうがいいんじゃないの？」と方向が変わる利用者もいて、体験の共有ができる（**F センター**）。

(5) 補完方法の獲得

- ・一般訓練に入る前に、**MWS 訓練版**を使いながら補完行動・補完手段の習得、休憩の取り方等自分の仕事に対する姿勢を高める目的で活用している（**F センター**）。
- ・評価→訓練→再評価といった方法ではないが、ミスがあった場合はフィードバックして、その都度対策を立て、ミスがないように次の課題に臨む方法をとっている（**E センター**）。
- ・**MWS 訓練版**を活用する際は、マンツーマンに近い中で、評価→訓練→再評価の手順で行っている（**G センター**）。

(6) グループ作業としての活用

- ・リワーク支援において、グループの管理や運営等を利用者に任せて、2週間後に一定の目標まで作業を遂行してもらっている。作業後、グループの中で役割分担がきちんとできたか、コミュニケーションがとれたか、といったことを振り返っていく。作業そのものの正誤を重視するよりは、スケジュール管理やコミュニケーション能力、組織的な働き方をするというところに焦点を当てて、フィードバックする

という形をとっている（Dセンター）。

（7） 時間管理スキルを高める取り組み

- ・リワーク支援において、個別に「いつまでに、この課題を全部仕上げて下さい」と提示して、利用者にそのスケジュールリングをしてもらっている。期間中にいろいろな講座や他にやらなければいけないことがあるので、その中でどれをどれだけやろうというようなスケジュールリングを各自が行うが、期間内に終わりそうにない時にはちゃんとアシスタントに相談に来れるかどうか、そういうところも見ている（Eセンター）。

（8） コミュニケーションスキルを高める取り組み

- ・リワーク支援では、利用者同士の相互採点をやっていて、自分がその日やる分が済んだら、採点してもらえそうな人を自分で探して、お願いし、採点してもらっている。これは、人に頼み事をする練習、人に物を頼むタイミングを探る練習も兼ねてやっている（Eセンター）。

以上の 8 点を見てみると、（1）作業能力や適性の評価、（2）作業課題としての活用、（3）作業遂行力の向上、（4）体験の共有は、レベルが設定された 13 種類のワークサンプルがあり、標準作業時間や正答率が提示されているといった『MWS の基本特性』を活かした活用を、（5）補完方法の獲得は、補完手段が提案され、その習得のための訓練方法が明示されているといった『MWS の特長』を活かした活用を、（6）グループ作業としての活用、（7）時間管理スキルを高める取り組み、（8）コミュニケーションスキルを高める取り組みは、元々想定されていた活用方法を超えた『応用的活用』をしているといえるだろう。

3 MWS 改訂の希望

（1） 現行ワークサンプルに関する改訂

ア OA 作業

- ・「OAWork 全般」について、①画面を最大化しても「次へ」ボタンをクリックすると元に戻ってしまうので最大化したままにしてほしい（Eセンター）。②発達障害や精神障害の利用者の中にはストレス耐性が不足している人もおり、「不正解」という表示にすごく敏感な人もいるため、不正解の回数ではなく、正解の回数を出せるようにしてほしい（Eセンター）。③濁点と半濁点の判別が、見にくくやりにくい（Dセンター）。④セルフチェックで進める際ミスの記録が残るようにしてほしい（Eセンター）。⑤視覚障害の人にも対応できるようにしてほしい（刎田氏）。
- ・「文書入力」や「検索修正」について、習慣でエンターキーを押す人もいるが、エンターキーを押すとエラーになってしまう。現実に使われるソフトウェアでそれでエラーになることは考えにくいので、エンターキーを押してもエラーとならないようにしてほしい。また、括弧の全角半角を区別するなら区別してほしい。あるいは半角に統一してほしい（Eセンター）。
- ・「コピー&ペースト」について、画面を最大化すると「OK」ボタンが隠れてしまうので直してほしい（Eセンター）。
- ・「検索修正」について、①ID 入力を入れ間違えても再入力できるようにしてほしい（Eセンター）。②修正箇所だけ字体が変わっているが、実際の仕事では紙データと入力データと見比べてミスがないかどうか確認し、ミスがあったところを直す作業が多いので、そのようなものに変更してほしい（Eセンター）。

イ 事務作業

- ・「数値チェック」について、①課題の中に合計自体が全然違うものがあり、取り組む内容の本質ではないが、気にする利用者があるので、正しいものに直してほしい（Eセンター）。②現状は合計のみの照合だが、正答率が高いので、OA 作業の「検索修正」のようにレベルが上がったら照合箇所を増やすようにしてほしい（Eセンター）。
- ・「物品請求書作成」について、①カタログの電子化をしてほしい（Dセンター）。②手順を現実的なもの（1 試行ずつ計測しなくても良いことにする）に許容してほしい（Gセンター）。
- ・「作業日報集計」について、①ペーパーレス化してほしい（Fセンター）。②片まひの人に対応できるように記入欄を大きくしてほしい（Eセンター）。

ウ 現行ワークサンプル全般

- ・各レベルにおける難易度や分量に差があるので、均等になっていた方が、取り組む方にとってやりやすいのではないかと（Gセンター）。
- ・マニュアルの記述について、具体的には掲示や指示の仕方、口頭指示の台詞、時間計測のタイミング等を明確に示してほしい（Dセンター）。
- ・利用者層や利用者の MWS への慣れに応じて、さらに高い難易度のワークサンプルを設定してほしい（Gセンター）。
- ・職業評価において MWS 簡易版を使用するだけでは十分に障害特性を把握できない場合があり、一方で MWS 訓練版では分量が多すぎて全てのワークサンプルを実施するのは困難であるため、簡易版と訓練版の中間的分量のものがあるとよい（Dセンター、Eセンター）。
- ・現在マニュアルに示されている補完手段は有用であり、さらに補完方法のバリエーションを増やしてほしい（Gセンター）。
- ・自分で作業が進められる利用者については自主的に遂行してもらうことで、より多くの利用者を同時に見ることが可能になり、人手がかからなくなるため、各作業の分量を増加させてほしい（Gセンター）。
- ・各ワークサンプルを一度にまとめられるような形の MWS 訓練版結果整理票を開発してほしい（Eセンター）。
- ・MWS 訓練版結果整理票について、①折れ線グラフ表示を改善してほしい（Eセンター）。②MWS 簡易版結果整理票と同じように、パーセンタイル順位を自動的に表示できるようにしてほしい（Gセンター）。
- ・MWS 訓練版の標準値について、現在年代別の標準値はレベル 1～5（最後のレベル）まで各 1 ブロックを全て行った場合となっているが、プログラム期間の都合で全てのレベルを行えない場合もあるので、年代別・レベルごとに標準値を示してほしい（Gセンター）。

(2) 現行ワークサンプルにおける困難点と工夫

カウンセラーグループは、前節の関係機関と異なり、カウンセラーという単一の職種で構成され、MWS の開発に携わる等 MWS の内容を熟知している者も含まれていたためか、「現行ワークサンプルに関する改訂の要望」では、単純に改訂希望だけでなく、発生している困難点やそれをカバーするための工夫についても意見が挙げられた。そこで、これらについてもまとめた。

ア マニュアル上で示している作業手順等の違和感について（Eセンター、Gセンター）

(ア) 困難点

「物品請求書作成」で 1 試行ずつ実施し時間計測をすること、「ピッキング」で最後にコンテナから物品を出して作業台に置き、注文書を上に乗せること、といった決められた手順は必然性が感じられにくい。

作業の核でない周辺のルールはもう少し緩やかでも良いのではないか。

「検索修正」で修正箇所だけ字体が変わっており、そのような指示書の基に修正することに違和感を感じる利用者が多い。

(イ) 工夫

「例えば～のような状況であれば、今やってもらっているような作業をやることもある」と説明し、利用者に納得してもらい、作業の意味を捉えなおすことによって利用者の違和感の解消を図っている。

イ 作業にかかるコストについて (Eセンター)

(ア) 困難点

開発当初から推奨している ABA デザインによる評価・訓練・再評価の手続き通りに行うには、マンツーマンである必要があり、現場で人手が十分な場合は手続き通りの手順で実施可能だが、そうでない場合は困難である。

(イ) 工夫

アシスタントの人数と利用者の人数によるが、何とかプログラムが回っている場合、事務作業に取り組むグループ、OA 作業に取り組むグループとグループ分けをし、それぞれの訓練生の評価を行う。

作業課題として作業をこなしていくために活用するのか、あるいは障害特性を確認し補完手段を検討するため等に活用するのか、支援者側が目的をはっきり意識して活用することで、何が何でもマンツーマンで実施しなければならないという状況は回避できる。

(3) 新規ワークサンプルの開発

ア 個別課題

- ・パソコン上でファイルをいくつか立ち上げ、場合によっては2つくらいの画面を見て、遂行する作業 (Gセンター)
- ・データ入力 (Eセンター)
- ・現在の「数値チェック」のような紙ベースのみの照合作業ではなく、パソコンの画面と紙を照合する作業 (Gセンター)
- ・現在の「作業日報集計」を OA 作業に取り入れた照合入力作業 (勿田氏)
- ・現在の「検索修正」で使用していないデータを使った入力作業 (勿田氏)
- ・様式が全く違う注文書等から金額や注文品等を入力する作業 (MWS ホームワーク版の家計簿作成をより仕事場での状況に近づけたイメージ、勿田氏)
- ・ファイリング (Eセンター)
- ・郵便物仕分けのような作業 (Eセンター)
- ・作業のアウトプットは決まっているが、作業プロセスは自発的に考える必要のある作業 (Dセンター)

イ 複数及びグループでの実施

- ・複数のワークサンプルを一連の流れに組み合わせた臨場感のある作業 (Dセンター)

※開発当初はこのような考えも基本コンセプトの中に含まれていた。しかし、開発当初は、

- ①そのような連続作業ができるようなグループ構成が可能なのか。
- ②グループを作って複数人が自然な流れの中で作業する時に、エラーをしたり、なにか修正が必要になったり、イレギュラーなことが起きた時にどう対処するのか。
- ③グループ作業を前提にした形にデータを作り込んでいくと、エラーパターンや確実な正解パターンを作るのが、非常に複雑である。

④その都度都度の正誤をチェックするだけの支援者が必要になる。今の MWS で利用者がバラバラにやっても、複数の利用者を支援できる人と、それが難しい支援者がいる。グループになればもっと支援者の注意配分等は複雑になり、利用者の待ち時間をたくさん作ることもなりかねない。といった課題があったため、単一で完結する作業のみの開発となった（勿田氏）。

ウ 社会的なスキルが必要な作業

- ・現行ワークサンプルで連続性をとるのではなく、ワークサンプルの前後にコミュニケーションタスクとして、例えば、インストラクションと実施後のダブルチェックをする役と作業を実施する役に分け、作業の指示をする、報告をする、困ったときに相談する等を付け加える。問題としては、コミュニケーションスキルをどのようにモデル提示し、評価し、利用者にフィードバックするか。しっかりとしたマニュアルが必要になる（勿田氏）。

(4) その他

- ・MWS はトータルパッケージの本質ではないから作業としては何でもいい。何らかの作業を取り入れ、例えば、作業終了を報告する、作業の仕上がりを自己確認する、進捗状況の自主管理をする、ここからここまでの勉強をこんなふうにするというスケジュールを事前に作らせて、毎日の報告を決められた報告用紙だけでなく、コミュニケーションも入れて行う。こういったセルフマネジメントスキルとコミュニケーションスキルを併せて、かつ、不安や脳疲労の対策を徹底的に自己管理させ、コントロールしてもらおう。本質はセルフマネジメントであり、休憩のとり方、不安、幻聴、症状のコントロール、そういったことのセルフマネジメントをメインターゲットにした取り組みをした方が良い（勿田氏）。

4 まとめ

広域・地域センター等に対する MWS 活用の現状及び改訂希望に関するヒアリングの結果について報告した。最後に、活用の目的と効果、改訂の希望についてそれぞれの特徴を簡単にまとめる。

(1) 活用の目的と効果

広域・地域センターにおける MWS 活用の目的と効果は、①『MWS の基本特性』を活かした職業評価・作業課題的活用、②『MWS の特長』を活かした補完手段等検討材料としての活用、③『MWS の特徴を活かした応用的活用』、の大きく3つに分けることができた。

MWS は「職業能力を評価するだけでなく、作業を行う上で必要となるスキルや職務遂行を可能とする環境を明らかにすること、様々な様相で現れる職業上の問題に対応できるよう、訓練課題としての機能も果たせること（障害者職業総合センター, 2004）」が基本的な開発コンセプトであるとされてきた。このうち、障害者職業総合センター(2004)のいう「職業能力評価的な使用方法」とは、本調査では①『MWS の基本特性』を活かした職業評価・作業課題的活用、同様に「訓練課題としての機能」とは②『MWS の特長』を活かした補完手段等検討材料としての活用に相当すると考えられる。そして、従来指摘されてきたこれら2つの使い方に加え、③『MWS の特徴を活かした応用的活用』が存在することが見出された。すなわち、③は新しい活用方法であるといえるだろう。

『MWS の特徴を活かした応用的活用』が生じた背景として、MWS の適用対象の範囲拡大があると思われる。MWS が開発された時期は、高次脳機能障害のある利用者への適用が中心であったが、近年では加えて、気分障害や知的に遅れのない発達障害のある利用者等への適用も行われるようになってきている。そして、気分障害のある利用者等の場合、認知的制約（障害）は MWS を含めた今までのワークサンプルで捉えることが

難しい場合があると支援者から認識されている。そのため、より課題を高度にすることでその課題を捉えるべく、MWS の新しい活用方法が模索されている状況であると考えられる。

(2) MWS 改訂の希望

MWS 改訂の希望をヒアリングする中で、現在発生している困難点も挙げられた。それについては、各々工夫することでカバーできていることが明らかになったが、現行ワークサンプルの改訂希望として挙げられている内容のうち、現在の仕様の修正を希望する内容は、工夫してもカバーしきれない内容であるために挙げられたものといえよう。

また、それ以外の現行ワークサンプルの改訂や新規ワークサンプルの開発の内容の多くは、開発当初に適用を想定していた高次脳機能障害者だけでなく、気分障害や発達障害といった新たに適用対象となってきた利用者への活用を想定した内容となっている。その内容は、単に“作業種目の拡大”だけではなく、“作業の難易度を調整してほしい”という要望と、“複数のワークサンプルを一連の流れに組み合わせた臨場感のある作業”、“作業プロセスを自発的に考える作業”、“社会的スキルが必要な作業”に大別されるだろう。

“作業の難易度”に関しては、ヒアリングからは、「MWS を使用する中では捉えられない課題が、実際の就職・復職後に発生する」ことへの困惑が語られた。つまり、支援者も障害のある利用者本人も捉えられていない課題が発生することがあるということである。そして、MWS を実施することにより実際の職場に就職・復職する前に課題を把握できれば、その情報を基に、前もって配慮を会社側に依頼することも、または訓練により自己管理できるよう訓練として取り組むことも可能になる、ということである。

“複数のワークサンプルを一連の流れに組み合わせた臨場感のある作業”は、現行ワークサンプルが各自独立した完結作業であるのに対し、「ある作業のアウトプットが、別の作業で用いられ、その作業のアウトプットがさらに別の作業で用いられる」といった各々の作業が連鎖するアイデアが語られた。このような設定により前の工程に関する問い合わせ、あるいは次の工程の担当者への説明、といったコミュニケーションの機会（あるいはそのようにすることへの必要性・責任感）が、自然に生じることになる。また責任感等自分のグループ内における役割に関する意識も強まるかもしれない。このようにすることで、「臨場感」（という言葉がヒアリング対象者より使われた）が高まり、より訓練効果が望めるのではないかと認識があるように考えられる。しかし、このアイデアに関して、勿田氏からは、グループ構成や支援者側のチェック体制、課題の作り込みの複雑さから開発ときに断念した経緯が語られており、実現にはなお検討が必要と考えられる。

さらに、“作業プロセスを自発的に考える作業”や“社会的スキルが必要な作業”について、今のところ開発を希望する内容は支援者の直感的なものにとどまっている。しかしながら、トータルパッケージの基本的なコンセプトを活かしながらこれらを支援目標として位置づけて、MWS の改訂を図るのであれば、これらのスキルを測定することや、どのような条件下であればこれらのスキルが伸びるのかについても、検討する必要があるだろう。

参考・引用文献

Hart, B., & Risley, T. R. (1975) Incidental teaching of language in the preschool, *Journal of Applied Behavior Analysis*, 8, 411- 420.

厚生労働省職業安定局高齢・障害者雇用対策部障害者雇用対策課(2010). ハローワークにおける障害者の就職件数前年度を上回る（平成 21 年度における障害者の職業紹介状況等）, <<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000006572-img/2r9852000000658k.pdf>>(アクセス日 2012 年 12 月 11 日)

障害者職業総合センター(2004)調査研究報告書 No.57 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション
技法に関する総合的研究 (最終報告書), p.99.

障害者職業総合センター(2007)調査研究報告書 No.77 「やってみよう! パソコンデータ入力」の開発—知的
障害者のパソコン利用支援ツールの開発に関する研究—.

Vaughn, S., Schumm, J. S., & Sinagub, J. M. (1996) Focus group interviews in education and psychology, Sage
publications, inc.(S,ヴォーン・J,S.シューム・J,シナグブ 井下理 (監訳) 田部井潤・芝原宣幸 (訳) グル
ープ・インタビューの技法、慶応義塾大学出版会).

終章

今回の調査研究で得られた成果と
今後に向けて

終章 今回の調査研究で得られた成果と今後に向けて

第1節 今回の調査研究で得られた成果

本研究では、MWS 活用にあたって対象障害の多様化が進んでいること、市販化以降購入者の活用実態は不明であることから、MWS を実際に活用している支援者に対し、活用の実態と共に今後の職業リハビリテーションサービスの展開を考える上で、MWS にどのような改訂が望まれているのか調査を行い、今後 MWS の的確な改訂を行うため、その内容について整理した。以下、その内容をまとめる。

1 MWS の活用実態

(1) アンケート調査から得られた活用状況

ア MWS 簡易版

広域・地域センターにおいてよく活用されているワークサンプルは、「数値入力」「文書入力」等の OA 作業や「数値チェック」等の事務作業中心で、障害によりさらにピッキングが加わる特徴があった。平成 19 年度に行った調査（村山ら, 2008）と同様、全体的によく使うワークサンプルとそうでないものに 2 極化している傾向にあった。なお、職業相談・職業評価で活用される場合は概ね回答者であるカウンセラー自身が実施しているが、各種事業になると、アシスタント等への依頼や作業支援のメニューとなっており、実施主体が異なっていた。

一方、関係機関では、広域・地域センターにおいて活用の割合が低い「コピー&ペースト」「ファイル整理」「ラベル作成」「ナプキン折り」「重さ計測」「プラグ・タップ組立」が、身体障害を除いた各障害において高い割合を示し、比較的多くのワークサンプルを活用していた。

MWS 簡易版は、元々評価のために作成されたものであるが、広域・地域センターには MWS 簡易版以外にも長年使われている評価のためのワークサンプルがあるため、これらと重複しない OA 作業や事務作業が使われているのであろう。一方、関係機関においては、就労支援実施年数 5 年未満とする機関が半数を超える中、評価として使えるツールにニーズがあり、幅広く使われる傾向があるのではないかと考えられる。

イ MWS 訓練版

広域・地域センター、関係機関において MWS 簡易版ほどの違いは見られなかったが、身体障害を除き「ナプキン折り」「重さ計測」「プラグ・タップ組立」といった実務作業に関しては関係機関の方が活用しており、「検索修正」や「作業日報集計」に関しては、広域・地域センターの方が活用していた。広域・地域センターでは、MWS 簡易版同様、職業準備支援等における作業支援において様々な実務作業を有しているため、実務作業の活用割合が低いことが考えられる。また、「検索修正」や「作業日報集計」は、リワーク支援での活用も多いと考えられ、両機関の対象者の違いも、こうした活用状況の違いにつながっていると考えられる。

また、MWS 簡易版同様、広域・地域センターではよく使うワークサンプルとそうでないものに 2 極化している傾向があり、関係機関においても一部にそのような傾向が見られた。さらに、広域・地域センターの職業相談・職業評価で活用される場合は概ね回答者であるカウンセラー自身が実施しているが、各種事業になると、アシスタント等への依頼や作業支援のメニューとなっており、MWS 訓練版に関しては、カウンセラーよりもアシスタント等が実施の主体となっていることが明らかとなった。

ウ 活用の目的と効果等

広域・地域センターにおける職業相談・職業評価場面では、「評価」そのものとその結果に基づいた「自己理解へのアプローチ」に、各種事業では、それに加えて「作業遂行力向上」や「適正行動の習慣化」といった“訓練”のために活用している。一方、関係機関においては、活用の割合からどちらかというところ“評価”を中心に活用されているのではないかと考えられた。

実施した効果については、両者に違いがあり、広域・地域センターがほとんどの項目で「効果があった」と回答しているのに対し、関係機関からは「(3) 作業上の適正行動の習慣化」「(5) 障害の自己受容」「(4) 自己認知の促進」について「効果がなかった」とする回答があった。本調査ではその原因を特定することはできなかったが、実施方法や実施後の利用者への対応の違いで効果の実感に差が出たのではないかと推測される。第2章での繰り返しになるが、MWSを単なる作業課題として取り組み終了するだけでは、利用者の自己認知にはつながりにくい。MWS簡易版での評価やMWS訓練版でABA法を基に評価・訓練に取り組み、その結果を基に相談を行い、その中で利用者の障害が作業上どのように現れるかをフィードバックし、利用者自身の認識を確認しながら、必要な場合は補完手段を導入し習得するための訓練をしていくといったプロセスが必要となる。こうした手続きがなく活用されているのであれば、自己認知は進まず、障害の受容には至らず、その結果として作業上に現れる障害を適正化できないままということも考えられるだろう。これは、広域・地域センターでも「あまり効果がなかった」とされた「(4) 自己認知の促進」にも同様のことがいえるだろう。

また、活用にあたって、直接利用者を実施する機会がある関係機関の回答者の方が「単独で簡易版・訓練版とも利用者を実施する」と「利用者に合わせて使用するMWSの作業課題を考え、選択する」は自信を持っており、「実施した結果を分析し、解釈する」「分析・解釈した結果を利用者等にフィードバックする」については、普段から他のワークサンプル等での経験を積んでいる広域・地域センターの回答者の方が自信を持っているという違いがあった。また、両者とも共通して「実施方法等を施設内外の支援者等に研修する」ことについては、自信がないとする回答が多かった。後述する改訂希望において、関係機関の回答者の一部から、活用方法に関する研修の要望が出されていたことから、今の段階では他機関への研修よりも自らがどのように活用していくかということに重みがあるといえよう。

(2) ヒアリング調査から得られた活用状況

ア 広域・地域センター

職業相談・職業評価で活用しているワークサンプルとして挙げられていたのは、MWS簡易版の「数値入力」、「文書入力」、「検索修正」、「数値チェック」、「物品請求書」、「ピッキング」、「重さ計測」であった。「数値入力」「ピッキング」については、職業評価の時点でMWS訓練版を使用するという意見もあった。職業準備支援における作業課題として挙げられていたのは、「物品請求書作成」、「作業日報集計」、「ピッキング」、「プラグ・タップ組立」であった。

ヒアリング対象者からは、地域センターの場所によって職業評価を行う場所に「ピッキング」等の実務作業がなく（職業準備支援の場所に常設されている）、職業評価の時点で活用できない状況もあり、必然的にOA作業と事務作業を行うことになるという意見があった。

イ 関係機関

ヒアリングを行った3機関とも評価としてMWS簡易版を活用していた。広域・地域センターと異なり、13種類全てのワークサンプルを実施している機関もあった。MWS訓練版は、各機関により目的のとらえ方

は異なり、評価としてさらに活用している機関もあれば、訓練として活用している機関もあった。その中で活用されていたワークサンプルは、「数値入力」、「文書入力」、「ピッキング」が共通しており、障害により「作業日報集計」、「数値チェック」、「物品請求書作成」、「重さ計測」が取り上げられていた。なお、「ラベル作成」は活用されていないようであった。

2 MWSの改訂希望について

第2章アンケート調査では、広域・地域センター、関係機関とも、概ね“グループでできる作業課題”、“社会的スキルを使う作業課題”、“能力の反映の明確化”、“様式の充実や結果の整理方法の簡素化”について改訂の希望が多いことが分かった（p.55～56 参照）。

本研究の目的は、MWSの改訂の基礎調査として、改訂の内容を整理、検討することであった。そこで、第2章での量的調査の補足で行ったアンケート調査の自由記述及び第3章での活用経験豊富なカウンセラーや関係機関職員等へのヒアリング調査から得られた改訂希望について、改めて表4-1-1～4-1-6にまとめた。6つの表は、「OA作業」「事務作業」「実務作業」「流れ作業」「その他」の5つのカテゴリーに分け、いずれの表も、区分に該当する内容を自由記述、ヒアリング調査の如何に関わらずまとめた。なお、発言者の欄に、どの調査で得られた内容かを示している他、ヒアリング調査で得られた内容は、発言者の主旨が変わらない程度に修正している。

表4-1-1は「OA作業」の改訂希望の内容をまとめている。

「画面や機能に関する改訂の要望」は現在のアプリケーションソフト OAWork Ver.3.0の修正を求められている内容である。“画面の大きさ”に関しては、Windowsのバージョンアップと共に開発した当方も問題を感じており、いずれ変更したいと考えていた内容である。

「文書入力」と「検索修正」の内容も修正を求められている内容であるが、修正すればこれまでの基準値に影響を与えるものと修正できる内容を選別した上で、修正の検討を行うべきであろう。

「新規課題の提案等」は、これまでのOA作業になかった作業の希望をまとめているが、既存ワークサンプルのうち事務作業をOA作業でも併用できる仕組みや、複数の画面を見比べる等視点の転換ができるようなチェック作業が求められている。

表4-1-2は「事務作業」の改訂希望の内容をまとめている。

「数値チェック」「物品請求書作成」「作業日報」の内容は、概ね現行ワークサンプルの修正を求めている内容である。これについては、OAWork Ver.3.0と同じく、修正すればこれまでの基準値に影響を与えるものと修正できる内容を選別し、修正を検討する必要があると考える。また「数値チェック」の“合計のみの照合だが、OA作業の検索修正のようにレベルが上がったら照合箇所を増やす形にした方がいいのではないか。かなり正答率が高いので、少しそんなこともしてもらえるといいかなと思う。”については、現在のレベルにさらなる付加を求めるものとして参考となるだろう。

「テープ起こし」「ファイリング・仕分け作業」「その他」は、いずれも新規の事務系ワークサンプルとしての提案である。「テープ起こし」については、高次脳機能障害者や発達障害者の評価や精神障害者の就労可能職種として、関係機関からのニーズが比較的あったが、一方で広域・地域センターに対するヒアリングでは、「評価として活用するとしても、それを訓練として取り上げるか」といった意見もあり、ニーズに偏りがあった。その反面、「その他」にある“一定のデータを基に、例えばマクロで組みなさいとか、こういう条件で作らなさいというような課題。1つの明確な答えがある課題ではなく、答えをどう自分で作るか思考ができる課題。”、“必要な資料を集め、誰かに聞き、形になるものに作るプロセスがある課題。1週間の間にやりましょうとか、3日間で仕上げましょうという指示し、作業の痕跡を残してもらい、振り返り、共有する

表 4-1-1 OA 作業に関する改訂希望の内容

区分	内 容	発言者	
O A 作業	画面改訂機能に関する要望	OAワークの作業画面の大きさを自在にできるようにならないか。大きさの調整がもっとできるとよい。	広域・地域(ヒ)
		最大化にしても「次へ」をクリックすると元に戻ってしまうので、できれば最大化のままにしてほしい。また、コピー＆ペーストの課題で画面を最大化すると「OK」ボタンが隠れてしまうので、修正してほしい。	広域・地域(ヒ)
		精神障害や発達障害の人は「不正解」という表示にすごく敏感な方もいるので、例えば「試行数6回で正解数が5回です」というような表示にしてもらった方がストレス面でもよい。	広域・地域(ヒ)
		1事例実験モード、というべきABA法(原文ママ)を自動的にやれるモードがあるとよい。	広域・地域(ア)
		セルフチェックモードにした時に、ミスして直したものは直しましたということが記録に残るとよい。	広域・地域(ヒ)
	文書入力	ふりがなの設定などをつけられるような機能があるとよい。	関係機関(ヒ)
		漢字にルビをふってほしい。	関係機関(ア)
		括弧の全角半角を区別するなら区別してほしい、あるいは半角に統一してほしい。	広域・地域(ヒ)
		文書入力の濁点と半濁点の判別がしにくい。	広域・地域(ヒ)
		結構クセでエンターキーを押す人もいるが、エラーになってしまうので、エンターキーを押してもOKにしてほしい。	広域・地域(ヒ)
		エラー箇所を分かりやすく示してもらえると、フィードバックが有効になる。実際に対応する場面では、やってみようパソコンデータ入力のように、結果がポンと出る形だと、わかりやすい。	関係機関(ヒ)
	「未熟児」の単語が出てくるが、知的障害の人に配慮し、支障がないのであれば文書ごと削除してほしい。	関係機関(ヒ)	
	検索修正	修正指示書について、利用者から「この箇所を修正しろ、と言う指示が出ることで普通無いですよね」と言われることが割と多い。修正箇所だけ字体が変わっていることに違和感を感じる人がいて、実際の仕事だと「この紙データと入力データと見比べてミスがないかどうか確認して、ミスがあったところを直して下さい」という作業が中心だろうから、どっちかというところという形の作業の方がいいのではないかな。	広域・地域(ヒ)
		文書入力と同様、クセでエンターキーを押す人もいるが、エラーになってしまうので、エンターキーを押してもOKにしてほしい。括弧の全角半角を区別するなら区別してほしい、あるいは半角に統一してほしい。	広域・地域(ヒ)
		ID入力を入れ間違えても再入力できるような形にしてもらえるとありがたい。	広域・地域(ヒ)
	新規課題の提案等	ビジネス文書の作成課題を作してほしい。	広域・地域(ヒ)
		エクセルの機能を活用して課題に取り組む作業を追加してほしい。	広域・地域(ア)
		基礎的スキルに加えて少し複雑な課題も導入してほしい。	広域・地域(ア)
		視覚障害の人にも対応できるようにしてほしい。	広域・地域(ヒ)
		現在の「作業日報集計」をOA作業に取り入れた照合入力作業。	広域・地域(ヒ)
		現在の「検索修正」で使用していないデータを使った入力作業。	広域・地域(ヒ)
		作業日報のパソコン版を作してほしい。入力セルがいくつもあって、正しい結果が得られるか？手作業と同じぐらい、実は大変かもしれない。入力する人と、検査する人、という仕分けでも良い。	広域・地域(ア)
		様式が全く違う注文書などから金額や注文品などを入力する作業(MWSホームワーク版の家計簿作成をより仕事場での状況に近づけたイメージ)。	広域・地域(ヒ)
		パソコン上のファイルをいくつか立ち上げて、2画面ぐらい見て、作業するようなことが実際には求められている。例えば出退勤、タイムカードの課題をPDFで見て、それを見ながら別のファイルに入力するような作業。	広域・地域(ヒ)
		伝票作成作業をOA作業で行う。ピッキングのデータで良いので、宛先を入力して、伝票は連続帳票で出力させる。それをピッキングで使えば、連続性のある作業となる。印刷物の様式を変えればよい。	広域・地域(ヒ)
		数値チェックでも同じ形のを紙ベースで見比べるだけじゃなくて、データ上のものと紙のものを見比べるとか、あるいは入力系の作業でも文書入力なんかもそうだと思うが、上にある文字をそのままに打つというのではなく、別の形になっているものを入れ直すとか、そういった要素が入ってもいいのでは。	広域・地域(ヒ)
	事務課題、OA課題の種類が増えたら利用してみたい。	広域・地域(ア)	

※発言者…広域・地域(ア):広域・地域センターアンケート調査、関係機関(ア):関係機関アンケート調査、広域・地域(ヒ):広域・地域センターヒアリング調査、関係機関(ヒ):関係機関ヒアリング調査の略。以下、全ての表も同じ。

表 4-1-2 事務系作業における改訂希望の内容

区分	内 容	発言者
チ ェ 数 ツ ク	基本的に数値だけを見ているので、電卓を使って修正する作業は本来の課題とは違うが、中には発達障害の利用者で、「これ合計自体が違いますよ」と指摘される人がいるので、きちんと修正してほしい。	広域・地域(ヒ)
	合計のみの照合だが、OA作業の検索修正のようにレベルが上がったら照合箇所を増やす形にした方がいいのではないかと。かなり正答率が高いので、少しそんなこともしてもらえるといいかなと思う。	広域・地域(ヒ)
作 業 日 報 集 計	記入欄が狭く、片手麻痺の方は記入が難しいため、4人分くらいの集計表にして一つの幅を広くするなど、もう少し書きやすい形に変えてほしい。	広域・地域(ヒ)
	音声教材を作してほしい。レベルごとに指示するものと、レベルをランダムにシャッフルしたものとよい。	広域・地域(ア)
	作業をしていないところを「0」や「0.0%」と記入するルールになっているが、忘れてしまう人もいる。注意喚起はもちろん必要だが、記入忘れてトレーニング期になるのはちょっと厳しいかと思う。	広域・地域(ヒ)
物 品 請 求 書	パソコンで電子化したものを見て作業するというのが現場では多くなっているため、カタログの電子化を希望する。	広域・地域(ヒ)
	マニュアル上は1試行ずつ実施し、時間計測することになっているが、実際には先に商品名や数量を全部書き、検索する利用者もいる。あまり作業の核じゃない周縁的なルールは少し緩やかでもいいのではないかと。	広域・地域(ヒ)
テ ー プ 起 こ し	録音データをききながら、議事録を作成する。	関係機関(ア)
	テープ起こしを職として考える利用者もいるので、テープ起こしは音源があるといいかもしれない。	関係機関(ヒ)
	事務希望だと電話対応があるため、通常配慮してもらおうが、練習や評価でそういったことを練習・評価できるものがあるとうい。	関係機関(ヒ)
フ ァ イ リ ン グ ・ 仕 分 け 作 業	ファイリング課題(実際の文書、書類のファイリング)など。	広域・地域(ア)
	伝票わけを行いファイリングする作業。	関係機関(ア)
	郵便の仕分け、三つ折り、など事務補助の仕事の実務に沿った課題もあるとうい。	関係機関(ア)
	ファイリングとか、郵便物仕分け。	広域・地域(ヒ)
	何か書類を仕分けるであったりとか、そういう仕分け物みたいな作業課題があるとうい。	広域・地域(ヒ)
	検品作業のような課題、仕分け課題、ファイリング課題。	関係機関(ヒ)
	仕分けの仕事や何か分別するような作業があるとうい。	関係機関(ヒ)
そ の 他	文具類(はさみ、ホチキス、テープ、のり、シュレッダー、コピー)を使ったトレーニング。	関係機関(ア)
	はんこの押印作業。カッターで紙をきれいに規格通りの大きさに切る作業。	広域・地域(ヒ)
	一定のデータを基に、例えばマクロで組みなさいとか、こういう条件で作成しなさいというような課題。1つの明確な答えがある課題ではなく、答えをどう自分で作るか思考ができる課題。	広域・地域(ヒ)
	必要な資料を集め、誰かに聞き、形になるものを作るプロセスがある課題。1週間の間にやりましょうとか、3日間で仕上げましょうという指示し、作業の痕跡を残してもらい、振り返り、共有することができるとよい。	広域・地域(ヒ)
	検索修正等についてパソコンを使用せず実施できるパターンも用意してほしい。パソコン作業の苦手な方や機能的に制約がある方にも対応できる。	広域・地域(ア)
	簡易事務作業の課題があれば増やしてほしい。	広域・地域(ア)

ことができるとうい。」といった「作業のアウトプットは決まっているが、作業プロセスは自発的に考える必要のある課題」の開発希望については、リワーク支援対象者を念頭にした広域・地域センターからのニーズが高く、このような内容は関係機関からは取り上げられなかった。

表 4-1-3 は「実務作業」の改訂希望の内容をまとめている。

「既存作業」は既存ワークサンプルに関する修正を求められている内容である。このうち、“重さ計測に音声教材を作してほしい。”と“ピッキングは、マニュアルだと最後にコンテナを置いて、そこから作業台に出

して、注文書を置く、という手続きがあるが、これは報告の手続きに必要なのだろうか。あまり作業の核じゃない周辺のルールは少し緩やかでもいいのではないか。”は、修正すればこれまでの基準値に影響を与えるため、改訂には慎重な検討が必要であろう。

「清掃作業」は文字通り清掃に関する新規ワークサンプルを希望する内容である。清掃に従事する障害者は多いため、評価としても訓練としてもニーズが一定程度あると考えられる。

「その他」では“重さ計測課題とプラグ・タップ組立課題の中間的な課題があるとよい。”をはじめ、実務作業の充実を求めているものの抽象的な内容が多く、具体的な内容は“袋詰めとか、梱包の仕事に就く方が多いので、ナプキン折りがちょっと形を変えて折ったり貼ったりする作業にならないか。”と“数をたくさん数える作業”のみであった。“袋詰め、梱包”に関しては、「既存作業」にある“ナプキン折りは不評だが、障害特性が見えると思う。しかし、現実的にそのような仕事がないので、モチベーションが上がりにくい。評価としてもっと簡易にならないか。”とも関連する内容であり、新たなワークサンプルとして類似作業導入を検討することも考えられる。

表 4-1-3 実務作業における改訂希望の内容

区分	内 容	発言者	
実務作業	既存作業	重さ計測に音声教材を作ってほしい。	広域・地域(ア)
		ナプキン折りは不評だが、障害特性が見えると思う。しかし、現実的にそのような仕事がないので、モチベーションが上がりにくい。評価としてもっと簡易にならないか。	広域・地域(ア)
		ナプキン折りのビジュアルマニュアルについて、完成写真や途中の過程を飛ばさないようなものを作ってほしい。	関係機関(ア)
		ピッキングは、マニュアルだと最後にコンテナを置いて、そこから作業台に出して、注文書を置く、という手続きがあるが、これは報告の手続きに必要なのだろうか。あまり作業の核じゃない周辺のルールは少し緩やかでもいいのではないか。	広域・地域(ヒ)
	清掃作業	清掃作業に応用できる訓練メニュー(マニュアル)がほしい。	関係機関(ア)
		清掃や研磨などの仕上げ作業に関する評価で、スピードや精度などが明らかになる課題がほしい。塗り絵ソフトなどを利用してきれいにする評価ができないか。	広域・地域(ア)
		清掃を希望される方に対応できる課題があるとよい。	関係機関(ア)
	その他	袋詰めとか、梱包の仕事に就く方が多いので、ナプキン折りがちょっと形を変えて折ったり貼ったりする作業にならないか。	関係機関(ヒ)
		数をたくさん数える作業があるとよい。	関係機関(ヒ)
		重さ計測課題とプラグ・タップ組立課題の中間的な課題があるとよい。	広域・地域(ア)
		知的障害と発達障害で、OA・事務作業が難しいと思われる利用者が多いため、実務作業のメニューを増やしてほしい。	関係機関(ア)
		実務作業課題の充実。	広域・地域(ア)
		より現業的な作業課題を増やしてほしい。	広域・地域(ア)
	実務課題に、もっと微細な部品を扱う作業を加えてほしい。	広域・地域(ア)	

表 4-1-4 は「流れ作業」の改訂希望の内容をまとめている。この表はアンケート調査での“グループでできる作業課題”で記載されていた内容が中心で、希望が比較的まとまっていたため、1つのカテゴリーとして取り上げる。

「既存作業を活用した流れ作業の構築」は、既存ワークサンプルを基に、ある作業のアウトプットが次の作業に使われ、その作業のアウトプットはさらに次の作業に使われる、といった組み合わせを求める内容で

ある。「新規流れ作業」も、既存ワークサンプルにとらわれず、様々な作業を組み合わせ、同様の作業が行えるように希望する内容である。現在のワークサンプルは、単独で作業が終了する形式のものであるが、より実際の職場に近い環境を設定することや流れ作業で他者とのコミュニケーションが生じ、必然的に対人スキルの評価や訓練につなげられるという期待を感じるものである。

「ピッキング」は、上記のような流れ作業ではなく、“ピッキング”を小集団で行うことを取り上げている。こちらも、現在のピッキングは単独で作業するものであるが、小集団での実施により、コミュニケーションが派生することを期待していると考えられる。

しかし、開発担当であった勿田氏からは、開発当初にもこうした「流れ作業」は基本コンセプトとして考えられていたものの、①そのような作業ができるようなグループ構成が可能なのか、②グループを作って複数人が自然な流れの中で作業する時に、イレギュラーなことが起きた時にどう対処するのか、③グループ作業を前提にした形にデータを作り込んでいくと、エラーパターン等を作るのが非常に複雑である、④その都度正誤をチェックするだけの支援者が必要になるため、支援者の注意配分等は複雑になり、利用者の待ち時間をたくさん作ることもなりかねない、といった課題があったため、単一で完結する作業のみの開発となった経緯が語られている。

この「流れ作業」については、勿田氏の指摘にある③エラーパターンの作成とも関連するが、得られた結果をどのように評価するのか、についてもグループ作業の場合は複雑になる。また、「流れ作業」を担当する支援者が十分確保できるかといった問題もあろう。広域・地域センター、関係機関共にニーズはあるが、実現するためにクリアしなければならない課題は多く、着手するには課題をどのようにクリアす

表 4-1-4 流れ作業に関する改訂希望の内容

区分	内 容	発言者	
流れ作業	既存作業を活用した流れ作業の構築	ワークサンプルが流れ作業のようにつながりがあると集団に活かしやすいと思う(例:注文書を作成→注文書をもとにピッキング→注文書と納品書を数値チェックする)。	広域・地域(ア)
		ピッキングや重さ計測などを活用した受注、発注、検品作業等の一連の流れ作業。	広域・地域(ア)
		電話受注→注文書の発行(物品請求書作成のような作業課題)→ピッキングなど、複数の作業課題をグループで実施できる仕組みを作りたい。	広域・地域(ア)
		グループで物品担当や集計、納品書作成担当等、連動した形で行える作業課題。構造化されたものがあるとよい。	広域・地域(ア)
		実務作業などは特にラインの流れや周囲の人・ペアにあわせたスピードや協調性等も必要になるので、グループもしくはペアで行う作業を取り入れてほしい。	関係機関(ア)
		物品請求書作成やピッキングで使用する書類を日ごと、週ごとでとりまとめるなど作業の連動をもたせてほしい。	広域・地域(ア)
		複数のワークサンプルを単体でも使えるけれども、組み合わせでも使えるような構造にしてもらえるとよい。	広域・地域(ヒ)
		ピッキングの棚の材料を使って、指示に従って伝票を作成する作業。それをパソコンで作り、それを基にピッキングするのであれば、既存の材料でできると思う。	広域・地域(ヒ)
		事務作業で入力した伝票をピッキングに活かす仕組みを作ってほしい。	広域・地域(ア)
	流れ新作業	物流の一連の流れ作業(伝票作成→ピッキング→検品→返却)と連動させて、経理処理の作業もあると良い。	広域・地域(ア)
		封入作業、検算作業、判子押し、領収書の科目分け→パソコン入力、納品書、見積書等の入力。	関係機関(ア)
		伝票集計(日付押印・種類別に仕分け・パソコンにデータ入力までの一連の作業)。	関係機関(ア)
	ピッキング	共同でのピッキング作業。	広域・地域(ア)
		複数名が同時にピッキングを行い、他の作業が必要に応じて材料等を補充するなど利用者同士のコミュニケーションや状況判断が求められる作業。	広域・地域(ア)

るか、検討が必要と考えられる。

表 4-1-5～4-1-6 は「その他」の改訂希望の内容をまとめている。

「ワークサンプルの拡充」は、現行ワークサンプルでの不足・レベル・ブロック数・試行数等の増加、ホームワーク版の充実が挙げられた。全般的に種類（ワークサンプル）も量も現在の支援においては不足しているという意見である。特にレベルに関する内容が多く、ワークサンプルの内容を問わず、広く難易度の設定を上げることが求められていることが分かる。また、簡易版についても、内容や実施方法のさらなる充実が求められている。

「臨機応変な対応・同時並行処理が必要な作業」は、文字通り“臨機応変さ”や“複数作業の同時処理”といった現行ワークサンプルには見られない性質を求めるものである。「事務作業」で取り上げた「作業のアウトプットは決まっているが、作業プロセスは自発的に考える必要のある課題」にも近い希望といえるだろう。これは、高次脳機能障害が主な対象障害であった開発当初と比べ、多様な障害種類の利用者に活用されるようになり、“臨機応変さ”や“複数作業の同時処理”を苦手とする利用者も多く存在することから、訓練のニーズがあるためと考えられる。

「コミュニケーションに関する内容」は、“他者とのコミュニケーションを必要とする作業”に関する要望である。「流れ作業」においても、その作業中に発生するコミュニケーションを期待していると考えられるが、こちらのカテゴリは、よりコミュニケーションを図ることを主目的にしているものである。

「臨機応変な対応・同時並行処理が必要な作業」「コミュニケーションに関する内容」共に、障害の多様化に伴い、現行ワークサンプルやその他独自に取り扱う作業課題等で対応できないためニーズがあると考えられるが、「流れ作業」同様、どのような課題の作り込みが可能であるか、難易度の設定、評価のあり方等、開発に向けて検討すべき課題は多い。

「マニュアル・結果整理に関する内容」は、現行ワークサンプルにおけるマニュアル類や結果の整理方法に関する修正を求める内容である。現在、MWS の実施にあたっては、マニュアル類と DVD を実施の参考とするようにしているが、マニュアル類や DVD の活用状況を鑑みて、教示方法や実施の仕方等がより分かりやすく伝える工夫がなお必要ということであろう。また、行動観察や結果の整理にあたっては、アンケート調査においても“様式の充実や結果の整理方法の簡素化”が要望の上位に上げられており、こちらも今後改訂を検討する必要があるだろう。さらに、“補完方法”の具体的な事例集といったものも求められていることが分かった。

「その他」には、いずれにも含まれない内容をまとめた。このうち、“セルフトレーニングツールとして活用しているセンターもあるようだが、セルフトレーニングでは支援策がアセスメントできないこと、フィードバックしていく ABA 法（原文ママ）に基づく支援の意味、効果を説明し、きちんと活用できるようサポートすることの方が大切ではないかと思われる。”と“ABA 法（原文ママ）による指導・支援をなぜすべきであるか、わかりやすく解説することが必要。”は、MWS 開発時のコンセプトを再確認する必要性について述べている。本調査では活用状況について調査は行っているが、「どのような」使い方をしているかまでは把握していない。しかし、研修等様々な機会を通じて聞いてみると、ABA デザインに基づく支援を行っている機関は少ない印象を受ける。併せて、“トータルパッケージのバランスで見たとき、最後のグループワークについて、もう少し参考になるものがあるとよい。”といった意見があるように、MWS を介在させた支援による効果を発揮するためにも、トータルパッケージのツールをトータルで使うという原点に立ち返ること、またその意義を分かりやすく伝えること、不足しているグループワークに関する情報を補足していくことは重要であろう。さらに、“トータルパッケージの本質はセルフマネジメントであり、休憩のとり方、不安、幻聴、症状のコントロール、そういったことのセルフマネジメントをメインターゲットにした取り組み

表 4-1-5 その他の改訂希望の内容①

区分	内 容	発言者	
その他	ワークサンプルの拡充	新しいワークサンプルを考えると、既存の13種類で若干物足りないというか、もうちょっと種類があったら、こういう種類の課題があったらいいのにといいのは13種類使ってきて感じている。	広域・地域(七)
		ホームワーク版がもう少し充実すると良い。	関係機関(七)
		一つの課題の課題数みたいなところは増やして欲しい。	広域・地域(七)
		より難易度の高いものであるとか種類が増えるとよい。	広域・地域(七)
		リワーク用に作業のバリエーションや難易度を上げてほしい。	広域・地域(ア)
		OA課題のうち、能力の高い発達障害者の相談も増えているため、検索修正より難易度の高い、OA作業の設定。重さ計測とプラグ・タップ組立の中間的な課題があるとよい。	広域・地域(ア)
		ピッキングでもう少し難易度の高い課題。	関係機関(七)
		ピッキングは難易度が上がるとよい。レベル5も3分くらいでできる人は多い。	関係機関(七)
		簡易版と訓練版の間くらいの作業負荷がほしい。簡易版だけでは評価をする点で十分ではなく、訓練版になると何種類もできないので、手頃なものがほしい。	広域・地域(七)
		評価として簡易版はやるが、あっさりすぎて若干物足りないところがある。しかし、訓練版をやろうと思うと時間的に難しいので、簡易版のもうちょっとアップグレードしたものとよい。	広域・地域(七)
		簡易版は作業によってあっけなく終わるもの(ピッキング、数値チェック等)があり、職業評価で使いづらいと感じることがある。もう少し評価で使えるだけのボリュームがほしい。	広域・地域(ア)
		評価をもっと充実してほしい。	関係機関(ア)
		簡易版のレベルを上げてほしい、ところどころ訓練版を活用している(ピッキングなど)。	関係機関(ア)
		評価をする際の時間的制約や対象者への負担感を考慮した上で、なるべく多方面から本人の能力を把握することを想定すると、それぞれの作業の実施方法を簡単にしてもらえれば多種類の作業が可能になると思う。	広域・地域(ア)
		簡易版のボリュームや難易度の差を調整してほしい。例えばナブキン折りは訓練版と別物になっているが、作業日報集計はレベル1から5までボリュームがあるので、もう少し均一になっていた方がやりやすいと思う。	広域・地域(七)
同時並行対応が必要な作業	途中で課題数が増える等、臨機応変さへの対応やストレス度が確認できる仕組みがあるとよい。	広域・地域(ア)	
	同時並行、段取り、スケジューリングなど遂行機能にスポットを当てた検査内容があるとよい。	広域・地域(ア)	
	複数の作業を同時に指示し、経過の状況を踏まえて段取りよく遂行できるバッテリーを開発してほしい。	広域・地域(ア)	
	管理能力、調整力、ペース配分、実行機能、役割行動等が確認できるもの(グループで〇〇の企画を行う課題等)。	広域・地域(ア)	
	障害の多様化から、単発の作業はできても複数の作業を同時に取り組むことに難しさを感じる利用者も多くいるので、注意を様々な方向に向けて同時並行的に処理しなければならない作業課題の設定があればよい。	広域・地域(ア)	
同時処理、例えば何かチェックをしながら内容を理解するとか、そういう複数の作業を同時に処理するような課題があるとよい。	関係機関(七)		
コミュニケーションに関する内容	重さ計測のような相互コミュニケーションのある作業。	関係機関(ア)	
	コミュニケーションや、臨機応変さが求められるような課題(他者とのやりとりが必要、企業によって伝票の種類が違うなど…)。	関係機関(ア)	
	精神障害の場合、緊張が高いといった特徴により、作業がたとえできたとしても、関係する他者(職員やメンバー)に対して、連絡、報告等の引継ぎをするといったコミュニケーションの面で苦手な者も多い。このため、コミュニケーションが必要な場面設定のなかでスキルを高められるような訓練課題があるとよい。	関係機関(七)	
	MWSで集団作業の評価ができるようになると事業で役立てられそう。他者とのコミュニケーション(相談、依頼、質問、報告等)が必要になり、適度なプレッシャーなどの負荷が調整できる作業があれば、使ってみたい。	広域・地域(ア)	
	製造・発送部門と注文管理部門など、実際の職場であり得る連携を作業に取り入れ、自然にコミュニケーションが必要となる課題。	広域・地域(ア)	
	職場で必要とされている最低限のコミュニケーションスキルを向上させるために、必ず、指示者に質問をしなければ完成できない作業課題があると利用してみたい。	広域・地域(ア)	
	ワークサンプルの前後にコミュニケーションタスクとして、例えば、インストラクションと実施後のダブルチェックをする役と作業を実施する役に分け、作業の指示をする、報告をする、困ったときに相談するなどを付け加える。	広域・地域(七)	
	流れ作業や、声かけのあるもの(セリフでも可)で行う。2人で互いにスピードを意識しながらできるもの(組み立て等)。	関係機関(ア)	

表 4-1-6 その他の改訂希望の内容②

区分	内 容	発言者	
マニ ュ ア ル ・ 集 計 結 果 に 関 す る 内 容 そ の 他	教示方法の統一や観察記録用紙の整備等。	広域・地域(ア)	
	各記録表の記入方法。行動観察を記入しやすいフォームを希望。	関係機関(ア)	
	教示内容は作業内容をきちんと説明するものであってほしい。	関係機関(ア)	
	マニュアルの実施方法は、掲示方法、指示の仕方、口頭指示の台詞などにばらつきがあり、厳密さに欠けている。いつ時間を計るとかまで載せてほしい。	広域・地域(ヒ)	
	マニュアルは、見にくい、分かりにくいという意見がある。分かっている人が見れば分かるが、そうではない場合このときどうするんだろうと迷い、意外と説明が不親切なので、初めての人にも分かるようにしてほしい。	広域・地域(ヒ)	
	理論編のいちばん最後にでも、トータルパッケージに関する専門用語と解説がつくような用語集があるとよい。	関係機関(ヒ)	
	集計結果について見やすくしてほしいという意見が多い。パーセンテージのところ自動的になるが、それだと他の作業と比べてどうかと比較する際に不便なので、パーセンテージを選択できるようにしてほしい。また、グラフのレベルごとの回数が出るが、一つ一つのレベルでこのレベルを何回やったかを分かりやすい表にほしい。レベルごとで折れ線グラフがつながっていないが、できれば1本につながるような形に選択ができるようにしてほしい。各作業ごとを1枚にまとめられるような形でのものも作ってもらえるとありがたい。	広域・地域(ヒ)	
	結果の整理票を充実させてほしい(簡易版)	関係機関(ア)	
	訓練版の平均値について、年齢別は全レベル実施した値であるが、実際はなかなかそういうやり方をしないので、年齢別×各レベルの平均値を示してもらえると参考になる。また、簡易版の結果整理票のようにパーセンタイルを自動集計してもらえるとよい。	広域・地域(ヒ)	
	対象者によっては実施方法次第で作業適応が変わってくる可能性もあり、検査者が対象者の状況により工夫しているが、客観的データとの整合性がとれるかどうか疑問もあるため、客観的データのバージョンをいくつか示してほしい。	広域・地域(ア)	
	パーセンタイルなどの客観的な指標について、訓練版も簡易版と同様に、入力して出るようにしてほしい(現在は訓練版のパーセンタイルは、表をもとに範囲で作成)。	広域・地域(ア)	
	訓練版の結果の整理シートの自由度が低く、自分で自分の作業の進め方をコントロールしているリワークの利用者には使用できないので改善してほしい。	広域・地域(ア)	
	例えば、簡易版の数値チェックなどで1問でも間違えるとパーセンタイルが15になってしまうなど、難易度や問題数の設定がバラツキが大きいので改善してほしい。	広域・地域(ア)	
	結果のフィードバックの仕方や例について、実施者も利用者も理解しやすいように整理し、実施者の技能や経験に左右されないような仕組みを検討してほしい。	広域・地域(ア)	
	補完方法の提案等、実例として情報提供してほしい。	関係機関(ア)	
	マニュアルの補完方法の例は参考になるので、全国での補完方法を収集し、そのバリエーションを増やして、写真付きで紹介できるとよい。	広域・地域(ヒ)	
	ピッキングの訓練版については、作業時間参考値がどの組み合わせで実施されたものなのか知りたい。課題によっては、1レベルから5レベルまで1通り選ぶと、重複する具体物がある場合が多く、なるべく重複しないような組み合わせを選んで実際にやっているため。	関係機関(ヒ)	
	実際の就労に必ずしも必要でない課題も含まれているように思う。本当に就労に必要な物を厳選してほしい。	関係機関(ア)	
	そ の 他	MWSIはトータルパッケージの本質ではないから作業としては何でもよい。何らかの作業を取り入れ、例えば、作業終了を報告する、作業の仕上がりを自己確認する、進捗状況の自主管理をする、ここからここまでの勉強をこんなふうにするというスケジュールを事前に作らせて、毎日の報告を決められた報告用紙だけでなく、コミュニケーションも入れて行う。こういったセルフマネジメントスキルとコミュニケーションスキルを合わせて、かつ、不安や脳疲労の対策を徹底的に自己管理させ、コントロールしてもらおう。本質はセルフマネジメントであり、休憩のとり方、不安、幻聴、症状のコントロール、そういったことのセルフマネジメントをメインターゲットにした取り組みをした方がよい。	関係機関(ヒ)
		セルフトレーニングツールとして活用しているセンターもあるようだが、セルフトレーニングでは支援策がアセスメントできないこと、フィードバックしていくABA法(原文ママ)に基づく支援の意味、効果を説明し、きちんと活用できるようサポートすることの方が大切ではないかと思われる。	広域・地域(ア)
ABA法(原文ママ)による指導・支援をなぜすべきであるか、わかりやすく解説することが必要。		広域・地域(ア)	
障害種類に従って、どの作業が最も使えるか、そしてその使い方について、具体的な資料がほしい。		関係機関(ア)	
定期的に研修会を開き、どのように利用、活用すべきか教えてほしい。		関係機関(ア)	
GATBの結果との相関関係など示してもらえるとありがたい。		広域・地域(ア)	
トータルパッケージのバランスを見たとき、最後のグループワークについて、もう少し参考になるものがあるとよい。		関係機関(ヒ)	

組みをした方が良い”といったように、MWS を作業課題として活用することに意義があるのではなく、作業を行う中で捉えていかなければならない側面があることを忘れてはならない。

第2節 今後に向けて

1 改訂の必要性

前節で改めて改訂の希望について、その内容をまとめた。その内容からは、広域・地域センター及び関係機関共に「改訂の必要性はある」と認識されているとあっていいだろう。

改訂の方向性としては、大きく①現行ワークサンプルの微修正、②現行ワークサンプルのレベルやブロック増加、③実際の仕事により近い環境を設定できる新規ワークサンプルの開発、の3つに集約されるだろう。

①現行ワークサンプルの修正

前節での「OA 作業」「事務作業」「実務作業」にあるような作業内容・実施方法・機能等の修正や、「その他」にある“マニュアル・集計結果に関する内容”の修正にあたる。より支援者や利用者にとって実施（取り組み）しやすいハード面の整備が求められているといえよう。

②現行ワークサンプルのレベルやブロック増加

「その他」の“ワークサンプルの拡充”にある難易度を上げる、ブロック数を増やす、簡易版の充実等である。これは、開発当初より幅広い対象者に活用されるようになったことや、一定期間の訓練を可能にするために必要とされているのであろう。

③実際の仕事により近い環境を設定できる新規ワークサンプルの開発

「流れ作業」をはじめ、「OA 作業」の“新規課題の提案等”、「事務作業」の“テープ起こし”、“ファイリング・仕分け作業”、“その他”、「実務作業」の“清掃作業”、“その他”、「その他」の“臨機応変な対応・同時並行処理が必要な作業”、“コミュニケーションに関する内容”と幅広い希望が挙げられている。

特に、単独作業である現行ワークサンプルにない仕組みである「流れ作業」や“臨機応変な対応・同時並行処理が必要な作業”、“コミュニケーションに関する内容”については、広域・地域センター及び関係機関共にニーズが高いと考えられる。ただし、ヒアリング調査で指摘されたように、グループ構成・支援者側のチェック体制・課題の作り込みの複雑さ、評価のあり方等、実現にはクリアしなければならない課題は大きく、新規開発が可能かどうか、今後さらに検討が必要であり、開発に着手するとしても、課題の作成から評価のあり方が整備されるまでには長い期間が必要ではないかと考える。

また、新規ワークサンプルの開発にあたっては、例えば“テープ起こし”や“作業プロセスを自発的に考える課題”等で広域・地域センターと関係機関の間にニーズの違いがあるため、こういった希望を取り上げるのかといった検討も必要と思われる。

2 連携のツールとして使うために求められること

開発当初から、MWS の活用により、利用者の職業能力について、利用者本人、関係機関、家族等と共通認識を図り、記録を共有することで、密接な連携を構築することを期待されていた（障害者職業総合センター,2007）。本調査では、第2章での『第2節 広域・地域センターにおける MWS 活用の現状』の『3 活用の目的と効果(p.36~38)』及び『第3節 関係機関における MWS 活用の現状』の『3 活用の目的と効果(p.52~54)』において、情報共有の状況を明らかにしている。広域・地域センターにおいては、利用者本人と共に関係機関・家族との情報共有が、関係機関においては、利用者と事業所との情報共有が多かった。村山ら(2008)の調査において、広域・地域センターは医療機関や事業所との情報共有が多く、教育機関や福祉機関との情

報共有が少ない実態が明らかとなっているが、本調査では関係機関においても利用者の MWS 実施結果を他機関や事業所と共有することによる連携が少しずつ進んでいることが分かった。

このような情報共有を行う際に必要となるのが各種様式類であろう。情報共有が進む中、前節や前項でも取り上げたように、“マニュアル・集計結果に関する内容”の改訂が求められている。これは、利用者のごことを少しでも相手（情報共有先）に分かってもらいたい、支援や移行をスムーズに進めたいとする支援者のニーズの現れであろう。今後の改訂にあたり、必要な様式類の整理を進めることが求められよう。

3 トータルで使うことの意味

第2章での『第2節 広域・地域センターにおける MWS 活用の現状』の『3 活用の目的と効果(p. 36～38)』及び『第3節 関係機関における MWS 活用の現状』の『3 活用の目的と効果(p.52～54)』において明らかになったのは、実施した効果について、両者に違いがあり、広域・地域センターがほとんどの項目で「効果があった」と回答しているのに対し、関係機関からは「(3) 作業上の適正行動の習慣化」「(5) 障害の自己受容」「(4) 自己認知の促進」について「効果がなかった」とする回答があったことである。広域・地域センターにおいても「(4) 自己認知の促進」は「あまり効果はなかった」とする回答が散見された。

前述のように、実施方法や実施後の利用者への対応の違いで効果の実感に差が出たのではないかと推測され、効果を上げるためには、本来推奨されている ABA デザインを援用した活用の仕方や利用者へのフィードバックのあり方が問われているといえる。アンケート調査において、関係機関の回答者の半数以上が「(MWS を) 実施した結果を分析し、解釈する」や「分析・解釈した結果を利用者等にフィードバックする」ことに対し、「あまり自信がない、自信がない」と回答していることから、活用の仕方やフィードバックの課題があると考えられる (p.55 参照)。加えて、アンケート調査では MWS 以外のツール活用状況まで調査していないが、ヒアリング調査において、MWS を活用して利用者の就労支援に成果を上げている関係機関の支援者が「MWS は確かに中核的なツールなので中心だとは思いますが、やっぱりトータルパッケージだから意味があるのかなって思う。トータルだからいいんだろうと。年が経つにつれ MWS がすごく着目をされて、『MWS は買っていますが他は知りません』という所がすごく多い。そういった利用で、それはそれで価値はあると思うが、よいのかなと。トータルパッケージだからこそその意味、MWS を支える M-メモリーノートやグループワークにも意味が・・・(中略)」と述べたように、本来 MWS は WCST や M-メモリーノート、MSFAS といった他の構成ツールとグループワークを併せて使うことを勧めている。MWS 単独で活用することは不可能ではないが、トータルパッケージ開発以降、多くの事例が、WCST で補完手段の有効性を経験し、MWS 簡易版で作業への障害の影響を確認することで、「自分には難しい作業もあるが、こうすれば(補完手段を使えば)うまくいくかもしれない」と自己を認知し、MWS 訓練版で補完手段を習得する訓練を行い、就労(復職)へのモチベーションを高め、MSFAS やグループワークで継続的な障害理解・障害受容の状況やストレス疲労の確認を行うといった一連の取り組みを通して、最終的に「(5) 障害の自己受容」「(4) 自己認知の促進」に至っていた。今回のアンケート調査の結果は、MWS 以外の活用状況は不明であるが、MWS 単独で活用する限界も示しているのかもしれない。

また、開発担当であった刎田氏は新規ワークサンプルとして、「MWS はトータルパッケージの本質ではないから作業としては何でもいい。何らかの作業を取り入れ、例えば、作業終了を報告する、作業の仕上がりをご自己確認する、進捗状況の自主管理をする、ここからここまでの勉強をこんなふうにするというスケジュールを事前に作らせて、毎日の報告を決められた報告用紙だけでなく、コミュニケーションも入れて行く。こういったセルフマネジメントスキルとコミュニケーションスキルを併せて、かつ、不安や脳疲

労の対策を徹底的に自己管理させ、コントロールしてもらおう。本質はセルフマネジメントであり、休憩のとり方、不安、幻聴、症状のコントロール、そういったことのセルフマネジメントをメインターゲットにした取り組みをした方が良い」と述べ、ワークサンプルそのものの開発ではなく、それに付随する支援のあり方を認知されるような方向性を示していた。この提案は、MWS を作業課題として活用することに意義があり、それだけで「(5) 障害の自己受容」「(4) 自己認知の促進」に至るのではなく、作業を行う中で捉えていかなければならない側面をきちんと捉え、それに対する支援を行ってこそ、「(5) 障害の自己受容」「(4) 自己認知の促進」に至るといふ考えから提案されたものと考えられる。

MWS が販売されているだけに、希望すれば誰にでも手に入れやすくなっているが、MWS だけが一人歩きしないよう、他のツールやその使い方、関連についてなお一層周知が必要であろう。

4 研修のあり方

トータルパッケージ全体を紹介する機会は、現在、研修用 DVD のみに留まっている。しかし、この DVD 活用率は、広域・地域センターでは「全て見て活用している(7.1%)」「必要なものだけ見て、活用している(25.0%)」の合計 32.1%、関係機関では「全て見て活用している(5.2%)」「必要なものだけ見て、活用している(34.5%)」の合計 39.7%であり、決して高い活用率とはいえない状況である。

こうした中、アンケート調査では「定期的に研修会を開き、どのように利用、活用すべきか教えてほしい。」といった研修要望が、改訂希望の欄に敢えて記載されていた。現在、研究部門が直接関係機関の支援者等に行う研修は、年 3 回 2 時間半程度の就業・生活支援センター向け研修のみとなっている。

このまま現状が続くのであれば、購入者は増えても、本来の推奨している活用方法は浸透せず、今以上に「効果がない」と感じる支援者も増える危険があろう。また、MWS に関するスキルや知識が不足したままであれば、他機関の支援者へ活用方法を研修できるようなエキスパートの育成は不可能であろう。

新たな MWS のワークサンプルを開発するにあたっては、ただ単にワークサンプルを追加作成するだけでなく、現状の様々な課題についても今一度振り返り、特に研修のあり方についてはその方法を考える必要もあるだろう。

引用文献

村山奈美子・小松まどか・位上典子・小池磨美・野口洋平・加治雄一・加賀信寛・望月葉子・川村博子(2008)

トータルパッケージの活用状況についてー広域・地域障害者職業センターにおける活用状況の分析ー、第 16 回 職業リハビリテーション研究発表会, pp.332-335.

障害者職業総合センター(2007)職場適応促進のためのトータルパッケージ ワークサンプル幕張版 実施マニュアルー理論編ー.